
スターゲイザー

としくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スター・ゲイザー

【Zコード】

Z3045D

【作者名】

としくん

【あらすじ】

広大な宇宙の中では、常に星が生まれて死んでいく。その中で生命の死というのは、一瞬の花火のような出来事でしかないのかもしれない。だが、生命はその一瞬の輝きに全てをかけてこの永遠ともいえる時間の中を駆け抜けていくのだ…星を見つめながら…

1、その男、ジライ

広大な宇宙の中では、常に星が生まれては死んでいく。その中で生命の死というのは、一瞬の花火のような出来事でしかないのかもしれない。だが、生命はその一瞬の輝きに全てをかけてこの永遠ともいえる時間の中を駆け抜けていくのだ…

星を見つめながら…

太陽系のある銀河から東へ約百万光年。その星系は存在する。

そこではいくつもの星が協力し、一つの巨大な国家を構築していた。貿易連合、軍事連合、行政連合…それ以外にも数々の連合を束ねる銀河連合がこの中に存在する。しかし、一見協力しあっているように見えるがそれぞれが常に周りに目を向け、銀河一をつかむための隙をうかがうという一触即発の状態が続いていた。その結果、小さな内戦がたびたび起こり、中にはこの内戦に巻き込まれ消滅する星や種族も出てきた。この事態を非常に重くみた銀河連合は、内戦を終結させるとともに監視を行う為の私設軍隊の結成に着手した。だが、銀河全体の様子から、銀河連合直属の軍隊を結成するには時間がかかり、その間に再び戦争が悪化する恐れがあった。その結果、銀河連合の拠点が置かれる惑星「アモースン」から北へ三光年の距離に位置する惑星「エルーア」へ要請がいったのだ。

「エルーア」とは、古くは古代銀河公国時代から続く永世中立公国である。その歴史は非常に長く、古代銀河時代以前の遺跡も残されている為、他国からの観光も多いくらいだ。自然も多く、リラックスを求めるには最高のシチュエーションを持つた国だろう。しかし、それだけの大國である。銀河連合が軍隊の借用要請を出したところでお底良い返事が期待できるわけではなかった。なぜならば、この国の軍隊は由緒正しい伝統を重んじる騎士団なのである。その名は『ナイツ・オヴ・ラウンド』。古き時代からエルーアを守り続

け、今なお、この銀河の平和と秩序を司る唯一の存在だ。

しかし、その平和も力をつけてきた連合諸国を前に、少しずつ翳り始めている…

1、その男、ジライ

青く澄み渡る空、鳥たちの囁き。天気予報は本日も快晴と告げていた。気持ちのいい朝だ。この澄み渡る空の下で今日もどこかで戦争が起こっているのかと思うと、ヴィスターは悲しくなった。銀河の統制が崩れ始めてから早十余年。一向に平和の兆しが見えない。アーヴナイトの將軍を任されるようになつてからも戦闘の報告を聞くと、たまに戦場へ出たくなる衝動に駆られる。まだ一騎士としての気分が抜け切らないのだろうか…ため息まじりに空を見つめていると、インコムの呼び出し音がなつた。呼び出し先は…この国の参謀長官殿からである。

(ヴィスター将軍、何をしている? もうすぐ定例報告の時間だぞ)

「分かつています、コムン大使。今行くところですよ」

全く、これだから騎士あがりは……といふ通信を遮るよつこしながらインコムの通話スイッチを切つた。

ただの平和大使が偉そうに…

そんな想いを胸に、ヴィスターは少々急ぎ足で会議室へ向かつた。

エルニアのほぼ中心に位置する小高い丘に建てられた宮殿。『ナイトパレス』と呼ばれるそれは気品があり丸みを帯びた屋根はまるで銀河のはずれにある太陽系第三惑星のモスクという建物に似ており、その姿には清らかな崇高さを感じる。その宮殿の三階にある会議室へ、ヴィスターは向かつていた。会議室へ入るとすでにコムン大使が椅子に座っていた。いろいろしているのが良く分かるほど顔が赤くなっている。(彼はストレスを感じると顔が紅潮するのだ)

だいぶおかんむりだな……ヴィスターはそう思いながら自分の席に座つた。

「少々遅れました、大使」

椅子にかけながら彼は言った。大使はフンッと鼻を鳴らす。

「ハン大老がまだ見えてませんが……？」

彼は空いた椅子を見回しながら言った。いつもなら、ヴィスターとコムンの間の椅子に腰掛けているはずなのだが、今日はまだ姿が見えなかつた。

「全く！ 大老も遅刻だと！？ この国はどうなつてているんだ、私の國では……」

「コムンがぶつぶつと一人不満をつぶやいているヒシュウ」という音と共に椅子の上に初老の老人が現れた。

「すまんの、少々遅れた。今日は空がやけに綺麗でな。つい見入つておつたんじや～」

「あなたもですか、ハン大老！ 実は私もなんです」

ヴィスターはコムンの顔がますます赤くなるのをちらッと見ながら言った。この老人とはなかなか気が合うのだ。ヴィスターがアーケナイトの頃からそうだつた。妙に親近感がわく。ハン大老とはそういう人物なのだ。皆からの人望が熱いばかりか、外交に非常に長けておりなおかつ柔軟な考えの持ち主である。『ナイツ・オヴ・ラウンド』の銀河連合への派遣も大老の提案だ。しかし、その当時の将軍は伝統に反すると言いながらズつと反対していがしばらくしたら大老に丸め込まれていた。ただし、あくまで派遣で戦闘はしないとの条件付だが……それでもその効果は大きかつた。派遣を始めた途端に内戦が激減したのだ。これには大老自身が驚いた。こんなに早く効果が出るとは思わなかつたのだ。『ナイツ・オヴ・ラウンド』のネームバリューは偉大だつた。

「大老！ 今日はナイツの定例報告の日ですぞ！ それを遅刻だなんて……私は連合になんといえよのですか！？」

「コムンの顔がさらに赤くなつた。

「すまんすまん、次からは気をつけるよ。では書記長。報告を」
書記長は、スッと頭を下げるから分厚い本（恐らくは報告をまとめたレポートだろう）を開いた。

「ご報告致します。まず、先だって起こっていた『ローラン』の内戦ですが、アークナイト・アン・ジョウナーを交渉役で派遣し無事終結致しました。アン・ジョウナーはただいまこちらへ帰還中であります。この内戦の発端は民族同士の差別行為から起こったようですね。続いて貿易組合の新通貨に関するのですが、未だに協議が続いております。どうも通商連合からの反対が多いようです。まだまだ見通しは厳しいようです。『アモースン』からですが、船の数が足りなくなってきてているようです。我々の船を派遣せよとの事ですが、大老。いかがなさいますか？」

「放つておけ、我々からの提供は『ナイツ・オヴ・ラウンド』の派遣のみにとどめている。これ以上の干渉は銀河の意思に反する、それに船の増産くらいわけないはずだ」

大老は先ほどとは打って変わった口調で書記長に言った。隣ではコムンが忙しそうにペンを走らせている。

「畏まりました、ではそのように返信しておきます。続いて、ヴァルキリー・オーダーについてですが、このところ頻繁に派遣の要請は出ておりません。最近まで忙しかったのでこれを機に一度休暇を取えてはいいかがでしょう？」

「ヴァルキリー・オーダーとは、アークナイト同様『ナイツ・オヴ・ラウンド』の中心的存在である。アークナイトは剣を主体としているが、こちらはジャベリンのような槍系の武器が主体だ。どちらかというと、アークナイトは交渉を中心とする任務が多いが、戦闘に関してはヴァルキリー・オーダーの方が派遣が多い。」

「そうだな、最近は彼らも忙しかったであろうしな。負傷者も多かつたはずだ、今はゆっくり養生させるべきだろう。あとはアークナイトに任せておけばいい。なあ、ヴィスター」

大老はいたずらっぽく笑いながらヴィスターの方を見た。ヴィスター

も負けずといったらつぱい笑みを返す。

「そうですね、ここ最近は、ヴァルキリー・オーダーに頑張られていましたからね。しばらくはアーケナイトにさせましょう。ところで書記長、一週間ほど前に貿易船が何者かに襲われたという報告を聞いたが、誰か調査に派遣したのか？」

「あ……はい。ちょうど一人非番の者がいましたので……はりきつて任務にいきましたが……」

書記長は気まずそうに答えた。

「それは誰かね？」

大老に尋ねられ、書記長は申し訳なさそうに言った。

「……アーケナイト……エン・ジライです……」

『『ヒル』ア』から北に二十光年、惑星『ロドロウン』は存在する。貿易連合を中心とした商業国家だ。主に食料の輸出が多く、ここでとれる大麦で作ったパンは銀河一だといふほどの評判だ。その中心都市から東南に二十キロほど進んだところに、『ガノン』という街がある。縁が多く、空気の綺麗なところだ。そして、この街の情報集積センターに一人の男が入っていった。髪はブラウン色の短髪、身長は一八〇センチ程。黒いローブのようなマントに下には和服の着物のような上着にズボン。目は青色に輝き、腰には剣の柄のような物がかかっている。彼は、ゆっくりとした足取りで中央カウンターへ向かっていく。

「失礼、ちょっとお聞きしたいことがあるんだがいいかな？」

ロドロウン人の女性が見上げた。彼らはとても知的な民族だ。探究心にあふれ、いつでも知識を求めている。そして、この銀河系では人間の次にハンサムな…民族のはずだ。そのハンサムな民族のクリツとしたつぶらな縁の瞳が彼を捕らえた。

「はい、何でしょうか？」

「一週間ほど前なんだが、この星域の近くで貿易船が襲われたと言

うことを耳にしたんだが、……何か情報は来ていないかと思つてね」「イエス、検索いたしますので少々お待ちください」

ありがとう、と彼が言つと彼女は指を高速で動かしながら情報の検索を開始した。そう、彼らはこういった情報処理にも長けているのだ。そして十秒もたたないうちに検索結果が出た。

「貿易船の事故……ありますね、ちょうど一週間程前になります。襲われた船は……大変！ デュオレンシス国籍ですわ！」

「デュオレンシス？」

「ええ、アマゾネスの国の事です。彼女たちは普段は温厚なんですが、一度敵意を示されるとたちまち攻撃的になるんですよ。自分達の船が襲われたとあっては恐らく黙つてはいられないでしょうね」

彼女はとても不安げに言つたが、彼の言葉で笑顔を取り戻した。

「大丈夫、僕らが君たちを守るさ。そのために我々が存在するんだ」「頼もしいお言葉ですわ。隣町にある国立病院に船員の一人が入院しているようですね、一度お尋ねになられては？ ミスター・ナイ

ト

そう言いながら彼女は情報のページを「ペーパーし彼に渡しきれた。

「ああ、ありがとう」

彼はそう言ってセンターを後にした。

ロドロウン国立記念病院。中心都市マクスガイの中にそれはあった。何だ、隣町どころか首都じゃないか。彼は来た途端そう思った。マクスガイは高層ビルがあふれ、空中をスカイカーが飛び回っている。ロドロウンの成長の証だろうが、彼はとてもなじめなかつた。騒々しい所は性に合わないんだろう。いつも一緒に飛び回る相棒なら喜ぶだろうが、彼は今休暇でバカンスを楽しんでいるはずだ。時間もあまりないので病院へ向かおうとしたその時、懐にしまつておいた通信インコムのベルが鳴った。こんな街中で……身元がばれたら厄介だ、と舌打ちながら彼は路地裏に入り、インコムの通話スイッチを押した。

「「こちらアーヴナイト、エン・ジライ。何か?」

(ジライ、ヴィスターだ。今どこにいる?)

通信はエルニアのヴィスター将軍からだつた。一体何があつたのか
? 疑問が走る。

「現在惑星ロドロウンにて、先だつて起こつた貿易船事故の調査を
しているところです。国立病院に船員の一人が収容されているとい
うので向かつている途中なんですが……」

(そうか。ジライ、任務の途中だが直ちにエルニアに帰還してくれ。
とんでもない事が起こつた)

ヴィスターの声に緊張が走つたのを、ジライは聞き逃さなかつた。

「何ですつて! ? 帰還する? 一体何が起こつたんです?」

(それは帰つてきてから説明する。非常召集なのだ)

ジライはいらついた。やつと事故の手がかりをつかんだのにこのま
ま帰れるか! 彼はインコムの先にいるヴィスターに向かつて叫ぶよう
に言つた。

「帰りません! 自分の任務を途中で放棄するなど僕にはできない
! 今ようやく真相解明まで来ているんです! 状況説明があるな
ら今ここでお願ひします。僕はこれが終わるまで帰りません!」

ふつとういうため息まじりの音がインコムを通してジライの耳に
入つた。恐らくヴィスターはひどく困惑しているんだろう。しばらく
沈黙が続いた後、深刻そうな彼の声がインコムから流れた。

(一週間前、アマゾネスの国『デュオレンシス』が消滅した。まだ
何者が攻撃したかは分かつていない。襲われた船は『デュオレンシ
ス』の王族の船だ。乗つていたのは、恐らくは王家の者だろう。そ
の病院まではこちらも突き止めていたんだ。だが、下手に動けばま
だ潜伏している敵に発見される恐れがある。事態を重く見た銀河連
合は非常事態宣言を発令した。それを受けて我々がその病院に収容
されているデュオレンシス人を保護することになつた。そのための
作戦を考えるための帰還命令なのだよ)

ジライは驚いた。一つの惑星が消滅した? 誰が? 何のために?

しかし、今重要なことが一つ判明した。將軍はそのデュオレンシス人を保護するための作戦と言った。ならば簡単だ、一番近いものが行けばいい。時間がないならなおさらの事。ジライはインコムに向かつて叫んだ。

「この任務、僕が引き受けます！！」

インコムの向こうでヴィースタは開いた口が塞がらなかつた。

彼は話を聞いていたのか？帰還命令だと言つのに……

しかし、今その事について議論する時間はなかつた。なんとかしてこの若者をエルニアへ戻さなければ……再びヴィースタはインコムに向かつて口を開いた。

（ジライ、命令を聞いていなかつたのか？　今すぐ帰還するんだ、変な気は起こすな！）

「お言葉ですが、ヴィースタ將軍。そのデュオレンシス人に一番近いのは僕です。時間がないとおっしゃつたのは將軍ですよ。いつたん帰還して作戦を立ててから再びここに来るなんて、そんな時間の余裕はないはずです！」こは僕が先陣を切りますから將軍は応援の編成をお願いします！」

何と無鉄砲な若者だろう、ヴィースタは思つた。確かにこの任務に一番近いのはジライだ。しかし、彼はまだ単独で行動できるほどの信頼は得ていなかつた。行動が無謀すぎるのだ。何度、ヴィースタの肝を冷やしたか分からぬほどに。だが、それは同時に期待でもあつた。弱体化し始めた今のパニッシャーには彼のような者が必要でもあるのだ。しかし……とヴィースタが悩んでいるところをハン大老がインコムを彼から奪つた。

（やあ、ジライ。わしの声が聞こえるかな？）

突然の事でジライは驚いた。何とハン大老の声がインコムから聞こえてきたのだ。

「は……はい、ハン大老？　聞こえます……」

ジライは戸惑つた。実際、ハン大老に会つたことがあるのはアーケナイトの修行を受ける時と、試験に合格しレイブレイダーを受け

取る時の二回くらいしか記憶になかった。こんな間近で（実際はイノコムがあるのだが）大老の声を聞くのは初めてだった。

（ジライ、お主少々無鉄砲だの。仲間の協力なくしてこの任務を遂行するつもりなのか？ 身勝手にも程がある）

ジライは頭を大きく叩かれた気がした。ヴィスターに言われるくらいなら何ともないがさすがに大老に言わるとズシンと来るものがいる。さつき自分が口走った事を、ジライは非常に後悔し始めた。

（まあ、そう言いたいところだがの。ジライ、お主の言う通り一度帰還させてから体勢を整え再びロドロウンまで行くのは確かに時間がかかる。そこでじや、お主一役買つてくれ。我々が体勢を整える間、そのデュオレンシス人を警護してもらいたい。恐らく敵はすでにその辺に潜んである。まだ敵の実態が分からぬままにこちらも大きく出るわけには行かんのでな、時間が許せば姿の分からぬ敵の実態も突き止めもらいたい。どうじや？ 引き受けてもらえるかな？）

ジライは一瞬目の前が真っ白になった。ハン大老が直接自分に命令を下されたのだ。これは非常に大きな名誉になる。大老に認められたということなのだ。ジライは震える声を抑えながら言った。

「大老……よろしいんですか？ 私が……この任務を……？」

その答えにジライは卒倒しそうなくらいの眩暈に襲われた気がした。

（お主に全て一任する。頼むぞ）

これが、エン・ジライである。ナイツ・オブ・ラウンドの中で一番元気で問題児なのだ。しかし、その出生の秘密を解き明かせば皆驚くだら？… その物語は後ほど語ることになる。

『アモースン』から南へ約十光年、そこにはないはずの惑星がつた。銀河の公式星系天体図から抹消された星だ。かつての名は『デュオレンシス』。その首都だったところの中心にある居城、かつてのデュオレンシス城の王座にそれは佇んでいた。暗い王座の間に

輝く赤い瞳。それはまるで何かを照らし出すように鋭いが、視線は違つ何かを捉えていた。

……しくじりおつたか……

不意に王座の扉が開き、そこから黒子に身を包んだ小柄なシュビト族が現れた。手には何やら分厚い本を抱えている。なにやら報告があるようだ。

「閣下、お待たせいたしました。やつとレポートがまとまりましたのでや！ では早速報告させて頂きます」

そう言つとシュビト族は分厚い本を開きペラペラめぐり始め、目的のページに当たるとそこでめぐるのを止めた。

「むう、ついこないだですな。『ギダム』と『ヴィルシア』の星間戦争は終結しました。それから……貿易関係では通商連合と公益連合の間で今だ議論が続いているようですが、こんなもの、我々がどちらかを後押しすればすぐ収まるのに……全く……」

「ぶつぶつと文句を言いながら報告するシュビト族を王座に座る影が制した。

「もうよい、そんな報告はいらぬ。それより、取り逃がしたデュオレンシス人の行方はどうなつていい？」

シュビト族は慌ててページをめぐり始めた。

「ええとですね！ ええと……あ、あつた！ 一週間ほど前からギティアスに調査させております、もうまもなく結果が出るはずですが……」

「ギティアスはすでに失敗しおつたわ、アークナイトに先を越されてしまつた！」

シュビト族は口をあんぐり開けたまま固まつてしまつた。ギティアスを派遣させたのは自分だ、となると失敗したギティアスと共にその責任を取らなければならぬ。となれば、閣下のことだから恐らく殺される。シュビト族は体が震え始めた。冷酷なこの方のことで。おそらく骨も残らぬくらい切り刻まれるのであろう、その想像が自分を押しつぶしそうになり彼は激しく動悸していた。

「どいつもこいつも……もうよ、下がれ。」

王座の影は手で額を抱え込むようにうつむいた。ガッククリと肩を落とし、何か物思いにふけつているようだ。シユビト族は彼の気が変わらぬ内に「失礼します」と言いながらそそくさと走るように王座の間を去った。しばらく静寂が流れ、ふと何かを思いついたかのように影は顔を上げた。そして…

「ヴェネット、いるか？」

そう言うと皿の前の空間がグニヤツと歪み、それがそのまま人の形をかたどりひざまずいた。

「は、ここに」

「うむ、ギディアスが失敗した。」

その言葉に現れた男の目つきが鋭くなつた。影は続けた。

「一週間前、この惑星を侵略した際に逃げ出したランチャーを覚えているな？あの時ギディアスを追跡に出したんだが……まんまと逃げられたようだ。ランチャーは吹き飛ばしたようだが一人生き残りが出たらしい。」影はいらだたしげに椅子のふちをドン！と叩いた。「それでは……私がギディアスとその生き残りを始末すればよろしいので？」

いや、と手でさえぎりながら影は言った。

「生き残りはデュオレンシスの王族に関係している者だ、殺さず生かして連れて來い。ギディアスは通商連合の艦隊旗艦「グナ・ウ・ゼナル」にいる。恐らく近いうちに銀河連合と戦闘になるはず……それに乗じて消せばよい。必ず我々の痕跡を残すな、必ずだ！」

「分かりました」男は立ち上がつた。その背丈は二メートル近く、髪は銀色に輝きその目は赤く光つてゐる。そして彼の腰にはアークナイトの持つレイブレイダーと良く似た武器がぶら下がつていた。「ヴェネット、お前ならうまくやれると信じていてるぞ」

影がそつと消えると、ヴェネットと呼ばれた男は再び空間を歪ませ消えた。

城だつた場所の地下には広々とした宇宙船ドッグがあつた。そこに一機のスペースランチャーがいつでも発進できるように待機していた。整備士が時間を確認していると、そこには、ヴェネットが現れた。準備はどうか？と尋ねると、そこには、ヴェネットが返事が返ってきた。彼は、「苦労と言ひながら整備士にここを離れるように促した。タラップを勢いよく駆け上がりコクピットに乗り込むとふと目に目が止まつた。いつも増して月が輝いている。まるで今から出発するヴェネットをあざ笑うかのように……それを見たヴェネットはニヤリと笑い、キャノピーを閉じエンジンをかけ、宇宙船ドッグを飛び出した。

2、マスター・エース

夕日に照らされたエルニアのスペースポートから、一機のスペースランチャ―が飛び立つた。医療専門のメディカルランチャ―だ。船内には銀河一を誇るメディカルセンターに匹敵する設備と腕利きのドクターやナースが乗っている。目的地はロドロウンの国立記念病院だ。

今朝方、調査に派遣したジライから連絡があつた。内容は次の通りである。（インコムによる音声報告の記録である。）

『アーラークナイト、エン・ジライです。ロドロウンにて調査を進めた結果、例の事故の生き残りであるデュオレンシス人が、ロドロウン国立記念病院に搬送されていることが分かりました。早速駆けつけたところ、極度のショック状態であることが判明。恐らく事故のシヨックだろうとの事ですが、鎮静剤の使用でやつと収まる程の症状です。あまり良い状態であるとは思えません。エルニアのメディカルランチャ―の出動を要請します。状況から判断してかなり深刻と思われます。調査は一旦打ち切り、本国からの命令があるまでデュオレンシス人の身辺警護に当たります。以上です。それから……』（ここからは公式記録にはなっていない、機密記録になっている）

ナイトパレスの自室の窓からメディカルランチャ―の発進を無事見送ったヴィスタは自分の部屋を出てハン大老の部屋に向かつた。大老の部屋はナイトパレスの最上階、もつともエルニアが美しく眺められる位置にある。そここの窓から見えるエルニア湖に反射するようになります。夕日の散光は、見るものを魅了した。

「大老、ヴィスタです。入つてもよろしいでしょうか？」
ヴィスタが到着したようだ。ハンは窓を眺めたま反対に位置するドアに向かつて言った。

「構わんよ、入りなさい。」

失礼します、と言いながらヴィスタが入ってきた。そして、そのまま部屋の中央にある丸いソファに腰を下ろした。なんとも座り心

地がよく、そのまま眠ってしまいそうな感覚に襲われながらヴィス
タは窓に向いた。

「エルニア湖は今日も美しいですね、この時間になるといつも湖が
見える場所まで行くんですよ。私の部屋は湖とは反対の位置ですか
ら。」

「ヴィスター、そんな事を言いに来たんではないんだろう?」

ハンはまだ窓の方を向いたままだったが、その声は不思議とはつきりヴィスターの耳に入った。ヴィスターはハンに心の中を見透かされたような気がして一瞬ドキリとした。何故分かるのだ?銀河の意思はそこまで……人の心まで分かるのか? 疑問が途切れない。だが、ヴィスターはその疑問を振り払うかのように口を開いた。

「ジライの報告をお聞きになりましたか?」

「ああ、聞いたよ。何やら大変な事になつていてるそうだな。」

「そのようです、ロドロウンの記念病院に収容されている『テュオレンシス人』が事故の事を証言したんですけど……」

ハンは振り向き、ヴィスターが座っている向かいのソファに腰掛けた。

「何があつたのか?」

ヴィスターはうなづいた。

「非常に危険な事です。証言によれば、一週間前『テュオレンシス人』のランチャードは襲撃にあつたそうです。その時の襲撃してきたグループなんですが、全員黒いローブのようなものに身を包み、その中の一人が紫に光る剣のような武器で仲間を切り殺していくたそうです。」

「紫に光る剣……」

ハンはしばらく口を閉じた。まるで白らの口から言葉を出したくないようになっていた。

しかし、沈黙は許されず、致し方ないようには彼は口を開いた。

「デュエル・ナイツか……」

ヴィスターは深くうなづいた。

「恐らくは……二十四年前にカイゼル將軍がナイトを率いて、デュエル・ナイツを始めとするヘルの暗黒騎士団を滅ぼしたはずなんですが……」

「何事にも見落としある。我々が長年守り通したこの永世中立公国にもな。その証拠に、今の銀河の秩序も大きく乱れ始めている。先人が守り、貫き通した末に約束された平和もな。常に時代は変化してあるんだ。その流れに乗りながら物事をえていかなければならんのだが、それができん……常に我々は時代に取り残されておる……」

ハンは一度大きくうつむき、しばらくした後、ヴィスターを見上げて言った。

「……ヴィスター、わしらはどうやら古すぎるのかもしねんな。」

その言葉にヴィスターの心は大きく揺れ動いた。自分が信じてきたものが最も信頼している人物に裏切られた？

いや、これは常に自分の中にはつた疑問点でもある。その答えを考えたくはなかつたが、大老も同じ事を考えていた。

「この古くなつた考え方を捨てねばこの時代を乗り切る事はまず無理だの。何か行動をおこさねば……」

「……行動……、例えは革命ですか？」

しかし、ハンは否定した。

「いや、革命は違う。革命は野心家が行うことだ。我々は野心家ではない、ただの平和にすがりつく醜い生き物にすぎん。今の現状を維持する事で安心を得ている小さな存在だ。そんな輩がする事と言えば……改革……かの。今の状態を保持しながら今以上のものを生み出す……そういうことをせねばならんのだよ。しかし、わしらではもう古い考え方でしか行動できん。ならば、今の時代を生きている若い世代に任せるのが一番じや。だがの……」

ハンは殘念そうに……まるで今まで築きあげてきた物をすべて打ち崩されたような……そんな目つきで、ヴィスターに向こうに広がる何かを見つめながら言った。

「彼らでは無理だ」

彼らとは恐らくジライ達の事だらう。それが分かり、ヴィスターの表情もそれとなく暗くなつた。確かに彼らでは無理かもしね。彼らは若い。だが、彼らが幼い時に『ナイツ・オヴ・ラウンド』の規律を徹底的に叩き込んだのはヴィスター達である。古い考えに縛られた者達がまだ何も分からぬ眞っ白な白紙の状態の彼らを指導すれば、その純白のキャンバスには古い者と変わらぬものが描き出される。結果として、同じ考え方を持ったコピーができるが。中にはその考えに反発し変革を試みる者も出るようだが、大概は『ナイツ・オヴ・ラウンド』一千年の歴史の前に敗れ去るようである。

「わしらが新しい考えを持てれば、……その考え方を持つて行動できれば……状況は大きく変わるんじゃがな。……いさか遅すぎたか……」

ハンはふたたびうつむき始めた。

「大老……？」

「すまんな、ヴィスター。しばらく瞑想してみると……何か答えはあるやもしれぬ……『デュエル・ナイツ』の再来も銀河の意思やもしれぬしな」

そう言いながらハンは深く瞑想に落ちていつた。ヴィスターはそれを見届けると深く頭を下げ、静かに部屋を出た。

階段を降り部屋の前の廊下に差し掛かつた時、廊下の向こうから見慣れぬ格好をした者が歩いてきた。ぼろきれのような布を上から羽織り、その下には厚ぼつたいローブのような服をまとつたそれは、ヴィスターの顔を見つけると親しそうに微笑んだ。ヴィスターはしばらくその者を見つめ、それが自分を訪ねてきた古い友人だと気付くといつのまにか駆け出していた。そして、廊下の向こうにいる友人は彼が近づくにつれて少しずつ前進し、彼がもう一步のところまで来ると両手を広げて彼を迎える互いに抱きしめあつた。

「エース！ マスター・エース！ 久しぶりだな！」

「はつはつは、ヴィスター！ 君も変わりなしのようだ。」

二人はしばらく抱き合い、お互の背中をポンポンと叩いたりしながら、友人の無事を確かめ合った。

再会の抱擁が終わると、ヴィスターは改めて彼を見た。顔に深く掘り刻まれた皺、昔負った傷跡はまだ残っている……それに幾分か細くなつた腕、背中をわずかにおせばよろめきそのまま倒れてしまいそうなほど不安定な下半身。

明らかにマスター・エースには老いが広がっていた。かつて、銀河最高の剣士と謳われ、エルニアの騎士団の中でも最高の称号と言われる「パニッシャー」を与えられた彼は、もはや遠い昔の人物になつていたのだ。

「……老いたな、エース……」ヴィスターは思わず口にしてしまった。「いやあ、お前さんには負けるさ。しきたりとは言え、自らの流れる時を止めてしまうんだからな。私ならとてもできなかつた事だ。」

ヴィスターは苦笑した。本来ならば、将軍の地位に收まるはずだったのは、このマスター・エース・マシュロウなのだ。だが、彼は自らそれを辞退したのである。なぜならば、当時既に病が彼を蝕んでいたのだ。そして辞退した。それを聞いたヴィスターはひどく驚いた。自分は将軍の座には相応しい者ではないと思い込んでいたからだ。実際、エースの辞退は皆を失脚させ、その後に将軍の席に座つたヴィスターはひどく罵倒された。だが、ハン大老が「エースは自分には至らぬ所がありまだまだ修行を重ねなければならん、しかしヴィスターなら私以上にエルニアに尽くすことができる。そう言って、ヴィスターを推薦したのはエース自身だ！」と皆に伝えた時、それまで不満が立ち込めていた皆の信頼が一気にヴィスターに集中し、また、より一層エースの株が上がる事になった。そしてエースはアーヴナイトの後継者を育てるためマスターになり、最後の弟子ジライが全ての修行を終えレイブレイダーを大老から渡された日、このエルニアを去つたのだ。

「ところで、今日はどうしたんだ？ 何か用事でもあつてきたのか

？」

「いや、ちょっとな……」

エースは少しくぐもつた感じになつた。

「分かつた！　ハン大老だな？　残念だが大老は今は瞑想中で……」

「それも違う。」

「じゃあ、何だ……そうか、公国図書館に用か？　あそこなら何でも資料がそろつているし……」

いい加減、ヴィスターの声がうつるさくなつたのか、エースは少し口調を強めて彼の言葉を遮つた。

「違う！……違うんだ、ヴィスター！　話を最後まで聞け！　何も用事がないのに私がわざわざここまで来ると思つているのか！？」

「ああ……」エースの声に圧倒され、ヴィスターは一瞬ビクッとしました。まさか彼がこんな強い口調で遮つてくるとは思わなかつたからだ。よほどの事があつて来たのだろう、エースの目は先ほど抱擁とはうつてかわつて真剣なものになつていた。

「すまない、それじゃ、私の部屋で話さないか？　ちょうど近くだしな。何か、お茶でも出そづ」

そう言つて、ヴィスターはエースを自分の部屋に招き入れた。

部屋の中央には丸テーブルがあり、その上には綺麗な花が花瓶に生けてあつた。ヴィスターの趣味にしては少々似合わんなど……エースはそう感じた。彼はキッチンに入り、お湯を沸かし始めた。少し時間がかかるようなので、彼は先にお茶菓子を持ってキッチンから姿を現した。その姿があまりにも不格好すぎてエースは苦笑した。ヴィスターは彼に椅子に掛けるよう手で促した。

「すまんな、まだお湯を沸かしてなくて……少し待つてくれ。最近うまいアロワティーが手に入つてね。一人で飲むには量も多いし……皆に配つてるんだ。良かつたら君も持つて帰つてくれ。」

座りながらヴィスターはうんざりして言つた。「まだ3ダースは残つてる。」

エースはまた苦笑いした。昔よりもユーモアになつたようだ。

「最近のナイスはお茶を飲むのが流行つてゐるのか？」

「いや、これはお土産だ……ただ……もらいすぎた。それだけだ。」

少々困り顔になりながら、彼は「お湯が沸いた」と言いながら再びキッチンに消えていった。なるほど、たくさんあるようだ。キッチンにお茶の箱らしき物が山積みになつてゐるのをエースは見た。あれの一部をお土産に持たされたら一人では持ちきれないな、ギガントを呼ぶか……そんなことを考えているとヴィスターがお茶を運んできた。いい香りを放つてゐる。そういえば、部屋に入る時こんな香りがした。なんだか心地よい、懐かしい香りだ。

「そろそろいいんじやないか、エース？」

コップにお茶を注ぎながらヴィスターは言った。

「ここに来た……いや、私に会いに來た理由……と言つべきかな。話してもらおうか。」

口に運びかけたコップを傍に置いて、エースはヴィスターを見た。そして、さつきまで腰に付けていたバッグに手を回し、外したらそのままテーブルに置いた。

「実はな、これをジライに渡してもらいたい。」

そう言いながらエースがバッグから取り出したのは……剣の柄だつた。先からはナックルガードが伸びており、それが柄のグリップの先までできている。装飾も煌びやかで長年愛用してきたのか、清らかな崇高さをかもし出すそれは……レイブレイダーだ。ヴィスターは困惑した顔でエースを見た。彼の顔は何か大きな決断をしてゐるそんな顔だつた。

「エース、どういうつもりだ？　これは君のレイブレイダーだ！」

「これを……何故ジライに？」

ヴィスターは訳が分からなかつた。レイブレイダーはアーカナイトの証だ。これは自らの命を光に刃に換え、敵を打ち碎くための武器だ。平和を司るエルニアの象徴なのだ。それを手放すのは……とてもヴィスターには考えられなかつた。

「何故だ？ 何故ジライに……？」

戸惑つた顔で迫るヴィスターにエースは静かに応えた。

「これは、私からの餞別なのだよ。」

「……餞別……？」

エースはお茶の入ったコップを口に運び、それを静かにテーブルに置くと話しかけ始めた。

「こないだ、ジライが私の所を尋ねてきてな。近くを通りがかつたそなんだが……私が元氣かどうか気遣つてくれたらしい。それを知らずに私はあの子を追い返してな、ギガントに偉く怒られたよ。ジライは私が病を患つている事を聞いて来てくれたらしい。昔から優しい子だつた。誰よりも……厳しい修行しか与えない私を他の弟子は避けていたが、あの子だけはいつも傍にいてくれた。私を父親のように慕つてくれていた。」

エースは少々うつむき加減になつた。うつむきながら、重そうに口を開く。

「あの子が修行を終えてアークナイトに加わつた時、本当はこれを渡したかった。」

そう言つて、自分のレイブレイダーをそつと握つた。

「だが、その時私はもうパレスにはいなかつた。このエルニアを去つていたからな。引退した後はずつと使わずにしまつていた。たまに出しては磨いて、またしまつて……いつか最愛の弟子に渡す日が来るまでは……だが、私にはあまり時間が残されていない」

エースはヴィスターの顔を見つめながら言った。

「だから、一番の親友であるお前に……こうして頼みに来た。」

「だが、それではお前の武器がなくなる……自分の身を守れなくなるぞ！」

「それなら心配はいらない。ギガントが護身用にレイブレイダーのレプリカを作つてくれた。これがなかなか良くなきててな、本物にひけを取らん物になつとるんだ。」エースは再度、ヴィスターに頭を下げた。

「頼む。ジライに渡してくれ。」

ヴィースタは願いをしぶしぶだが、承知してくれた。生真面目な彼の事だ、エースのこの決断には内心反対のはずだらう。だが、やはりヴィースタに頼みたかったのだ。エースがこのユルニアを去った後、ジライの成長を見守つてくれていたのは全てヴィースタなのだ。恐らく、エースの病気を教えたのも彼だらう。昔からそういう男だった。心配性なのは変わつていらないな、そう考えながらエースはふと昔を思い出していた。

遠い昔だ……まだ彼がアークナイトだつた頃……一人の男がいた。才能に恵まれ、誰よりも努力を惜しまない。そして、皆に愛された……彼の名は……

エースは思い出すのを止めた。彼は死んだ、闇に食われたのだ……遙か昔に……今はもう生きてはいまい……もし生きていたら……

そんな事を考へてゐるうちに、エースはランチャーの発着場に着いていた。手前から2番目、23番ゲートに彼が乗つてきたランチャ一が置いてあつた。その入り口から、なにやら固まりが見える。どうやらロボットのようだ。ランチャーを行つたり来たりしているそれは、ウォンローリー社が開発した武装アームノイドを家庭用に改良したものなのだが。だが、戦闘機能は失われていない。なぜなら、彼にはいつも訓練を手伝つもらつてゐるからだ。なかなか筋がいい。機械にも精通しており、レイブレイダーのレプリカも作れるほどの腕の持ち主であり、エースの今では一番の……友人である家族だ。名前は……

「ギガント！」

エースが呼ぶと、アームノイドが振り向いて手を上げた。

「はい！ マスター、ちょっと遅いよー 予定時間すぎてるー！」

ちょっとどご機嫌斜めかな、それもそつだらう。30分ほどの予定が一時間近くに延びてしまったのだ。エースは「すまん、すまん」

と言いながらランチャーに乗り込んだ。

「もう出発準備はできているのか？」

「当たり前だよ！　マスターすぐ戻るつていうからいつでも飛べる
ように準備してた！　マスター遅い！」

やはり、ご機嫌斜めだ……エースはもう一度「すまん、すまん」と言い、今度最高級のオイルを入れてもらえるように頼むよ、と言うとようやくギガントの機嫌が直った。まるで子供のようなアームノイドだが、エースは非常に気に入っていた。アークナイトを引退した後、ウォンローリー社の知り合いを通じて何か家庭用のロボットはいかないか？と尋ねたところ、出てきたのが彼だった。もう型遅れで前のオーナーが廃棄するところを格安で譲つてもらったのだ。ところどころ手直しさなければならなかつたが、状態は良く、簡単なメンテナンスで事は足りた。最初は慣れない相手で難しい事もあつたが、今では彼の大変な家族であり友人だ。彼がいてくれるお陰で寂しい思いをしなくてすむ。

「さあ、帰ろうか、ギガント。家の掃除もしなくてはな、最近家を空けていたから汚くなっているはずだ。それから……」

「あれ？　マスター、ジライの所には行かなくていいの？」

「……？」

エースが怪訝な顔で伺うと、ギガントは言った。

「さつき、軍の通信を傍受した。ここメディカルランチャーが通商連合の艦隊に捕まつたって。何でも領海侵犯だとかなんとか乗つてるのはジライだつて、誰かが怒鳴つていたよ。」

そして手をまた振り上げた。

「やれやれ……」

ため息をつきながらエースはギガントの隣に座り言った。

「進路を変更してくれ。通商連合の星系だ。ジライを救出に行くぞ。」

「了解！」と言つてギガントはスロットルを開いた。一人を乗せた

ランチャード！と音を立てながら空に飛び立った。目指すは通商連合の星系である。大気圏を抜け宇宙空間に出ると、ランチャーはすぐにハイパードライブの座標を設定し超空間に消えていった。

バジ・スチーラーで造られた独房は非常に良くなっていた。ドアには囚人が触れないように高圧電流が流されているし、部屋の四隅には監視カメラが終始見張っている。こりや下手には動けんなあ、ジライはそんな事を考えていた。そもそも、何故こうなつたかと言うと、知らぬ間にメディカルランチャードの全自动システムが書き換えられていたのだ。それも、じつ寧にハイパードライブの到着座標が通商連合の旗艦の目の前である。捕まらないはずがない。もしこれを逃せば、この旗艦の艦長は即座に処刑されるだろう。恐らくドクター達は捕まり、今頃は船の機内食にされてしまったかも知れない。運が良ければ奴隸か捕虜か……考えがよろしくない方向に向いている。デュオレンシス人はどうなつたんだろう？早く救出に行かなければ……しかし、今まともに動くのは危険すぎる。唯一の武器であるレイブレイダーも敵に奪われてしまった。全く……マスター工ースに知られたら殺されるな……またも良くない考えだ。こういふた考えは本当に物事をよろしくない方向に運ぶ。今がまさにそうだろう。こうしてやすやすと敵に捕まり牢屋に入れられ敵が何らかの行動を起こすまで待つ。この待つ間がよろしくないのだ。非常に良くない。やはり、敵が行動を起こす前に行動すべきだな、ジライは勝手に結論を導き出した。そして、強引にドアを破ろうとして、前に立つた時……急にドアが開いたのだ。ドアの前には衛兵が立つておりいかがわしげにジライを見ていた。「何をしている？」衛兵はマシンガンを突きつけながら尋問してきた。

「いや……何も……いい部屋だなあと思いつながら見てただけ……うん、ほんと！」

ますます相手の疑惑を招いたようだ。衛兵は余計疑いのまなざしをぶつけてきた。

「まあいい。ギディアス卿がおまえに会いたいそうだ。まもなくい
らっしゃる、そのまま待て」

「ギディアス？ そんな知り合い俺にはいないぜ……と、ジライは
必死に思い出そうとしていたが……思い出せなかつた。何をしてい
るんだ……とあきれたように衛兵の黒いバイザーがジライの顔を映
していた。すると、ジライから目を離したかと思うと突然衛兵の姿
勢がしゃきつとなつた。ドアの隙間から廊下の方を覗き込むと衛兵
が誰かに向かつて敬礼をしている。さらに覗こうとすると衛兵がジ
ライの襟をつかみ、強引に引っ張り上げた。

「ギディアス卿だ。」

そう言つ衛兵の手を払いのけて目線を戻すと、身長の高い男と目
があつた。髪は赤く、肌は灰色っぽい。目の色は金色に輝いている。
アロ・プラド星系の人種だ。なるほど、黒いローブに黒い武道着…
…まさに全身黒ずくめの服装に身を包んでいる。腰元に目をやると
…レイブレイダーに非常に良く似た武器がぶら下がつていた。デ
ュオレンシスの船を襲撃したのはこいつか……？ と考えていると、
目の前の男が笑いながら話しかけてきた。

「くつくつく……おまえが間抜けなアークナイトか……確かに抜け
た顔をしているな。」

「そいつはどうも……あんたも何か栄養失調気味な顔色だぜ、ちや
んと飯食つてんのかよ？」

ジライは皮肉たっぷりに返したつもりだったが、相手には全く効
いていないようだつた。

「ふん……それで抵抗したつもりか？ 貴様のレイブレイダーはこち
らが預かっている。武器がなければ何もできやしないくせに……あ
まりいきがるのは止めておいたほうがいいぞ。貴様の死期を早める
だけだ。」

ギディアスは再び高笑いをし始めた。その笑いにジライはかなり
ムツとした。どうやら、彼の笑いは周りの神経を逆撫でするようだ。
「まあ、本国に着くまでおとなしくしていてもらおうか。貴様の処

分はその後決定する。せいぜい監獄の中であがくんだな。フハハハ
！！

「い、言つどギディアスは衛兵に「しつかり見張つてひ」と言い残し、軽やかな足取りで監獄の廊下を歩いていった。

「さあ、中に入つてろ。」

衛兵がジライの腕を掴み、再び監獄の中へと促すとジライはそれに抵抗せずおとなしく従つた。去つたギディアスの背中を睨みながら……

ギディアスが旗艦のブリッヂに戻つてくると見覚えのある男が立つていた。彼はギディアスを見ると窓に背を向け組んでいた腕を外した。

「ヴェネット！」

そう言い、ギディアスは彼に近づいて行つた。だが……

「聞いてくれ！逃がしたデュオレンシス人を捕まえたと思つたらアーケナイトが一緒にくつついてきてよーもうけたぜ！これであの方に殺されずにする！早く次の任務に……」

「残念ながら……次はないんだよ。ギディアス」

ヴェネットはそう言いながら、腰にぶら下がつていた武器を外しエネルギーの刃を出現させた。そのエネルギーは紫色に輝き、うなつていて、そしてギディアスの顔は凍つたように固まつた。

「ギディアス。あの方はおっしゃつたはずだ。二度目はない……とな。つまり失敗は一度でも許されなかつたということだ。今回は特にそうだった。しかし、おまえはターゲットを取り逃がしたばかりか、アーケナイトという厄介者まで連れてきてしまった。この始末、あの方にどう報告するつもりだ？」

ヴェネットの視線がきつくギディアスに突き刺さる。

ギディアスはそのまま目線を落とした。自分の手を見るとひどく震えており、顔からは大量の汗が吹き出している。頭が真っ白になつていく。さつきまではひどく自信たっぷりだったのが一気に落ち

込んで行く。まるでガンストライカーで墜落して行くようだ。そして気がつくと腰にある武器に手を回し、ヴェネットに斬りかかつていた。

「うおおおお……」

ギディアスは叫び声を上げながらレイブレイダーを振り回していく。唸り音をあげながら、それはヴェネットに振り下ろされいく。が。彼はステップを踏み、簡単にかわしていく。ギディアスは振り下ろした切つ先をそのまま横一文字に振りぬいた。しかし、これもヴェネットにはかすりもしない。代わりに、ブリッヂのコンソールや椅子、階段、果ては乗組員さえもその刃の餌食になってしまった。その場にいた者は一目散に逃げはじめるがヴェネットはジャンプし逃げ道を塞いだかと思うと次々と切り殺した。それに乘じてギディアスが死角からきりかかったが、いとも簡単によけられる。そして、紫の光を振り回しながら、やつとの事でヴェネットをブリッヂの端まで追い込むと、エネルギーの刃はためらう事なく彼めがけて振り下ろされた！ これにはヴェネットも答えた。剣を持ち上げ受け止めた。唸りを上げながら刃が交差する。エネルギーがぶつかり、弾ける音がブリッヂ中に響き渡った。

ギディアスは決して弱いわけではない。並の相手ならほぼ一撃で勝利を決める事ができる。だが、今回ばかりは相手が悪い。ヴェネットがギディアスの刃を受け、それをそのまま押し返すと同時に……

ギディアスの頭は弧を描きながら宙を待つた。残された首から下は見えなくなつた敵を探すように刃を振り回すと力尽きたかのようにそのまま沈み込んでしまつた。

ギディアスの体が動かなくなつたのを確認すると彼は刃をしまい、腰に戻すとコンソールに向かつた。そこにはまだ身震いしているクルーが突つ立つていた。彼は、慈悲なくクルーの首を切り飛ばしコンソールに手をついた。船の自動制御システムを呼び出す為だ。システムを起動させ、彼の指が向かつた先は……自動消滅システム……自爆装置である。それを呼び出し、設定を確認した。

まず、艦内アナウンスを切り……これは、この船から彼以外の脱出を防ぐためだ……それから脱出ポッドも全て射出した。後は自爆の時間の設定を残すのみ……

彼は時間については少々悩んだ……短くすると狩りをする時間がなくなる。しばらく考えた後、彼は自爆を一時間後にセットした。一時間もあればこれくらいの船ならば簡単に乗員を狩る事ができる。終わつた後はデュオレンシス人を連れて乗つてきたランチャードで脱出すればいい。船の爆発は銀河連合のスパイが仕掛けた事……とでも報告しておけばいいだろう。そうすれば貿易組合と銀河連合の戦争が始まる。完璧だな……おっと……アークナイトも消しておかねば……こつして彼は死体が併むブリッヂを後にした。狩りの始まりだ……

監獄のベッドの上でうたた寝していたジライは目を覚ました。外が騒がしくなつたのだ。最初は目的地にでも到着したのかと思ったが、違う。どうやら緊急事態のようだ。衛兵が「脱出カプセルがない！」などと言いながら走り回つている。あちこちでマシンガンの音も聞こえる。敵でも侵入したのだろうか。銃声が激しくなつてきたかと思うとパタリと止んだ。ジライは気になつた。気になつたがドアには近づけない。仮に触れでもしたら、彼の体を高圧電流が駆け巡り焦がすだろう。とてもじゃないが……近づくのは自殺行為だ。困つたようにドアに背を向けると、何とドアが爆発した！「うおおお！」とジライは吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。「ジライ発見！」聞き覚えのある声がする。朦朧とする意識の中でジライは声の主を探した。目を凝らすが煙で何も見えない。「誰だ？ 誰が俺を探してる？」尋ねるとすぐ前から返事が返つってきた。「ジライ！ 僕だよ、ギガントだよ！」

「ギガント！？」

なぜここにギガントが？

考えても仕方のない事なのだが……考へてしまつ。しかし、出る

答えは一つなのだ。それも、ジライにとつてはとんでもない答えである……まさか……と考えていたら煙の向こうで声がした。

「全く……出来の悪い弟子を持つと苦労する…」

……やつぱり……ジライの予想はピタリだった。ジライは恐る恐る煙の向こうの声の主に話しかけた。

「お、お久しぶりです。マスターエース……」

そう言うと煙の中から古いローブを身にまとった老人が現れた。手にはレイブレイダーが握られている。

「おまえ、レイブレイダーはどうした？」

恐れていた質問がエースの口から飛び出た。ジライは冷や汗をかきながらそれに答える。

「え……あのですね……ずっと持っていたんですが……」答えはエースが言つてくれた。

「奪われたのか、ばか者が！　おまえアークナイトになつて何年になる？　この武器の重要性が未だに……やかましい……」

と言いながら身を翻すと敵の放つたビームを刃で弾き返し、そのまま敵に返した。この老人は一体何歳だ？　病氣なんて絶対嘘だ……

！　ジライはそう思つた。そう思わずぐらい動きが鮮やかなのだ。

「とにかくまずは脱出だ。説教はそれから腐るほどしてやる。ギガント、レプリカを貸してやれ」

エースが言うと、ギガントはレイブレイダーそつくりの柄を取り出しジライに渡した。渡しながらギガントはこいつそりと「マスター。あんな事言つてるけどすぐ心配してたんだよ」と耳打ちしてくれた。ジライは涙が出そうになつた。病氣の体を押してここまで駆けつけてくれたのだ。エースは昔からそつだつた。不器用だが、どこか優しい所があるのだ。ジライの修行時代もそんなことが山ほどあつたのを覚えている。

「行くぞ、この船はそつなくはもたん！」

そう言いながら駆け出すエースにジライ達も続いた。

ランチャヤーの発着場に向かう先々には無数の死体があつた。しかもどれも銃で殺されたのではない。何か、強力なエネルギーで切られたようなものばかりなのだ。

「マスター、この死体達の傷……これは……」「む……間違いないな、これはレイブレイダーの傷跡だ。しかし、これは酷すぎる。」

ジライは死体の傷を眺めながらエースに聞いた。

「一回の傷ではないですよ、これは。簡単には死なないよう切りつたあとで滅多切りにしている……かと思えば、一回で急所を突いている……まるで殺すのを楽しんでいるようだ。」

それを聞いてエースの頭にある名前が浮かんだ。しかし、確信がない。彼らは滅ぼしたはずだ……しかし事実がじわじわとエースの考えを埋め尽くそうとした時、ジライが「あ！」と声を上げた！

「どうした？ ジライ？」

ジライは青くなりながら答えた。

「大変です、マスター……デュオレンシス人の患者を探すのを忘れていました……」

エースは呆れてしまつた。ジライはエースが救出に来てくれた事に感激しすぎて本来の任務を忘れていたのだ。思わずエースは怒鳴つた。

「この馬鹿者が！！ 任務を忘れるとはどういう了見だ！！ 貴様やる気があるのか？ 私はそんな風に指導した覚えはないぞ！」

エースの声は廊下に響き渡るほどの大きさだった。ジライはすぐみあがり、

「も、申し訳ありません！！ 今すぐ探しに……」

と言つたがエースは反対した。

「今からでは間に合わん！ ギガントに行かせる！！ 聞いていたな、ギガント。生体センサーを最大にして探せ！ 恐らく医療区間にいるはずだ。急げ！！」

「了解！」と言いながらギガントはヒューンと音を立てながら捜索

に行つた。エースがジライのほうを向くとジライは目を下に向けている。エースをふうと息を吹きだした。

「ジライ、我々は常にプレッシャーと共に行動している。それはアーヴナイトでいる限り永遠に付きまとつ。それを忘れるな。分かつたな。」

「はい……マスター……分かりました。」

エースはうなずき、「さあ、急げ！」と言つて再び駆け出した。と、その時、エースは走るのを止めた。

「マスター？」ジライは嫌な予感がした。何か、邪悪なモノが近づいてくる。恐ろしく感じるのだ。

「ジライ、先に行け。」

といながらエースはレイブレイダーを取り出した。エースも同じものを感じたようだ。

「え……マスター？」

「早く行け！！おまえでは勝てん相手だ！」

敵が来るのか？ジライには分からなかつた。しかし一人で戦えば勝てるはず……だが……

「何をしている？早く行け！私の言つていることが分からんのか！」

ジライはエースの気迫に押され、分かりました……と言い走り出した。それでいい……ふいに見送るエースの表情が柔らかくなつた。そしてジライが走り去ると同じくらいにその邪悪なモノが姿を現した。髪は銀色に輝き、目は赤く、手には紫色に輝く光刃を吐き出すレイブレイダーが握られていた。全身を黒い服で飾つたそれは、まるで死神を象徴しているようだ。

「……やはりおまえか……ヴェネット。」

エースがそう言つと、彼はニヤリと笑つた。

「貴様こそ……まだ生きていたのか。マスターエース！」

エースの手に握られたレイブレイダーから蒼白の光刃が現れた。

「ほつ……私と戦うつもりか？止めておけ。抵抗せずにおとなし

く切られれば苦しまなくてすむ。これは慈悲だぞ？」

しかしエースは聞く耳もたんと言わんばかりに唸りを上げる刃を自分の顔の前に立てた。

「哀れだな、失つたものを求めるがゆえに闇に喰われたか……」「哀れなものか……闇は私におおきな力を与えてくれた！！光ではもたらされない、おおきな恵みをな！」

エースは首を振った。「それを……哀れだというのだよ。」
そして勢いよくヴェネットに切りかかつた！ 光が唸りを奏で弧を描く。ヴェネットはすんでのところでそれをかわした。しかし、その後立て続けに繰り出される攻撃に彼は少々たじろいだ。老いてはいれど並の騎士ではなかつた。やはり、銀河最強の騎士の名は伊達ではないな……ややしり込みするヴェネットにエースはさらに仕掛け続ける。

「さすがは三代目パーティーシャー！ 腕は衰えていないようだな！しかし……」

そう言つて繰り出してきたヴェネットの攻撃を、エースは眉一つ動かさず受け止めそのまま跳ね返した。

「まだまだ……修行が足らんな、ヴェネット……」そしてレイブレイダーを握りなおすとまた斬りかかった。

「くつ……！」エースの年齢を感じさせない攻撃にヴェネットは押されていた。技術的にも精神的にも少しも隙を与えないエースの攻撃は非常に華麗で、それでいて強い！ ヴェネットの攻撃を受ければ、その勢いを流して殺し、最小の動きで返してくる。まさに剣の才能のなせる業！ 常人には到底不可能である。この一連の体勢から繰り出される剣技においてエースを超える者はいなかつた。恐らく今も…

銀河最強の剣士は今だ健在だった。しかし…
病には勝てなかつた！

ヴェネットの剣を受けるエースの力がふいに弱まつた。エースは突如発作に襲われたのだ。目の前の世界が二重に重なり、敵の姿も

うまく捉えられない。剣を持つ手が震え、力が入らない。気持ちは目の前にいるはずの敵に向いてるのだが、体がついてこない。眩暈がし、体がよろめき、やつと発作が通り過ぎた。だが、発作が通り過ぎた後の正常な視界にはいるはずの敵がない。エースは首をきょろきょろと回し敵の姿を探すが見つからない。注意深く回りに意識を配る。だが、敵はない。気を抜いたら負ける……。エースは剣を握り直した。

：その時！

紫色に光る光刃を掲げ上げる黒い影が目の前に立ちはだかり、勢いよく光刃を振り下ろした。

発着場は静かだった。本当に戦闘が起きているんだろうかと思うくらいだ。窓に目を向けると暗い闇の中にポツポツと無数の点が見える。全て星だ。幾千もの星達が瞬いていた。美しい光景だ。人が作り出そうとしても作り出すことは永遠に不可能な……光景だ。窓から目を離しランチャーに向かうと誰もいないようだった。ギガントはまだデュオレンシス人を探しているのだろうか。エースは……そういえば、ジライの後ろには後から来るはずのエースの気配が全くなかった。

「後から行く。先に行つて待つていろ」

エースは確かにそう言つた。だが、一向にやつてくる気配がないのだ。ジライは再び嫌な予感がした。何か、命の光のような物が一瞬パッと弾けるような……そんなヴィジョンが浮かぶのだ。何だ、これは……手で額を押さえるといきなり目の前の視界が白い光になつた。ジライは辺りを見回した。だが、どこまで入つても景色は白いままだ。その先に終わりがないかのように……まるで自分がこの世界にたつたひとり……世界の中心に立つてゐるような気分だ。そして再び景色が白く輝き始めると、周りの景色が高速で回転を始め、彈け飛んだ。そしてそこには暗闇しか広がらない世界しかなかつた。どこかで声がする……懐かしいにおいがする。

ジライが目を開けると、そこには草原が広がっていた。夕刻だろうか、赤い空の下にぼやけたナイトパレスの影が浮かんでいる。ジライは混乱した。自分はさつきまで船の中にいたはずだ。なぜこんなところに……？　しかもここは、エルーアである。この草原はナイトパレスのある丘より少し上に上ったところに広がっている場所で、アークナイトの少年期の修行はほとんどがこの草原で行われるのだ。そして夕日に広がる草原で今まさに修行をしている幼い少年とマスターがいる。やや長髪で身のこなしの鮮やかなマスターが、まだ10歳にも満たない少年を相手にしている。しかもアークナイトの剣術の軌道をうまくたどれるように自らの剣を走らせてている。なるほど、これなら剣の軌道を自然に体が覚える。見事だ……とジライは感心し、教えているマスターの顔を見た時、彼は驚愕した。目の前で剣を教えてるのは、自分のマスターであるエース・マシユロウなのだ。そして、エースに手ほどきを受けてるのは……なんと幼い日の自分自身である。ジライは目の前の光景が信じられないといった感じで見入っていた。やがて剣の手ほどきが終わると、エースは目の前の少年に近づき頭をくしゃくしゃに撫でてやった。少年は嬉しそうに笑っている。しばらくそうしていると、エースが口を開いた。

「ジライ、この銀河を守るには何が必要だ？」少年は見上げ、答える。

「はい、マスター。自分は規律だと思います。そうしないと、エルーアが提唱している銀河の平和と秩序が保たれないですから。」

「ふむ、いいところをつくな。だが、規律だけで銀河の平和と秩序を保つにはやはり限界がある。口では何とも言えるが、実際にそのバランスが崩れた時には何もできなくなるのだよ。そのために我々が存在するのだ。崩れたバランスを取り戻し、再び平和と秩序を約束するために……」

「しかしマスター。それでは武力に訴える事になってしまいます！」

そんな事は『ナイツ・オヴ・ラウンド』の名に恥じることに……

！」

エースの目は優しくなり、再びジライの頭を撫で始めた。
「ジライ、おまえは優しい子だ。私にはよく分かる。だがな、優しさだけでは何もできないこともあるのだよ。ジライ……強くなれ。強くなればその力で苦しんでいる人たちを救うことができる。だが、力は善いことに使わなければ闇に喰われてしまう。闇は恐ろしい力をもっている。我々を誘惑してくる時もある。その誘惑に負けないようにするには己自身を鍛えねばならん。だから強くなれ、闇に負けないくらい強くだ。」

少年はエースの言葉を一つ一つ確かめるように頭でうなづくと、何か決意のようなものを瞳に込めてゆっくりと「はい」と言った。エースは優しく微笑んだ。

「よし、今日はここまでにしよう。パレスに戻りなさい。みんなが夕飯の支度をしている頃だ。行つて手伝つてあげなさい。」

と言い、ジライを帰路へと促した。少年は「はい！ マスター！」と言い、嬉しそうに草原を駆け降りていく。そして夕日に向かって駆け出した少年を見送りながらエースは言った。

「ジライ、本当に大切な物とは……何だ？」

その瞬間、周囲は再び闇に染められ、この空間にはジライと若かりし頃のエースだけになつた。エースは振り向くと静かに語り始めた。

「ジライ、この銀河にとつて生まれ出る生命というのは一瞬の煌きでしかない……だが、我々はその煌きのために生きているのだ。ひと時も無駄にできない時間の中で、我々にできることは何か……それを考えた時……私にはこの選択しか浮かんでこなかつた。ジライ、お前は何を選ぶ？」

エースがジライにそう問いかけた時、暗闇はサーッと引いていき、辺りに景色が戻っていた。

ジライはランチャーの発着場に佇んでいた。まるで時間が止まつていたかのように……

今の景色は何だ？何故マスターが……

ジライが混乱した頭を整理し始めた時、突然発着場が揺れた。どこか遠くで爆発音がする。銀河連合の攻撃なのか？いや、しかしひ時間的にも無理なはず……では何が起こっているのか……再び船が揺れた。船内はけたたましい警報が響いている。どうやら船のどこかで爆発が起こっているようだ。揺れに耐えられず、ジライは壁にもたれかかった。と同時に再びジライの頭で先ほどと同じ現象が断続的に起こった。昔ヴィスタに聞いたことがある。

フラツシュバツク……

いきなり脳裏に映像が映し出されるのだ。それも断続的に……ある時は未来を、またある時は過去を一瞬にして映し出す。銀河の意思が何かを伝える時それは起ころうという。それが今ジライに起こっている。そして今ジライの脳裏に写りだされた映像は……

苦しんでいるエースの表情……何かを伝えようとしているが何かは分からなかつたが……

確かにエースが苦しんでいた。ジライは何がなんだか分からず、再び混乱した。船の爆発音はだんだん激しくなっていく。ジライは気持ちを落ち着かせた。銀河の意思が自分に何を伝えようとしているのかは分からぬ。だが、あの世界でエースが言った「ひと時も無駄にできない時間の中で我々にできること」が頭の奥でリフレインした時、ジライは、さつき通ってきた廊下を再び駆け出した。

この予感は当たつてほしくない……

走りながらジライはそう思っていた。しかし、あの映像が絶えず脳裏に浮かんでくる。苦しむエースの映像……エースが死ぬ？いや、そんな事はない。銀河最強の剣士……パニッシャーの称号を持つ男がそんな簡単に死ぬはずがない！ジライは映像を振り切るように激しく頭を振った。あと少し……もう少しでマスターと別れた場所だ。船は相変わらず爆発を起こし、揺れている。だがその爆発もジライには聞こえていない。すぐ近くで起こった爆発もジライには見えない。見えているのは廊下の先。ジライの目の先には黙つて向

かえを待つてはいるマスターの姿しか映つていなかつた。マスター……

……マスター……

「マスター・エース……！」

走り続けるジライの先に影が見えた。人影だ。佇まいからしてエースだろう。良かった、まだ死んでいない。いや死ぬはずがない。ジライはそう確信した。だが、その確信も次の瞬間消え失せた。エースの様子がおかしい。何かと戦つているようだ。エースのレイブレーダーのうなる音が聞こえる。いや、一つではない。もう一つ唸り音が聞こえる。エースは何と戦つているんだ……。ジライの心臓が激しく鼓動を打ち始める。再び脳裏で映像がリフレインし始める……振り切つても振り切つても……だ。そしてジライが距離にしてあと100メートル足らずまで辿り着いた先では……

青と紫の光刃がクロスするように重なつていた。二つの光刃は激しく唸りを上げ、光を撒き散らしている。相手は黒い服に身を包む二メートル近い長身の人間？灰色の肌に銀色の髪の毛……。その瞳は赤く輝いている。先ほど出会つた男とは似ているが、何か違う。こんな人間をジライは初めて見た。デュエル・ナイツ……歴史の書物に記述が載つていた事は覚えていたが本物は初めてだつた。そのデュエル・ナイツが今、エースと戦つていた。エースは苦しそうな表情で敵の攻撃を受け止めている。敵は……デュエル・ナイツは……微笑んでいた。それはまるで殺しを楽しむ狩人のように微笑んでいる。じりじりとエースの顔に光刃が近づいていく。

「マスター……！」

その様子にいても立つても居られなくなつたジライは堪らず自分の剣を引き抜き、光刃を出現させると戦いに加勢しようと駆け出した。

「な……ジライ！？」

エースはジライの声を聞き驚愕した。そして、その姿を確認しようとして声の方向に少しだけ目を向けたとき、その一瞬の隙をつきデュエル・ナイツの光刃がエースの両手首を切り飛ばした。そしてくるりと一回転しすばやく光刃を手前に引き戻すとそのまま突き出

し、エースの胸を貫いた。

「うぐ……」

デュエル・ナイツは剣を引き抜くと光刃を消した。と同時にエースの口から大量の血が吐き出され、エースはその場に力なく倒れ込んだ。その様子をチラッとだけ見ると、今度はジライのほうに目を向けニヤリと笑うとそのまま背を向け走り去った。ジライはエースに目を向けた。エースはピクリとも動かない。

「マスター……マスター？」

ジライはそろそろとエースに歩み寄った。

「マスター……？ マスター・エース？ ……マスター！！！」

叫びながら駆け寄るうとすると、船が再び揺れ動いた。爆発がまだ続いていたのだ。その勢いで天井が崩れ落ちエースとジライの間を塞いでしまった。

「マスター！ マスター！！」

叫びながらジライはレイブレイダーで瓦礫の山を碎こうと振りまくつた。しかし、少し瓦礫が飛ぶだけでいくら碎いても一向に進まない。船の爆発は一向に止む気配はなく、ジライの立っている所でも天井が崩れようとしている。しかし、ジライはお構いなしに目の前の瓦礫にレイブレイダーの切つ先を叩きつけていた。そして剣を頭の上に大きく構え振り下ろそうとした時、ガクンと衝撃がしたと思ふといきなり瓦礫の山が猛スピードで遠ざかっていった。足元を見ると自分の足が浮いている。走っているわけではない、浮いているのだ。そして、腰元には不恰好な金属の棒が絡み付いている。すぐに予測がついた。これはギガントの腕だ。ギガントがジライを抱え上げ、猛スピードでジライとエースを引き離している。ジライはそう感じた。

「ギガント！ 離せ！ 離すんだ！」

ジライはギガントに向かつて叫んだ。しかし、ギガントは応じない。

「ギガント！ 聞こえているのか？ この手を今すぐ外すんだ！」

38

「これは命令だぞ！」

再びジライが叫ぶとギガントはその場で停止した。しかし腕は一向に外れる気配がない。

「ギガント、腕を外せ。マスターの所へ戻るんだ。」しかし、このオンボロのアームノイドはそれには応じず、ふたたび進みだした。
「ギガント！ 何してる！？ マスターの所へ戻るんだ！ この腕を外せ！…」

ジライはあるで子供がただをこねるようにして暴れた。その拍子にレイブレイダーを落としたことにも気付づかぬまま……。

ギガントは崩れ始める廊下を猛スピードで駆け抜けた。そして一瞬でランチャーの発着場に着いたかと思うと、そのままジライをランチャーへ押し込んだ。押し込みながら自分もランチャーへ乗り込み、ハッチを閉めてロックするとそのままコクピットへ向かいエンジンを始動させた。さつき走ってきた廊下は、どうやらすでに押し潰されたようだ。煙がもうもうと浮かんでいる。もつかなり危ない状態だ。発着場の天井からもパラパラと破片のようなものが落ちてきている。

あまり持ちそうにはないな……

ギガントの電子脳はそう判断するとコンソールの全装置を起動させ、飛び出した時にそのままワープできるようにハイパードライブのスタンバイをした。反重力装置が作動し機体が浮かぶとその場で鼻先を発着場のゲートにむけ、スロットルを全開にして噴射させた。と同時に爆発の衝撃で天井が崩れ始めた！ ギガントは慌てる様子もなくエンジンを全開にし、ランチャーはゲートを勢いよく飛び出すとそのままハイパードライブに飛び込んだ。

3、夕焼けの中で…

エルニアの夕焼けはとても美しい。その美しさをとつたら、銀河の三大風景美の中に入るくらいだ。特に夕焼けがエルニア湖に反射し、それに反応するかのように湖の波が揺れる時に起こる煌きは格別だ。それを見るだけで一日くたびれるまで使い込んだ心が休まる。実際それを求めてこのエルニアにやってくる者がいるくらいで、帰る時には皆決まって

「次は必ず移住権を持つてここにくるよ」

と言い残して去っていく。

エルニアの人々は一日の中で、この夕陽が沈む瞬間が一番好きだった。もちろん、ジライもその一人だ。

彼はその景色をナイトパレスの廊下から眺めていた。幼い時からこのパレスで暮らし、この夕陽には見慣れているはずだが、それでも見飽きないくらい美しい。いつ見ても息をのむ雄大な景色だ。

時間が許すなら太陽が沈みきるまで見ていたかったが、そうもないかない。先刻の任務の事でヴィスターに呼び出されているのだ。すっぽかしたら後でえらい目に合わされる。ジライは名残惜しそうに廊下を歩く足を速めた。

部屋に入ると、すでにヴィスターが待っていた。部屋の真ん中には丸いソファがあいてあり、それが向かい合って置いてある。そのうちのドア側に座るよう、ジライは勧められた。

ヴィスターはクオースサイダーを出し、自分も同じ物を手にしながら向かいのソファに座った。

「ジライ、まずは任務ご苦労だった。無事にデュオレンシス人を保護することができた。大老も非常に喜んでおられる。」

「いえ、任務を遂行するのは当然の事です。」

ジライは静かに答えた。しかし、その口調には若干だが悲しみが

込められているのをヴィスタは見逃さなかつた。

「そうだな…君のマスターもそういう男だつたよ。」

一瞬ヴィスタを見るジライの目に憎しみがこもつた。

「僕はマスターとは違います。考え方も違えば、生き方も違う。同じにされては困ります。」

まだエースの死から立ち直れていないようだつた。無理もない。すぐに忘れるというのは残酷すぎる。特にエースと目の前にいる若い騎士は親子同然の関係だつたのだ。エースの死を受け入れるに時間がかかるのは仕方ない。仕方のない事だが…

「…そうだな…すまなかつた。」

重たい沈黙が続く。

ジライにとつてエースは父親同然だつた。物心ついた時から剣を学び、同じ寝床に枕を並べ、同じ時間を共用していた。家族同然だつた。しかし、その男ももうこの世にはいない。姿を消してしまつた。永遠に…残されたのは彼の志しだけだ。彼がこの国に残した騎士の精神だけだ。

彼の魂は銀河の意思に取り込まれ、この宇宙に漂う波の一部になつたのだ。

だが、彼の死はこの青年に傷跡しか残さなかつた。深く傷ついてしまつた彼の心…目の前で手首を飛ばされ、胸を貫かれ…血を吐き出しながら老マスターは死んでいった。亡骸は恐らく船の爆発に巻き込まれ、宇宙の塵になつただろう。ジライの心には後悔しか残らなかつた。自分に対するふがいなさしかなかつた。もつと自分がしつかりしていれば…「マばかりしなければ…もつと速く走れば…もつと…強ければ…！」

後悔の念に震えるジライを見て、ヴィスタは静かに立ち上がり机に向かつていつた。そして引き出しを開け、ぼろきれに包まれた物を取り出すと先ほどまで座つていたソファまで行き、腰を下ろした。

「ジライ、手を出しなさい。」

「?…」

「早く出しなさい。」

言われるまま手を差し出すと、その包まれた物がジライの手に渡された。ズシリとしていて、その重さが手を伝わってきた。と同時に何か懐かしい物がこみ上げてくる。ジライは息が荒くなるのを抑えながら包みをほどき始めた。胸がどきどきする。こんなにどきどきするのは、大老からレイブレイダーを受け取ったあの日以来だ。最後のきれをめくると、ジライの目は驚きのあまり大きく開かれた。その開かれた瞳はジライの手の中にある物をじつと見つめている。その手の中には、ジライが尊敬している人物の命が乗っていた。エースのレイブレイダーだ。

アークナイトが自分の持てる力を発揮する時、戦いに勝利し、平和の象徴として掲げる時、そして…命を輝かす時、この古から受け継がれている光の剣は出現する。その者の命の色をまといながら。ジライはじつとエースの剣を見据え、ためらうように光刃を出現させた。唸る音とともに紺碧の刃が姿を現した。まるで…エースの命そのものの中にある、雲ひとつない大空のように蒼い剣が。

「エースから君への…贈り物だ…」
ヴィスターが静かに口を開いた。

「贈り物…？」

ヴィスターはエースがこれを持って自分を尋ねてきたことを話した。そして、これを渡せなかつた事を悔やんでいたことも…

「それでは…あの時…私を救出に来たときにマスターが持つていたレイブレイダーは…？」

「恐らくギガントの造つたレプリカだろう。エースは引退した日からこれはずつと閉まつていたと言つていたからな…。」

「何故…？」

ジライは目頭が熱くなつてくるのを感じた。

「何故です…？」

胸からこみ上げて来る物を感じた。それが大きな悲しみ、自分への怒り、失望とも知らずに…そして彼は叫んでいた。

「何故です！？これは…この剣は…命です！アーヴナイトの…持つ
もの自身の…これを放棄することは…命の放棄です！！何故…マス
ターは…ヴィースタ将軍！！答えてください！ヴィースタ将軍…！」
ヴィースタはジライに視線を向けた。その中にはひどい悲しみに包
まれた炎が燃え盛っている。彼もまた、親友を失った悲しみと戦つ
ていた。

「ジライ、落ち着け。何故エースが君にこれを授けたのか…それは
私には分からぬ。その意味は君自身の中にあるはずだ。だからエ
ースはこれを私に預けにきたのだ。」

ジライは荒くなつた呼吸を落ち着けようとして深く息を吸い込ん
だ。そして、気が落ち着くと唸る紺碧の光に目を戻した。

「ジライ…エースの意思是君に受け継がれるのだ。この銀河で…た
だ一人…君だけが…」

ジライはヴィースタの瞳を見た。瞳の炎は消え、穏やかな風が彼の
心を包んでいくのがみえる。

ジライは剣を閉まつた。そして、ヴィースタに謝罪した。

「申し訳ありません、将軍…親友を失われたあなたが一番悲しい
想いをしているというのに…自分の事ばかりでした。自分が恥ずか
しいです…。」

そう言うジライの肩にヴィースタは手を乗せた。

「そんなことはない。ジライ、人は悲しみを背負う事で強くなる。
それがどんな事であるにせよ、その人の志を継ぐ事が重要なのだよ。
それが自分で生き、結果として後世に受け継がれていく。それ
の積み重ねが歴史だ。」

「ええ、マスター・エースもよく言つていました。」

ジライははにかんだ。つられてヴィースタも微笑む。

「そうか、さすが君のマスターだ。私が教える事ではなかつたな。
ヴィースタは苦笑した。

「ところでジライ。まだ時間はあるのか？」

ヴィースタの問いにジライは戸惑つた。時間があるからここに来て

いるのに…何かあるのだろうか…

「まだ…時間はありますか…何か?」

ヴィスターは腕を組み少々顔をこわばらせた。

「ふむ…君が救出したデュオレンシス人…イリアと言ったかな。彼女が君と話しかけたいらしい。我々としては、襲撃事件について詳しく聞きたいんだが…今はそういう訳にもいかない。彼女の状態もまだよくないからな。だが君ならと言つてくれている。…何か打ち明けたい事もあるんだろう。行つてくれないか。」

ジライは分かりました、とうなずき、ヴィスターの部屋を去つた。

ナイトパレスの医療区間は銀河の中でも指折りの設備や人材がそろつている。そこでは銀河中から重病や難しい手術を必要とする人々が絶えず訪れていた。それほどの評判を誇る医療区間の廊下をジライは歩いていた。彼がこの廊下を歩くには少々不釣合いな格好を、すれ違う患者はじろじろと見てくる。その視線が嫌になり、それから逃れるようにジライは急ぎ足で廊下を駆け抜けた。

やつとのことで病室を見つけた時は、ここに来てから一時間半くらいの時間が過ぎていた。思わずジライはため息を吐いた…ここまで來るのに彼なりの努力をしたのだろう、全体から疲労がにじみ出でている。

病室のネームプレートには「イリア・ベルナデッジ」と記されている。ここに違いない。ジライはもう一度深呼吸をしてからインターフォンを押した。しばらく置いてから「はい」という声が聞こえてきた。

「アーライトのエン・ジライです。イリア嬢のご要望で…」

言い終わらないうちに「お入りください」とドアが開いた。ジライはこりやご丁寧に…と肩を上げながら病室に踏み込んだ。

中に入ると、入り口の周りには警備員が立っている。女性のようだ。彼女のために招かれた身辺警護だろう。ベッドには白いカーテンがかかつており、夕焼けに照らされた影が手を招いた。

「どうぞ、こちらへ…」

ジライは少々うつむき加減でベッドのほうへ向かった。ベッドの近くまで行くと警備員がカーテンをかきあげ、彼に中へ入るよう促した。ジライは従い中へ入るとエルニアの夕焼けの残り火が彼の顔を照らした。その残り火の中に彼女の姿があった。セミショートほどのブロンドの髪、透き通りそうなほど白い肌。まだ少女のようなあどけなさが残る彼女の声は、先の任務で疲れ果てたジライの心を癒していった。

「どうぞ、おかげになつて。そこに椅子がありますわ。」

少女は振り向いた。緑色の瞳がまぶしく光る。デュオレンシス人特有の瞳の色だ。その輝きは深いエメラルドの輝きのように美しい。「失礼します。」といいながら勧められるままジライは座った。少女もベッドの上に腰掛ける。まだ幼いが、その容姿はとても優雅だ。デュオレンシス人は皆作法を仕込まれるというが、彼女はまた特別のようだ。王族ではないが、それに近い地位にいたのだろう。この辺りの女性とは比べ物にならないくらいだ。見ているだけで心が和む。

「ミスター・ナイト。エン・ジライ様とおっしゃいましたね。この度はない命を救つて頂きありがとうございます。先の国では見苦しい姿をお見せしてしまいました。申し訳ございません。」

言いながら頭をたれるイリアを見て、ジライは慌てて手を振り答えた。

「いえ！そんな！自分はただ与えられた任務をこなしただけです！騎士なら…当然の事です。」

「しかし、私を救うためにあなたは大事な方を亡くされたと聞きました…私ひとりの命のために人が死ぬなど……」

言葉がつまり、彼女はうなだれ涙を零し始めた。彼女はただ「申し訳ありません」と繰り返している。その彼女の姿を見て、ジライは静かに言った。

「イリア嬢、お顔をお上げください。」

そう言うと彼女は顔を上げた。彼女の目にはまだ大粒の涙がためらっていたる

「イリア嬢。あなたを救出する時に命を落としたのは、私のマスターです。名はエース・マシユロウ。尊敬する偉大な騎士でした。マスターはいつも規律に忠実で…自分がアークナイトであることを常に誇りにしていました。その彼が…既に現役からは退いていましたが、あなたを救出する事で騎士として…死ぬ事ができた。これは、騎士にとつては非常に名誉なことなんです。我々は常に戦いにその身をおき、戦いの中で生きていきます。その中で命を落とす事には…ためらいはありません。むしろ、それを望んでいる者もいるのかもしれない…」

イリアは彼の話をじっと聞いていた。ジライを見るその瞳の中に悲しみは消え…彼への好意がわずかだがきらめき始めた。この人は悲しみに負けない強さを秘めている…ジライの話を聞きながら、彼女はそう感じた。

「もつとも、マスターがどう思つていたのかは分かりませんが…ですが、マスターの死は私にとつては誇りです。私も…マスターのよう人生を送りたい。」

ジライはいつしか、エースの死が自分の中でおおきな誇りに変わつていくのを感じた。あの老マスターの伝えたかったことはなんなのか…おおきな疑問が小さくなつていぐ。それは恐らく、^{騎士}としての誇りだろう。確かに…今はそうなのだろうとジライは思った。ふとイリアに目をやると、彼女は顔をふせていた。ジライははつとした。

またこんな話をしてしまった！

ジライお得意の説教じみた話だ。非常にまづつたとジライはこの場をとりつくろうため妙に声を張り上げた。

「暗い話になつてしまつた！申し訳ない！悪い癖で！」

驚いたイリアが顔を上げた。そして、顔がくしゃつとなつたかなと思つと、彼女は急に吹き出し、あははは…と笑い始めた。

「あはははは！ふふつ…ふ…ふふふ・・・」

必死で笑いをこらえようとするイリアを見て、ジライも吹き出し、笑い始めた。

「ふふふ…はははは！」

二人とも昔からの仲の良い間柄のように笑い始めた。イリアはお腹を抱えて笑い、ジライは大きな口を開けて笑っている。一人の笑い声は続いた。しばらくした後、一人とも落ち着いたのか、声が小さくなつていった。

「はつは、いや～申し訳ない。ふうつ。」

「いえ、楽しかつたですわ。こんなに笑つたのは久しぶり！」

ジライはしばらく彼女を見つめ、言った。

「…もしよろしければ、今日のお詫びといつてはなんですが、あなたが元気になられた時に、エルニアを案内させて頂けませんか？この国は美しい自然も多いし、昔の建物も多く残つている。観光に最適だ。きっと珍しいものもあるだろ？し、それに、気も和むと思います。」

ジライはじぶんじぶんしている自分がだんだん嫌になつてきた。なんでこんな簡単なことがいえないんだ…慣れてないのは言い訳かもしれないが…そんなジライの変わりにイリアが言った。

「それって…デートですか？」

「…え？」

ジライは一瞬耳を疑つた。

「デートのお誘いなら…お受けします。」

イリアは満面の笑みを見せながら言った。

そして、その笑顔はエルニアの夕焼けにとけていった。

暗い廊下をヴェネットは歩いていた。果てしなく続く闇…この先に終わりはあるのだろうかと疑いたくなるくらい闇が支配している。その中を銀色に輝く髪を揺らしながらヴェネットは前へ進んでいった。この静寂な空間は、どこか懐かしい感じがした。遠い、幼い日

を過（）したあの国を…思い出させる。だが、ここは違つ。侵略し、民は皆切り刻み、血の中に立つてゐる居城の中だ。そして、この廊下の先には…

「閣下…」

そう言つと、闇は去り、ほのかにロウソクの日が灯る空間が姿を現した。天井はドーム状に湾曲し、部屋の真ん中には長いテーブルが置いてあり、その上では瓶に入つた酒が揺れていた。そして、闇下と呼ばれた影が窓際から姿を現した。髪は黒く、肌は若干白い。ヴェネットと同じ黒い衣服に身にまとつたその顔には、やはり、ヴェネットと同じ、紅く燃える瞳が輝いていた。ヴェネットはひざまずく。「閣下…申し訳ありません。デュオレンシス人を取り逃がしてしまいました…罰は覚悟の上…どうか、お許しください…」

すると、男は笑い出した。始めは小刻みに、そしてだんだんと高笑いへ変わつていつた。

「あーはっはっはっは…！」

そして、ヴェネットへ紅い瞳を向けた。

「顔を上げる、ヴェネット。私はおまえを罰したりなどはしない。」

男は尚も笑いを止めようとせらず、ヴェネットにこう言った。「よくやつた。」

「無事に、銀河連合と通商連合の戦争が始まった。これで我々は自由に動くことができる。ふははは、それにデュオレンシス人などもう必要ない。起動キーは見つかった。これで…樹を動かすことができる。」

ヴェネットは立ち上がりながら彼の顔を見た。燃える紅い瞳はさらに炎を巻き、口元は残忍な獣のように釣りあがり…さながら人間とは遠い生き物に見えた。そんな生き物が喜びに打ちひしがれ、叫んでいる。正気のさたではない。ヴェネットは男の顔を直視することができず、目を背けた。

いつしか、男の笑いは消え、辺りには静寂が漂つていた。

「ヴェネット…」

名を呼ばれ、彼は慌てて男に視線を戻すと、いつの間にか獣の顔が立ち去っていた。

「今回の件はよくやつた。部屋に戻りゆづくり休め。次の任務も動いてもらひながらな。」

彼にやつされると、ヴェネットはゆっくりと部屋を後にした。

城を包む廊下から、ヴェネットはかつてデュオレンシスだつた大地を眺めていた。まだ煙の昇っている所が無数にある。侵略から半月はたつたのにまだ抵抗を続ける者がいた。武装したアームノイドをちりばめ、生き残りの掃討を続いているのに未だに静かにならない。

無駄な事を…ただ苦しむだけだといつのこと…

この大地で、生き残った人たちがアームノイドのビームガンで焼かれていると思うと、ヴェネットは胸が苦しくなつた。まだ、自分にも善が残つているのか…心が痛むのか…？　だが、彼の心の深くには死神がすでに住み着いており、彼のそんな感情を手に持つた長い鎌でつぎつぎと刈り取つていく。しばらくすると、彼の心では善は消え、悪の声が響き渡る。

殺せ、苦しみながら…自らの存在を罪と思え…

もはや、彼には善など残つていない。あるのは…深く切り立つた大きな闇の溝だけだ…

ふと物音がした。何か…足音のようなものだ。ヴェネットは音のしたであろう方向に向き直つた。やはり音がする。何か…金属の音…ガチャガチャと音を立てているのか。そんな音だ。だんだんと近づいてくる。ヴェネットはたまらず音の方向に声をかけた。

「誰だ？」

それは姿を現した。ヴェネットは目を見張つた。なんだ、こいつは？一体何者なのだ。

それは全身を漆黒の鎧で覆つた甲冑だつた。マントもバイザーの羽飾りも…全身のなにもかも…闇の固まりだ。唯一腰に下げている

剣の柄が銀色を放っている。が、それ以外は全てが黒い。兜のバイザーの隙間からこちらを伺っている。その視線はするどく、ヴェネットは全てを見透かされそうだった。そして、どこかで出会った視線だ。

「貴公は…何者だ？」

そう聞かれると、黒い甲冑はブシューと甲冑の隙間から白い煙のような物を吐き出し、言った。

「…他人に名を尋ねる時は自分から名乗るのが礼儀というものだ…。」

「…その威圧感のある口調にヴェネットは一瞬たじろいだが、負けじと答えた。

「失礼した。私はヴェネットと申す。この城の主に仕える騎士だ。貴公は？」

そう聞かれ、黒い甲冑は何か満足したように腕を組み、答えた。
「丁重な挨拶、感謝する。私はこの城の主に招かれた者だ。名をリーディと申す。以後、お見知りおきを…」そう言うと、この黒騎士は再び歩き出した。行き先は、恐らく閣下の部屋だろう。

どこか、懐かしみのある歩き方だ。歩調は穏やかで、ゆとりのあるそぶり。そして、他人の欠落を厳しく指摘しそこを訂正させる騎士道精神…似ている、あの男に…かつて、マスターと呼んだ男の親友に…だが、彼が生きているはずがない。そう、彼は死んだのだ。彼が殺した。ヴェネットが…

彼は再び元見ていたほうに向き直った。炎はまだ上がっている。それはまるで…かつていた、あの国の…夕焼けのようだった。

4、強襲、黒き騎士

空には雲ひとつなく、今日も快晴のようだ。エルニア湖の水面はきらめきを増し、今日も快晴のようだ。エルニア湖の水面はきらめきを増し、今日も快晴のようだ。

ヴィースタは自室の窓から、この空を眺めていた。あの事件からエースが死んだ日から数えて今日で一週間が過ぎた。アモースン星域では、銀河連合と武装した通商連合が星間戦争に突入している。原因はこないだの事件…通商連合の旗艦の爆破だ…が原因だ。銀河連邦のスパイが通商連合の旗艦を爆破…そういう噂が流れているが、真相は定かではない。あくまで表向きのうわさだ。実際はどうなのか…予想もつかない。我々がつかんだ情報は…エースの死だ。それも、彼の最後の弟子から伝えられた。彼はしばらくの間、心を閉ざしていたが、ある人物と出会い、それをきっかけに立ち直つていつた。今は、事件の前のように明るい。しかし、マスターの事となると今でも心に空間が開いたままのようにひどく落ち込む。そのはずだ…なぜなら、彼は、自分のマスターが殺される瞬間を目撃したのだ。その瞬間は、彼の心に巨大なクレーターを空けた。それは次第に埋まりつつあるが、依然としてクレーターは穴を開けたままだ。

「何が心配かね？」

ヴィースタが声の方向を向くと、そこにはハンが立っていた。

「いえ、何も心配してはいません。ただ…」と言しながら窓に向き直つた。

「彼が…あの子のようにならなければと…」

ヴィースタは肩を落とした。「…いくら我々でも…溺れいく者の手助けはできません。たとえそれが、闇を招くと言つても…」

「そうだな…彼はそういう道を選んだのだったな。だが、その彼ももう生きてはいない。あの時に命を落とした。闇に心を食われたままでな…」

ハンは一呼吸おいて付け加えた。「それもまた運命か…」

「ジライには、あの時の彼の姿がだぶつてしまします。…あの時…私は引き戻すことができなかつた。…故にあのような惨事になりました。あんなことは一度と起こしてはならない。我々がいる間は…決して…！」

「愛ゆえの…間違いか…」

ハンはヴィスターに近寄り、そつと肩に手を置いた。

「彼なら大丈夫だ。我々もさることながら、エースが付いている。彼の魂の鼓動が闇からあの子を守る。」

「ですが、大老…」ヴィスターはハンの目を見て答えた。

「…エースを感じるんです…彼の生きた鼓動を…死んだはすなのに！」

ハンも確かに感じていた。死んだはずの者が命ある者の鼓動を発するものなのか…そんなことはありえない。いや、あつてはならぬのだ。それはこの銀河の摂理に反する。死者の鼓動を招くなどといふことは、あつてはならぬのだ。何人たりとも触れるることは許されぬ、神のみ成しえる業なのだ。しかし、この鼓動はどこか違う。死んだ者の鼓動は打つのが分からぬくらい静かなのに、この鼓動は熱い。そして…血の香りがする。まるで、血に飢えているようだ。

ハンはこの鼓動を見逃さなかつた。銀河中に張り巡らされた彼の意識は、確かにこの鼓動を捉えた。これが生まれた瞬間も…だが、これが自身の近くに近づいたことまでは気付かなかつた。この鼓動の誕生はただの始まりに過ぎない。

これから起ころる、悲劇の幕開けの、ほんの序曲なのだ。

ヴィスターのインコムが鳴つた。だが、いつもの呼び出し音ではない。緊急用の呼び出しシグナルだ。何だ？何があつた？疑問が湧き出るのを押さえ、ヴィスターはインコムの通話スイッチを押した。

「ヴィスターだ、何があつた？」

通話先の通信士はいつもとは違つ様子でまくし立てた。なにか、とんでもない事が起きたようだが、通信士はわめいてばかりでうま

く聞き取れない。ヴィスターはわめく通信士に落ち着けとなだめ続け、ようやく収まつた頃にもう一度聞いた。

「一体、何があつた？」

ジライはナイト・パレスの上にそびえる草原に佇んでいた。ナイト・パレスを初め、ナイト・テンプル、エルニア湖、エルニアの街を一望できる所でもあり、幼い頃今は亡きマスターと剣の修行にはげんだ場所もある。何故こんな所にいるかと云ふと、一週間ほど前にイリアと約束したのだ。彼女が元気になつたらこの国を案内したいと。彼女は喜んでOKしてくれた。ただし、デートなら…との事だった。ジライは焦つた。生まれてこのかた女性とはあまり喋つたことがないのに、いきなりデートである。それも、自分が救出した女性だ。成り行き的にはかなりグッド（いつも作戦を共にする相棒いわく…）だが、いまいち乗り気になれないのが本音だが…約束したのだから仕方がない。自分が言い出したことでもあるし。何より、ジライはこの女性が少々ではあるが気になっていた。意思の強さや、気高い態度…それに、どこか、はかなさを持つた眼差し…

実際、ジライはこの二週間、時間のあるときはほほ彼女に付き添つていた。そしていろいろ話した。自分のことや仲間のこと、尊敬すべきマスターのこと。時間があるならもつと話したかった。しかし、救出者とは深い関係を持つてはならない、という取り決めから、ジライ達はそこまで込み入つた話はできなかつた。そこがジライにとって歯がゆかつた。彼女のことをもっと知りたい、もっと…そばにいたい。

いつしか、彼女に抱いた苦い気持ちは、いつでも彼ののど元まではでるのだが、その先には出て行かない。規律には逆らえない…。そんな自分が嫌だつた。

「どうしたの？ジライさん。」

「ふとイリアが話しかけてきた。

「いや、何も…」

ジライは慌てて返事をした。

「何でもないですよ。」

「…そう、何か思いつめたような顔をしていらしたから。」

イリアはちよつと心配そうに尋ねた。

「何がありましたの？」イリアのはかなさを閉じ込めた眼差しがジライを写した。

…やめてくれ…そんな瞳で見ないでくれ…それ以上見られたら…。

こみ上げる感情を、ジライは必死の思いで抑えた。

「いや、大丈夫。何でもないですよ。」そう言いながら。ジライは辺りの景色を見回した。

「この草原でマスターと修行をしたんです。まだレイブレイダーじゃ危ないから、木で作った剣を使ってね。それが終わると、マスターはいつも頭をくしゃくしゃ撫でてくれて…よく頑張ったなって言うんです。そして、もう一飯の時間だから戻りなさいって僕の背中を…」

ジライはそこで言葉が詰まつた。胸に熱いものがこみ上げると同時に目頭が熱くなる。ジライの目の前には、あの日の夕焼けに染まつた草原が移つていた。純粋で無邪気な、あの頃が広がっている。ジライの瞳はあの小さき頃に向けられていた。

「懐かしい…」

そう言いながら、ジライははにかんだ。強くなれ…ふとマスターの声が聞こえた。その声はとても鮮明だった。

イリアはジライをただじっと見つめていた。自分を助けてくれた騎士はまだ幼い一面を多く残している。彼女にはそれがとても印象的だった。大人になりきれない大人…どこか自分と似た一面を持つこの騎士に、彼女もいつしか心ひかれていたのだ。彼女の欠けた部分を彼が満たし、彼の欠けた部分を彼女が満たす。一人の間にはいつからか惹かれあう想いが芽生えていた。そして、今は叶わぬ想いと自分に言い聞かせている彼と自分がリンクする。彼は隠しているようだが、彼女は分かっていた。

私たちは恋に墮ちている。

だが、彼のかたくなな意思がそれを認めようとしてはいない。騎士ゆえの戒律が体に染み込んでしまっているからなのか……だが、それがいつまでも続くものではないことも彼女には分かっていた。彼女は彼にある罪を仕掛けるつもりだ。どちらにせよ彼は自分の気持ちを受け入れなければ先には進めない。それならば、ほんのちょっとお手伝いしよう……彼女のささやかな悪戯心が笑い出す。彼女は勝利を確信していた。自分の勝利を……

そしてそのチャンスはすぐに到来した。

「……もう時間だな、イリア嬢。戻りましょう。元気になつたとはいああなたは……」

「……いやです……」

ジライはイリアを見た。彼女は彼を見つめていた。その瞳に決意を浮かべながら……

「言つて……ジライさん、イリア嬢なんて言わづ……私のことを……」 彼女は小さな口を少し開き、言つた。

「イリアと言つて……」

「……え……」 ジライはたじろいだ。まさか、そんなことを言われるとは思つてもみなかつた。彼にとつて彼女は、確かに想いを寄せる相手だが、救出者なのである。戒律は彼を苦しめた。

……救出者とは関係を持つてはならない……

「ですが……私とあなたは……そんな……戒律が許さない……」

「戒律なんてどうでもいい、私にはあなたしか写つていないので、あなたの方……その澄んだ青色の瞳しか……写らないの……」

そう言いながら、イリアは彼のほうに手を伸ばし引き寄せそのまま唇を重ねた。夕焼けに差し掛かる太陽が一人の影を草原に伸ばす。二つの影は重なり、しばしその甘い時間を過ごした。疲れきった二人の心は、この行為によって一気に癒され、静寂を取り戻す。イリアはゆっくりと唇を離した。

「……」めんなさい……」 イリアはつぶやいた。

「あなたの心は分かっているのに…騎士にとって戒律は命より大事なのに…ごめんなさい…私…」

彼女の目から大粒の涙があふれてきた。「自分のことしか考えなかつた…苦しんでいるあなたを見て、助けになりたくて…でも、それができない自分がもどかしくて…」

泣き出す彼女を、ジライはそっと抱きしめた。まるで、母親がわが子を抱き包むように優しく…ジライは彼女を包んだ。

「泣かないで。自分のことしか考えていなかつたのは僕自身です。僕こそ、謝らなければならない。あなたはこんなに僕を想ってくれているのに、僕はそれを見ないようになつた。戒律を言い訳に逃げていた。でも…」

ジライはゆっくりと口を開いた。

「…もう逃げません。イリア…」

ジライはイリアの瞳にたまつた涙をその手で拭いながら言った。

「ジライ…」

イリアは次の言葉を待つた。きっと言つてくれる…確信はある。ジライもそのつもりだ。

そして緊張が限界を超えて、その言葉を口にじよじよとしたとき、インコムの呼び出し音が鳴った。

「…？」ジライは一瞬固まってしまった…意を決して言おうとしたのに…邪魔をされた…いつもこれだ…ジライはいらつきながら、乱暴にインコムを取り出した。すると、呼び出しシグナルがいつも違つ。これは…緊急呼び出し用のシグナルだ。ジライの顔が陥りくなつた。…何があつた？ジライは通話ボタンを押して、口に近づけた。

「エン・ジライです。何か？」

通話先はヴィスターだった。しかし、いつもと様子が違う。

「ジライ！どこにいる？」

「ナイト・パレスの丘ですが…」

ヴィスターは少々あらびつた声で言つた。ほほ叫んでいる。

「今すぐナイト・テンプルに向かってくれ！テンプルが何者かに襲撃されている！今何人かに向かわせているが、何しろ相手が分からん。私もすぐに向かう！君も急いでくれ！」

「了解しました！」

ヴィスターが出てくるなんて…めったに動かない將軍が出てくるのだ。状況は思つた以上に悪いらしい。

「頼んだぞ、相手は恐らく…デュエルナイツといふことも考えられる。ありえないが…とにかく、油断はするな！テンプルで落ち合おう！」

そう言つて通信は切れた。ジライはインコムをもとあつた場所に戻す。

「イリア、すまないが急用ができました。…申し訳ないが、部屋まで一人で帰つてください。」

そう言い残してジライは駆け出した。

「あ…！ジライさん！待つて…」

遠くでイリアの声がする。何かを伝えようとしているが、ジライには聞こえない。今のジライには、夕日に包まれるテンプルの姿しか映つていなかつた。

ナイト・テンプルはアークナイトの象徴そのものである。ゆるやかにカーブした天井や四隅から突き出た柱。その姿は夕日に照らされ、金色に輝いている。そして、この神聖な建物の中で奏で始めた悲劇の交響曲は今も続いていた。

ジライがテンプルに到着した時、建物は異様な静けさに包まれていた。ところどころのろしのよつた煙が舞つてゐる。ジライはテンプルに続く階段を一目散に駆け上つていつた。

中に入ると、建物の中は夕日が差し込み、光の届かないところには影ができる。辺りを見回しても何も感じられない。あるのは…寝そべっている人影だけだ。

「エウリカ！！

友の姿を見つけ、ジライは駆け出した。そばまで来ると、胸に真一文字の切り傷がある。

「エウリカ！しつかりしろ！大丈夫か？！」

そう言いながら友の体を軽くゆするがすでに息はない。ジライはこみ上げる物を押さえながら、彼の体を静かに下ろした。彼の体を置いたそばには彼のレイブレイダーが転がっていた。持ち上げ、見ると、光刃が出現した形跡がない。どうやら、剣を出す前に切られたのだろう。こんなことができる的是デュエルナイツしかいない。ジライの脳裏のあの時の光景が浮かんだ。マスターを切り、微笑みを残して消えた、あの男…奴か…あの男がやつたのか…ジライの心に怒りがこみ上げてきた。

「…う…う…あ…」

どこかで声がした。ジライは声のするほうを見た。「うう…」確かに声がする。うめき声だが…ジライは声のする方向に走り出した。走りながら周りを見ると、友の亡骸があちこちに横たえている。どれも共に修行時代を過ごした仲間だった。ジライは涙を抑え、一身に駆け抜ける。

そして声がしたであろう場所までたどり着いた。その場所は…大きくアーチを象った天井…両サイドには高さは四メートルはある窓…奥には柱があり、その上には観客席のようなものがある。ここは…闘技場だ。アーライトを目指し日々鍛錬した弟子たちが腕を競う場所…。ジライもここで何回か手合させをしたことがある。そのときは負け続け、泣き出したのをエースになだめてもらつたものだ。「う…ジライ…？」ジライは声の方向に振り返った。そこにも人影があつた。怪我はしているが、意識はあるようだ。ジライはインコムで救急班を呼び出した後、その影のそばに行き抱き起こした。

「シンディ、大丈夫か？」

「ジ、ジライ…？」彼女は目がかすんでいるのか、顔が見えないようだ。ジライは彼女の手を握った。

「シンディ、ここにいるよ。何があつた？」

「…黒い騎士が…テンプルに…みんなが戦つたけど…とても叶わない…」

彼女の呼吸が荒くなってきた。ジライはもつじやべるなど言つたが、彼女は続けた。

「ジライ…気をつけて、敵は…マ…ヒ…」

彼女の意識が無くなり、ジライの中で眠るよつて田を開じた。握っていた手から力が抜け、ジライの手からすり落ちた。彼女の魂は、銀河の意思の波の一つとなつたのだ。

ジライは彼女の亡骸をそつと床に下ろすと立ち上がつた。

その時、ジライは背中に何かを感じた。何か…突き刺されるような感覚を…

後ろを振り向くと、そこには黒い甲冑が立っていた。いや、…たたずんでいる。その手に紫に輝くレイブレイダーナーを握り締めながら…

5、リー・ティ卿

「何者だ…」

ジライは腰に下げたレイブレイマーを取りだすと尋ねた。
「何の目的で…ここに来た?」

甲冑は全身から白い霧のような物を噴出し、いつ言った。

「他人に名前を尋ねる時は…まずは自分から名乗るものだ。騎士殿。」

威圧感のある声だ。だが…どこかで聞いたことのある口調でもある。

「たいそうなことを言つな。こんなに…仲間を殺しておきながら…」
そう言われ、甲冑は辺りを見回した。いたるところに彼に切り倒された仲間たちがいる。みな…銀河の意思の波になつたのだ。

「彼らは名乗りもせずに切りかかつてきただ。騎士たる者、手合わせをするときには必ず自分の名を名乗るもの…そんな礼儀も知らぬ輩は切り捨てられて当然。騎士道の風上にもおけんわ。」

甲冑がはき捨てるように言つと同時にジライは切りかかつっていた。

「ぬあああ…！」

甲冑はジライの剣を受け止めるが、「ふんー」と言い突き飛ばした。彼は簡単に吹き飛ばされたが空中でぐるっと回り着地し、態勢を直すと再び剣を構えた。

「ふむ…多少はできるようつだな。」

「まだまだ…これから…」

そう言い、ジライは再び剣を突き上げた。光が交わり、激しく唸る。そのまま、二人は剣を振り続けた。いたるところで光が弾け、唸りが響く。

「良い太刀筋だ。よほど出来た師匠につかえたのだな…！」

甲冑が言った。

「尊敬できる人だ…！」

ジライが言った。

二人の戦いは、華麗だった。まるで、アモースンのセントラル・オペラで繰り広げられる剣舞のようだ。剣と剣が交じり合い、二人が踊るようにポジションを入れ替わっている様は、さながらダンスのように見て取れる。だが、これは演技ではなく、まぎれもない決闘なのだ。どちらかが死ぬまで続けられる死のダンス…終わる時はどちらかが地面にキスをし、その意識は銀河の意思の波に混じるだろう。

だが、そのダンスにもいさか飽きたのか、黒い甲冑はジライの剣を受けた後、それを押し返し、一呼吸を置いた。先ほどと同じように全身から白い霧を噴き出しながら。ジライは甲冑の動きを待つ。それに合わせて動き、一撃を叩き込むつもりだ。しかし…甲冑は光刃を消すと、レイブレイダーを腰に戻した。ジライは目を凝つた。戦いの最中なのに…甲冑はジライに向けて手を差し出した。そして、出した手の平をジライに向ける。何かが来る…そう感じ、構えを取った瞬間…ジライは後方へ吹き飛んだ。

「！？」

何が起こったのか分らないといった顔で、ジライは起き上がった。敵はまだ手の平をこちらに向けたままだ。ジライは警戒した。しかし、またも強い衝撃とともに吹き飛ばされた。全く分からない。何か強い力で弾かれるようだ。体を起こすと、たつた一回しかくらつていないので、体のあちこちが悲鳴を上げるよろしくしむ。

「ぐつ…！」

ジライはまたも構えを取った。なんだ…一体何がくる？見えない攻撃に警戒心を高め、その手口を見据えようとするが…息が荒くなっているのが分かる。ダメージもある。あと三回もくらえれば死ぬな…その時、ジライの頭にある考えが閃いた。敵の見えない攻撃はジライめがけて飛んでくる。ならば、横に思い切りかわせば凌げるのではないか？一か八かだが、ジライはこの原始的とも言える回避法に全てをたくしてみた。次の攻撃がチャンスだ…彼は敵の気配を探り

続けた。一回目の動作の時、あの攻撃をする瞬間、手に力を込めるように指が硬直するのをジライは見逃さなかつた。あの一瞬を見切りさえすれば…ジライはじつとチャンスをうかがつた。すると、甲冑が再び手の平をジライに向けてきた。

チャンス到来だ！

ジライは手を見据えながらじりじりと足幅を開いた。横に飛びために踏ん張るためだ。踏ん張りながら敵を見る。もう少し…もう少し…そして、チャンスは来た！指が硬直したのだ。ジライは見逃さなかつた。そして横に大きくよけ、レイブレイダーを構え、甲冑に切りかかるうとした時！ジライは大きく吹き飛ばされ、壁に激しく叩きつけられた。全身に激痛が走り、口からは鮮血がこぼれる。

「な…」

ジライはそのまま滑り落ち、壁にもたれかかるようにしてぐつたりとなつた。ジライに向けていた手を下ろし、金属の音を立てながら甲冑は近づいてきた。そして、ジライの前まで来ると立ち止まり、再び腰に下げるあつた剣を取り光刃を呼び出した。

「惜しかつたな、非常にいい読みだつた。たつた一回しか見なかつたのに一瞬を見切る洞察力に集中力・敬意に値する。だが、それは鍛錬すれば誰にでも成しえる事。戦いをするならば、常に先読みをする事が勝利への糸口となる。それがまだ出来ぬからこうして倒れた。経験が足らなかつたな。惜しいが、未熟…！せめて騎士の名に恥じぬよう、最後は剣でどごめをさせて頂く。」

そう言うとレイブレイダーの切つ先をジライに向けた。

「さらばだ、名も無き騎士殿…」

甲冑が剣を振り上げたその時、

「待て！！！」

甲冑は手を止めた。そして声のする方向に田田を向けると、そこには背中に垂れ下がつたマントを翻しながら立つている人影があつた。ヴィースタだ。手には刃の無いレイブレイダーが握られ、その瞳には怒りが見えている。

ヴィスターは周りを見回した。多くの仲間がこの甲冑の剣に敗れ、倒れ伏している。ヴィスターは心の底から怒りがこみ上げてきた。

そして、その怒りは甲冑の騎士に向けられる。

「貴様…何者だ？何用でここに来た…？」

騎士は向き直り、言った。

「ふん、またも礼儀を心得ぬ者が現れたか…『ナイツ・オブ・ラウンド』の質も落ちたものだ。」

「どうのことだ？」

ヴィスターの問いに、甲冑はうんざりしたように言い放った。

「この騎士殿もそうだが、ここにいる者どもは自分から名乗りも上げず斬りかかってきた…騎士ならば、手合わせする際に必ず自らの名を名乗る者。それなのに、最低限の礼儀も持たぬようでは…騎士としての資格なし！」

そう言われ、ヴィスターは手に握ったレイブレイダーを腰にしまって右腕を胸前で真横にした。アーヴナイトの敬意を表す作法だ。

「これは失礼した。この者達の教育の無さは私の責任だ。申し送れたが、私の名はヴィスター。『ナイツ・オブ・ラウンド』の將軍を務める者だ。」

これに対し、甲冑の騎士は光刃を自分の目の前に立てた。騎士の手合わせする際の作法だ。しかし、この騎士の行動はアーヴナイトの作法に酷似している。

「丁重な挨拶感謝する。私の名はリーディ。ダンテの使徒である我が主に仕える者だ。」

「ダンテの騎士…ということは『ユエルナイツ』か…」

リーディは立てた光刃をスースと横に下げた。

「その名は我々は使わぬがな。貴公らが勝手につけたものだ。」

ヴィスターは腰に下げるレイブレイダーを再び手に取り、光刃を出現させると、構えをとつた。剣を自分の体の前に斜めにしながら構える「ディアスター」だ。先手を打つときや、素早い行動をするときを使う。答えるようにリーディも構えた。しかもこれは…防御・警

戒型の「ローマシユア」に酷似している。ヴィスターは感じた……やはり、似ている……

「準備はよいかな……」

騎士が言った。

「リーディ卿、君はここから逃げることはできん。私の剣で倒れるのだ。」

「私の問い合わせの答えには……」

言いながらリーディはヴィスターに斬りかかつた。

「なつてはいなー！！」

二人の剣が交差する。激しくうなる二つの色は、まるでムール人の瞳のようだ。

静けさが辺りを包む闘技場に、二つの交差する光の唸り声だけが響く。お互引くことを知らず、ただひたすら剣を振り続ける。ヴィスターが一度剣を振れば、リーディは剣の行き先を知っているかのように、その場所に自分の剣を導く。それにヴィスターは違和感を感じていた。この騎士の剣の軌道……覚えがあるのだ。かつての親友が得意とした技だ。相手の剣の軌道を自分の中に呼び寄せ、自分の軌道に変える。そして、己のペースに誘い込んだところを斬る。彼らはこの型をクレオヌと呼んでいる。防御を主体とした基本形、クエルトの発展型だ。そして、彼の親友であり、この型を極めた男の名は……

エース・マシュロウ……

この黒騎士の剣は彼のそれに非常によく似ていた。……いや、彼の剣そのものなのだ。彼亡き今、エースの剣を再現できるのはジライを置いて他にはいなはず。すると、エースはジライの他に弟子をとっていたのだろうか……ヴィスターの疑問は晴れなかつた。だが、今はそんなことを考えている余裕はない。エースの剣が向かってくるのだ。その強さは、親友であるヴィスターには痛いほど分かる。何度もこの剣に泣かされ、救われたことか……だが、この剣はどこか濁っている感じがする。刃を交える中で、ヴィスターは複雑な想いに駆られ

ていた。

三度目だろうか、お互の剣が交差した後、二人は距離を置いた。辺りには静寂が立ち込める。すると、リーディーは構えていた剣を下げた。と同時に、片方の手のひらをヴィースタに向かえた。

「何か来る！」

そう感じたヴィースタは構えを解かず、警戒した。そして、リーディーが指先に力を込めるように反らした時、ヴィースタの体は何かに押されたように後方に吹き飛んだ。吹き飛ぶ最中、彼は空中でクルッと一回転するとそのまま地面に着地した。しかし、その顔はひどく驚いた形相になつていて、まるで、見てはいけないものを見てしまつたような顔だ。

「リーディーといったな……貴様……なぜコスマを使える！？」

「分からん、気付いたときには使えていた。それだけの話だ。」

リーディーは再び剣を構えた。

「だからといって、貴公が私に勝てるとは限らん。先ほどの一戦でそれが分かつた。貴公と私の剣の腕はほぼ五分、恐らくこの勝負の決着は剣以外でつくと私は見ている。それが何なのかは予測もつかないがな。」

リーディーの拡声器を通したような声が静寂の中に響く。

「だが、騎士たるもの剣以外で勝つなど言語道断！……こんなつまらん力で勝とうなどとは毛頭思わぬ！ゆくぞ！……」

言いながらリーディーはものすごい速さでヴィースタに迫る。光刃が残像を引くほどの速さだ。一気にヴィースタとの距離が縮まり、一刀両断の構えにリーディーが入った時、ヴィースタは片手を差し出した。

「……吹き飛べ……！」

ヴィースタが言つた瞬間、リーディーはとてつもない勢いで弾かれた。その力は凄まじく、闘技場の入り口から約三〇〇メートルはあるだろう、観客席まで彼を吹き飛ばした。リーディーのぶつかつた辺りには埃が舞い、煙が立ち込めていた。

「……くつ……！」

瓦礫を搔き分けながらリーディは出てきた。装甲にへこみができるようだが、たいしてダメージはないようだ。瓦礫の山から体を出すと、彼は立ち上がり視線をヴィスターに向かた。ヴィスターは剣を構え、前進してくれる。

「どうだ？ 本物のコスモを味わった気分は…？」

「ほ、本物だと… どういう意味だ？」

その問いにヴィスターは少々くぐもつた声で答えた。

「もともとコスモは、ナイス・オブ・ラウンドの將軍を務める者が、自ら流れる時を止めるために使う銀河の意志の力。そのためだけに使われる力なのだ。故に…」

ヴィスターは、再び手をかざした。「紛い物などは、ありえん。」

ヴィスターの言葉とともに、再びリーディは壁に叩きつけられた。先ほどよりも深く壁にめり込んだようだ。崩れる瓦礫の数が多い。

崩れる瓦礫の中からリーディ卿が現れた。あちこちの装甲がへこみ、欠けている所もある。見た目から判断すると、かなりのダメージを負っているだろう。

「リーディ卿、逃がさんぞ。この力はおいそれと身に付くものではないのだ。誰が貴公にこの力を与えたのか…興味がある。」

リーディの呼吸音がひときわ激しくなった。どうやら、相当のダメージをうけているようだ。呼吸装置のような音が聞こえてくる。
「かなりの深手じゃないのか？ これ以上の戦いはもはや無意味！ 剣を下げる、おとなしく捕虜になれ。そうすれば手当ができる。」

呼吸音が一層激しくなった。フーッフーッという音の後にカチャン…カチャン…と音が鳴っている。金属が重なり合っているような音だ。まるで怒っているかのように、ヴィスターは感じた。そして、それは当たっていたのだ。

「捕虜…捕虜になるだと…それは私に生き恥をさらせといつているのか…」

リーディはレイブレーダーを握っている拳をさらに強く握った。レイブレーダーがギシギシと音を立てるのがヴィスターにも聞こえる。

怒りは相当なものだ…

「違う、そんなことは…」

ヴィースタが言い終わる前にリーディは「うおおおおおお…」と叫び声を上げながら駆け出した。いや、駆け出したというよりは飛び掛つたといったほうが当たっている。ほぼワンジャンプでヴィースタとの距離を縮めると、先ほどコスモを繰り出した手をヴィースタに向ける。ヴィースタも同様、先ほど繰り出した手を差し出した。

二人の手から出された目に見えない力がぶつかり合つと、辺り一面に衝撃が走つた。壁は亀裂が走り、リーディが叩きつけられた壁は、彼がめり込んだ部分から崩れしていく。二人のコスモはさらに唸りを上げた。

「クッ…！！！」

リーディはほぼ力のすべてを出していった。ヴィースタの強靭なコスマに打ち勝とうと粘るが、ヴィースタはまだ余裕の表情だ。その余裕はリーディの怒りをさらにあおり、彼は再び力を込める。だが…

ヴィースタはこれ以上は無意味と判断し、自分の拳から吹き出るコスマを強くした。すると、その力に耐えられなくなつたのか、リーディの片腕が吹き飛んだ。「うおっ！」という声と共にリーディは後ろへ吹き飛ばされた。ヴィースタはゆっくりとリーディに近づいていった。レイブレイダーの光刃は出したままだ。リーディはぐつたりと横たわっていた。呼吸音は落ち着いていたが、相変わらずカチヤンツ…カチヤン…と音がする。ヴィースタは吹き飛んだ腕のほうに目をやつた。大量の血液が溢れ、もはや助からないだろうと思つたが、…違つた。確かに血液もあるが、ヴィースタの目は別の物を捉えていた。吹き飛ばされた腕には、本来あるものがなかつた。普通なら、吹き飛んだ先から骨や、血管や、皮膚…そんな物が出ているはずなのに…違つた。骨であるべきものは金属、血管であるべきものは配線らしきもの、皮膚であるべきものは…分からなかつたが…それだけでヴィースタは確信した。リーディ卿は人間ではない。

機械の体を持つてゐる…

「リーディ…貴様…」ヴィスターは歯軋りした。考えたくない事が頭に浮かんでくる。それは振り切るうとしても、尚ヴィスターにまとわりつた。

「機械の体なのか…？」

リーディは答えなかつた。バイザーの中にある彼の瞳はヴィスターを写していなかつた。何か…遠い所を見ているようだつた。

「答えろ！リーディ卿！！」

荒くなつたヴィスターの声を聞いて、彼はやつとヴィスターに向けた。彼は、バイザーの奥で瞬きをした。知つた顔だ。何か怒つているような…困惑しているような…そんな顔をしている。彼はついさつき剣を交えたことを思い出した。何か…懐かしさのようなものがこみ上げてくる。遠い昔に感じた…何かだ…

「ヴィスター…」「

リーディは体を起こした。そしてゆっくりと立ち上がつた。だが視線は下を向いたままだ。

「私が機械の体などとほざつでも良い」と…ただ、一つ言える事は…

彼は視線を上げ、ヴィスターを見た。そして、言ったのだ。

「私は…騎士だということだ。」

その一言で、リーディ卿に何かが宿つた。何か、誇り高い…魂が降り立つたのを、ヴィスターは感じた。今までと何がが違う。そう感じたのだ。そして、リーディは握っていたレイブレイダーから光刃を出現させると、ヴィスターに斬りかかつた。

「ちい…！」

ヴィスターも構え応戦するが、先ほどとは打つて変わつて剣筋が違う。最初は何か濁つたようなものがあつたが、今はそれがすっかり無くなつてゐる。太刀筋に迷いや雑念が一切ない、このままではまずい。そう思つた時、リーディ卿の足蹴りを食らい、体勢を崩された。さらにまづい。このままでは奴の剣に斬られる。ヴィスターの読み通りリーディは迷うことなく彼を斬りにかかつた。その太刀筋はヴィス

タのそれより数倍速い。

間に合わない……！

ヴィスターがそう思つた時、リーディの剣が止まつた。いや、止まつたのではなく、受け止められたのだ。だが、自分の剣ではない。田の前に誰かが立ちはだかりリーディの剣を受けているのだ。ヴィスターは田を凝らしながら言つた。

「ジライ……！」

なんと、リーディの剣を受けていたのはジライだったのだ。あちこち怪我をしており、ところどころに血の滲んでいる場所がある。だが、剣を握る手はしっかりしていた。この若い騎士の復活にはリーディも驚いていた。

「……目覚めたのか……名も無き騎士よ……」

リーディの言葉にジライは皮肉たっぷりの言葉でお返しした、

「あれだけやかましくされたら、おちおち寝てもいられねえよ……！」

ジライはそう言つてリーディの剣を弾いた。何と力強い剣筋なのか！ジライの剣にも迷いはない。むしろ澄み切つた水のように穏やかだ。ジライの成長にヴィスターは驚かされていた。

「形勢逆転だな、さすがのあなたもアーケナイト一人を相手にするのは無理だろ。おとなしく降伏したらどうだ？」

ジライは得意気に言つた。が、その言葉を聞いて、リーディは笑い出した。高らかに、大きな声で笑い出したのだ。

「ふ……ふふふ……ははは……！」

これにはさすがのジライもかちんと來た。気がついた時には、リーディに向かつて剣を向けていた。

「何が可笑しい！？」

リーディは笑いながら、答えた。それはまるで不機嫌な生徒をなだめるように穏やかな口調だ。

「ふふふ、騎士殿よ。戦いとは、何十にも策を用意してから望むものなのだよ。覚えておくがいい。」

リーディはそう言つと、剣をしまい、ヴィスターが砕いたのとは逆の手の平を地面にかざした。それを見た瞬間、ヴィスターの顔が変わりジライに向かつて声を張り上げた。

「ジライ！ その場からすぐ離れるんだ！！」

「言つが早いか、ジライの目の前に土煙が巻き起つた。それは、ジライやヴィスターを

囲むように巻き上がりしていく。ヴィスターは目にも土煙が入らないよう顔を覆うように腕を突き出している。

「く！！」

「汚いぞ！！ これがあなたの言つ騎士道精神でやつか！？」

ジライはありつたけの力を込めて叫ぶが相手には聞こえていないようだつた。それは当たつており、土煙が晴れた時、その場にリーディの姿は無かつた。

「くそ！！」 ジライは悔しそうの地面を蹴り上げた。

「落ち着け、ジライ。」

ヴィスターはジライの肩に手を置いた。

「しかし、…！！」

その時、二人の意識の向こうにあるヴィジョンが移つた。その瞬間、二人は顔を見合わせ、元来た道を走り出した。再び仲間達の亡骸が目に付くが、目もくれず無我夢中で駆け抜けた。そして、テンブルの入り口まで戻つた時、ランチャーの爆音が聞こえてきた。外に出ると、そこには通商連合のランチャーが佇んでおり、その入り口にはあの甲冑が立つていた。

「逃げるのか！ リーディ卿！」 ジライが叫んだ。

「それは違うな、これは一時撤退という奴だ。」

すました態度でリーディが答えた。

「ヴィスター將軍。今日は貴公らの実力を拝見したくここに参つた。数々の無礼は許して

頂こう。だが、次はこうはいかぬ。」

リーディは拳を突き出し、ギュッと握つた。

「こ」の腕の借り……忘れんぞ……！」

ランチャヤーがエンジン音を奏で、宙に浮かび始めた。

「名も無き騎士殿、私にもう一度会いたくば、通商連合の旗艦グレイファンтомまで来るがいい！私はそこにいる。ヴィスター將軍、貴公の探している男も一緒にだ……！」

ハッチが完全に閉じると、ランチャヤーはふわりと浮かび、エンジンの出力を上げるとエルニアの夕焼けに消えていった。消えていくランチャヤーの影を、ジライとヴィスターは、やりきれない思いで追いやった。突然の襲撃でテンブルはほぼ壊滅し、幼い命や家族ともいえる同胞の命を次々と奪つた黒い騎士を捕らえることはできず、結局逃がしてしまった。この出来事は一人にはがゆさだけを残すだけになつた。

「将軍……生存者を探してきます……」

そう言つと、ジライはインコムを取り出し、救助隊を要請すると、静まり返つたテンブルの階段を駆け上り、生存者の探索に走つた。ヴィスターはいつまでも夕焼けを見つめていた、いや……睨んでいた。怒りに満ちたその顔は、いつまでもエルニアの夕焼けに照らされ続けている。

6、大老の秘密

テンプルの状態は思つた以上にひどく、ナイツ・オブ・ラウンドの危機ともいえる状況だ。特に、テンプルの守護者、マスター・シンディ・クリンシスが殺害されたのは痛すぎる損失になってしまった。なにせ、テンプル内で彼女が指導していた弟子の人数は軽く百人を超えるのだ。その弟子たちの大半もあの黒騎士によつて殺されてしまった。ハンはその報告レポートに目を通すのも億劫になつていた。

「その黒騎士は確かにダンテの使徒と言つたんだな？」
ハンは確認するようにつぶやいた。

「はい、この耳で聞きました。間違いありません…」

ヴィスターは答えた。

「これは…どういうことなのでしょうか…」

二人の間に疑問が飛ぶ。ハンは一旦組んだ腕を離すと、また組みなおした。どうも落ち着かない様子だ。

「大老…ダンテの使徒というのは…デュエル・ナイツの長を表すんでしようか…？」

「…近いものではあるが、少し違う。いずれおまえには話そつと思つていたが…」

ハンは、ヴィスターにソファを勧め、自分もそれに腰を下ろした。

「ヴィスター、私の本体のことは知つているな？」

「ええ、先代からつかがつています。命の創造主と…」

ヴィスターもハンにならつたように腕を組んだ。

「アカシック・レコードですね…」

「そうだ、この宇宙の万物の誕生から終わりまでを記録していると、アカシック・レコードと…この銀河の全ての生命を生み出した、生命の樹「セフィロト」…この一つが合い重なり合つて私を動かしている。故に…」

「銀河の意思はあなたの意思も同然…」

ハンはうなずいた。

「そうだ。かつて、銀河の文明がもっとも栄えた頃、私は生まれた。そのころ、このエルーアを中心とした十の惑星が団結し、騎士団を結成した。それがナイツ・オブ・ラウンドなのだよ。」

ハンは立ち上がり、目を覆い隠していたバイザーを外した。そのまま下からは、視力を失った瞳が姿を現した。

「なぜ、ナイツ・オブ・ラウンドは結成されたのか…それには理由があつた。本来、この騎士団は存在しなくてもよかつたものだが、存在せざるを得なかつたのだ。何故ならば…」

「アカシック・レコードの「コピー」が存在するから…ですね」

ハンは視力を失つた瞳でヴィスターを見た。その白くなつた瞳は、映る物全てを吸い込むかのように深かつた。実際、ヴィスターは全てを見透かされた気がしたのだ。

「…そうだ、本来、ナイツ・オブ・ラウンドの主旨は、アカシック・レコードと「セフィロト」の完全防衛にある。いつしか、その主旨は銀河の秩序と平和を保つことへ変わっていつたがな。だが、光の存在があるならば、闇もまた然りだ。ナイツ・オブ・ラウンドを光の守護者とするならば、ダンテの使徒は闇の守護者に当たる。ダンテの使徒が守護するものは闇のアカシック・レコード…つまり、…私のコピーだ。」

ヴィスターの目が大きく見開かれた。それは驚きとなり、彼の表情から十分に読み取ることができる。

「ということは…大老のような人物が、彼らにも存在するのですか？」

ハンは首を振つた。

「いや…存在はしない。我々が多重の存在になつてしまふと保たれていたバランスを崩すことになる。だが…」

ハンは続けた。

「私のようなことはできる。」

ヴィスターは目を細めた。ハンの言ひていることが理解できなかつた。「闇のアカシック・レコードには私のような意志を伝達する役目はおらんが、それに似た者をつけることはできる。そして、そのものは同時にアカシック・レコードの守護者もあるのだ。」

ここまでくればヴィスターもおおまかな話を理解することができた。つまりこういふことだ。

「それが…ダンテの使徒なのですね…」

ハンはニヤッと笑つた。

「察しがいいな、ヴィスター。その通り。」

「ですが、大老。闇に落ちるには自らの絶望、恐れ、怒りのどれかが強まつた時です。まして、闇のアカシック・レコードはどこに存在するかも分からぬ…どうやって守るのです?」

「それは、デュオレン시스が襲撃されたことに答えがある。」

また理解できなかつた。それと一体どういう関係があるのか…ヴィスターの疑問は深まる一方だ。同時に悪い予感もする。この先は、何か聞いてはならぬよくな。

「確かに闇のアカシック・レコードの所在地は明確ではない。だが、それは光の側からみた場合だ。人が闇に落ちた時、その時に、レコードがその者を呼び寄せるのだよ。そして、自らの起動キーに差し向けるのだ。」

ヴィスターの顔からだんだんと汗が噴出してきた。ふつぶつと、すこしづつ…

「待つてください…ということは…」

ヴィスターは自分が恐れを感じていることを抑えられなかつた。恐れは恐怖になり、やがて怒りへ…だが、理性がそれを閉じ込めていた。まだ冷静な自分がいる…ヴィスターはそう感じた。

「あの襲撃は、ただの襲撃ではない…と?」

彼は組んだ腕を解き、だらりと垂らすとその先で握りこぶしを作つた。

「あの…船には…デュオレン시스の王族が乗っていました。もし、

アカシック・レコードが呼び寄せたとするなら……」

「察しの通りじゃ……起動キーはデュオレン시스の王族の血筋……そして、闇のアカシック・レコードはデュオレン시스に存在する……。」
ヴィスターは絶句した。だが、それを無視するかのようにハンは続けた。

「はるか昔だがな、ある戦争が起こつた。銀河中を戦場に変え、巻き込んでいったのだ。その時、その戦争を終結させたのは誰だったと思う?」

ヴィスターは、首を横に振つた。が、何となく答えは分かつていた。そして、その答えはゆっくりとハンの口からこぼれてきた。

「その戦争を終結させたのは……ダンテの使徒だつた。デュエルナイツだつた。それは何故か……光が強すぎたからじゃ。光が強ければ闇は強くなり、光が弱まれば闇も弱くなる。皮肉なようだが、我々は常にこの微妙な関係の上に成り立つてゐる。そして、今、我々は闇の勢力を敵と見なしている。これがどういう事か、分かるな。今は光が最も強い時と考えてもよい。とすれば、その光から闇が生まれ出ることもあり得る。」

二人のため息だけが辺りに響き渡つた。ささやくように……ただ静かに……ハンは、それ以上何も言わなかつた。まるでヴィスターにこの答えを問い合わせるように口をつぐんでしまつた。ヴィスターもまた考えていた。今自分に出来ることはなんなのかを……そして思い出していた。あの黒騎士の言葉を……

……貴公の探ししている男……

引っかかる言葉だ。この言葉は、ヴィスターが長い間忘れていた何かを揺れ動かしていだ。さつきから湧き出る不安はこのことなのだろうか……ヴィスターは再度自分に問いかけた。

今自分に出来ることはなんなのか……

答えは一つしかなかつた。

「大老……私もグレイファントムに乗り込みたいのですが……」

ヴィスターがその言葉を口にした時、ハンはうなだれた。彼はこの

言葉がヴィスターの口から出てくることを分かつていたかのような雰囲気だつた。そして、その運命も…

「そこに行くことを…おまえはよく分かつているのだな…」

「はい…承知の上です。」

「そこにあるのが絶望だけで、おまえを押し潰そうとしていてもか？」

「はい…」

ハンは口を開ざした。銀河の意思是この男に試練を与えようとしている。が、彼にその試練が耐えられるのか…耐え抜き無事に戻つてくるのか…残念ながら、銀河の意思是答えてはくれなかつた。それは、ハンに決断することしか許さなかつたのだ。

「大老…お許しを…。」

ハンは組んだ腕を放し、ソファから腰を上げた。そして、ヴィスターの隣まで行くとその肩にそっと手を置いた。

「ヴィスター、そこに行くということはおまえ自身の決着をつけに行くということだ。そこで、おまえは大きな壁に当たる…そして、絶望し苦しむ。私にはそれが見える、分かるのだ。だが、おまえにはそれを克服し、乗り越える力がある。私はそれを信じている。」

そう言つと、ハンは手を離し、窓際までゆっくりと進んだ。

「行つてきなさい。」

ハンは言つた。

「恐らく、先に向かつたジライにも試練は襲い掛かる…その時にはおまえの手が必要になるはずだ…行つて、あの子の力になつてやりなさい。あの子はまだ自分の使命に気付いてはいない。この銀河の、秩序を取り戻す大いなる使命にな…」

「大老…」

「頼んだぞ、ヴィスター…」

そう言われ、ヴィスターはハンに向かつて敬礼し部屋を飛び出した。一人部屋に残されハンは自分の中の意思に問いかけた。これでよかつたのか…と。

だが、それは答えてはくれなかつた。

ヴィースタが発着場まで行くと、そこにはすでに今回の任務で召集された者でいっぱいになつていて。皆、出撃の命令を今か今かと待つてゐる。

その中を、ヴィースタは発着場のゲート端に用意されたスターファイターに向かつていった。皆がアークナイトの将軍が通る道を空けて行く中、一人の男が立ちはだかる。長身に長い金髪。腰には…レイブレイダーに似た武器を下げている。ヴィースタはこの男をよく知つていた。ジライの相棒で…彼の親友だ。

「マー・キュリー…

ヴィースタは彼の名前を口にした。彼は、腕を組んで仁王立ちになつてゐる。

「將軍、ジライはもう行つちましたのか?」

彼が聞いてきた。ヴィースタはうなずく。

「あんたも行くのか?」

ヴィースタは再度うなずいた。マー・キュリーは口元を二ビルに歪ませ、彼の道を空けた。

「あいつのこと、頼むぜ。あんたと違つてずぶとい神経を持ち合わしちゃいないからな。」

「あまり失礼なことは言わないほうが身のためだぞ。」

ヴィースタはそう言いながらも微笑み、マー・キュリーの空けた道を進んだ。マー・キュリーは進んでいくヴィースタの背中に向かつて、胸に手を当てながら「銀河の意思のあるがままに…」とつぶやいた。

ヴィースタを乗せたスターファイターは発着場の床から離れると、ゆつくりと夕焼けに向かつて進みだす。そのキャノピーの中で、ヴィースタは憎しみに満ちた顔で夕焼けを睨みつけている。

スターファイターは上昇し、大気圏を抜けるとすぐさまハイパードライブに突入した。

7、突入、グレイ・ファントム

シスター・サンと呼ばれる太陽系がある。この銀河のほぼ中心に位置するそれは、この銀河の誕生とともに生まれた恒星と言い伝えられてきた。現に、過去に誕生し繁栄してきた文明達の出現は、常にこの太陽系を中心に栄えてきた。この太陽系が全ての文明系に恵みを与えてきたのだ。それは、現在の銀河公国にも言えることである。

だが、一つだけ違うことがあった。

それは過去の文明は確かにこの太陽系を中心に栄えたが、この太陽系で戦争はしなかつたということだ。

アモースンの衛星軌道上では激しい戦闘が展開されていた。銀河連邦率いる宇宙軍第十二番艦隊と通商連合率いる武装連合艦隊「スラッシュ・ナイブズ」。共に重装戦艦十隻を越える大艦隊だ。レーザー砲が唸り、戦闘機が飛び交うこの空域は、十秒に一人の割合で命が消えていく。だが、損失するのは銀河連合だけである。皮肉なことに、武装連合艦隊の兵士は生物ではない。機械だ。機械が命令を遂行しているのだ。これは銀河連合にとつては相当なデメリットになる。機械は傷みを感じない。与えられた任務を遂行する上で、撃墜されても何の損失もない。ただ、戦場から一つの駒が消え、その補充をするだけだ。それだけで、戦況は再び戻る。敵はそれで充分だろう。だが、銀河連合はそうはいかない。戦場を駆け抜けるのは生身の人間の乗ったファイターであり、それが撃墜されれば戦況も大きく変わる。しかも、コンマ十秒の間に、連合軍は一人の優秀な兵士を失うのだ。これは非常に痛い。痛すぎる戦況だ。

銀河連合旗艦『フォックス・ドール』の艦橋では、めまぐるしく変わる戦況に慌しく対応していた。モニターは常に戦場を駆け抜け戦闘機群を捉え、レーダーは警告音をけたましく鳴らし続けて

いる。

「司令！！敵旗艦『グレイ・ファンタム』発見しました！モニターに転送します。」

索敵士がそう言つと、艦橋正面モニターに現在の戦況が映し出された。そこには、敵の艦隊図と詳細が映し出されており、ポインターが点滅をしている。索敵士がそのポインターを動かし、敵艦隊の中央、恐らく、重巡洋艦一隻と軽巡洋艦三隻が三角形に陣形を組んでいる中央へ持つてくると、その場所の映像が映し出された。銀色に輝き、レーザー砲は見ただけでも約三十門、やうに一千メートルを越える巨体は見るものを圧倒した。『フォックス・ドール』である。その姿を見た艦隊司令、ローランドもその一人だった。彼は腕を組み、モニターを凝視していた。

「馬鹿でかい船だ……こんなものが敵とはな……笑つちまつぜ……」

モニターを睨んでいたローランドは、組んでいた腕を解くと、艦長席正面のコンソールにある通話ボタンを押した。

「ミスター・ナイトをブリッヂへお呼びしろ、探し物を見つけた。」

しかし、返ってきた返事は、彼を驚かすものだった。

「も、申し訳ありません！司令！ミスター・ナイトはほかにまいりつしゃいません！」

「何！？どちらへ行かれたといつんだ？」

その時、通信を遮つて割り込んできた回線があつた。ローランドはすかさずそのボタンを押した。すると、聞き覚えのある声がスピーカーから流れてきた。

「司令、『グレイ・ファンタム』は発見できたんだな？」

ジライの声だ。

「ええ、なんとか。しかし、あの船はかなりやばいことにありますよ。なんせ、重巡洋艦二隻に軽巡洋艦三隻、そのたるものるの壁にかこまれてます。飛び込んだら最後、四方八方から攻撃されて、ジ・エンド！…」

そう言いながら、ローランドは握った拳から親指だけを突き出し、

首の前で横に切つた。

「…自殺行為ですよ。」

「そうかもしれないな、でも行かなければならぬ。」

スピーカーの向こうでジライはそう言った。かすかに微笑んだようないい回しだ。ローランドは口元を二ヒルに歪ませた。

「ミスター・ナイト：今どちらに？」

「…格納庫にいる、乗ってきたファイターの中だ。もう、火が入つてゐる。」

なるほど、スピーカーの向こうから微かだが機械の作動音が聞こえる。発進準備は完了しているようだ。

「司令、グレイ・ファンタムの位置を転送してくれ。発進する。」

「な！？無茶です！船の外には敵がうじゃうじゃいるんですよ！たつた一人で突破なんて…」

ジライはコンソールに手を伸ばし、ファイターの火器管制モードをレベル2にした。ファイターのビームマシンガンとクロスレイミサイルの使用を有効にしたのだ。これで基本的な戦闘はできる。ジライははにかんだ。

「大丈夫だ、私をそんじょそこらの兵士と一緒にしないでもらいたいな。これでも、アークナイトの一人だからね。それに、まもなくエルニアからの支援部隊が到着するはずだ。それがくれば戦況も変わる。それまでの辛抱さ。」

全く…この騎士様は仲間を信用しすぎるな、この先裏切られることも出てくるだろうに…

ローランドは、この一人の騎士の言動を聞いてそう思つたが、不思議と好意を持てた。恐らく、彼の人間性がそう思わせたのだろう。死なせたくないな…ローランドは心の片隅でそう願つていた。

「司令、短い間だが世話になつた。ハッチを開放してくれ。発進する。」

ジライの声が艦長席にこだました。

「し、司令…」

「いいんですか？」

ブリッヂの全員がローランドの顔をつかがつしている。じりやら、みんな彼に行つてほしくないのだろう。今飛び出せば、むざむざ殺されに行くようなものなのだ。自殺したいのなら話は別だが……しかし、この騎士殿は自分の使命を果たしにいくのだ。ここでもし引き止めるようなことをすれば、一生恨まれるだろう。彼は指示を出した。

「ハッチを開放しろ、騎士殿を見送るぞ。」

一瞬ブリッヂはざわめきに包まれた。司令の指示はみんなの期待にそえなかつたようだ。格納庫のハッチが展開し、ジライの乗つたスターストライカーが青い咆哮を上げて飛び出していく。艦長席のスピーカーから「ありがとう」という言葉がかすかに聞こえたのをみんな聞き逃はしなかつた。みな落胆した様子だ。だが、ローランドには考えがあつた。

「索敵士、このフィールドで現在忙しくなさそうな連中はいるか？」
そう言われ、索敵士はレーダーを使い、急いで確認した。反応はすぐ見つかつた。小隊反応が三つほど……いずれも艦隊の近くで指示を待つている者達だ。

「確認しました、艦隊より三時の方向。Eフィールドで待機中の小隊があります。レッドチーム、ブルーチーム、ゴールドチームです。」

「よし、回線をつなげ。」

ブリッヂのスピーカーから次々と音声が飛び出してきた。みな、なんのようだ？ やつと次の任務か？ などと言つてゐる。じりやら相当待ちくたびれているようだ。

「みんな、聞いてくれ。先ほど一人の騎士殿が本艦から発進した。これより、単身グレイファントムへ乗り込むようだ。ご一緒したいところなんだが、我々は任務のためこの場に留まらなければならぬ。そこでだ、諸君らに我々の代わりに騎士殿の護衛をお願いしたい。」

そこでローランドは一呼吸置いた。

「この銀河の未来があの騎士殿にはかかっている。少しでも近くまで騎士殿を…守つてもらいたい…！」

それを聞いたチームのリーダー達はそれぞれが歓声を上げていた。そのどれもが喜び、この任務の重要性を認知している。非常に優れた人材だ。それだけに失つてしまつたら大きな損害になる可能性も大きい。だが、今はそんなことを言つてはいる場合ではないのだ。

「ジョナサン…！」

レッドチームのリーダー、ジョナサン・バークミンを、ローランドは呼び出した。雑音まじりに返事が返つてくる。

「何ですか？司令…？」

突然の呼び出しにジョナサンは少々うろたえた。

「ジョナサン、今から君たちのチームは別的小隊として認識される。君がリーダーだ。コードネームは…ナイト・オーダー…！」

スピーカーからは雑音しか入つてこない。

「頼むぞ…！」

ようやくスピーカーから雑音が消え、ジョナサンの鮮明な声が入ってきた。その声は、新たな使命を誇つていて。

「…ナイトオーダー・リーダー…了解…！」

彼らは、それぞれのチームで編隊を組み、ジライのファイターを追走していく。その後姿を、ローランドはいつまでも見つめていた。

ジライの乗つたファイターは、ステイヒック社製R1210-9ライオネットをナイツ・オブ・ラウンド用に特別なチューニングを施した機体だ。エンジンはネメシス型U101改、固定武装はファイン・レーザー砲一門にアクティブミサイル。機体は装甲を厚くし、対弾性をアップさせながら、軌道力も充分に確保している。特筆すべきは、単体でハイパードライブに突入できるという点だ。通常のファイターは、ブースターパックを使用しハイパードライブを

行うが、彼らの駆るスター・ストライカーはエンジン自体にジェネレーターを搭載しているので座標をセットティングするだけで使用できる。非常に便利なシステムだ。それを使い、ジライはエルニアから「ニアモースン上空までワープしてきた。普通の航行なら軽く一日かかる距離を約半日で到着できたのだ。だが、それでも若干遅かつたようだ。到着した時、すでに戦況はほぼスラッシュ・ナイブズに傾いていた。それはジライが飛び出した今もあまり変わりないようだ。スターストライカーの通信スピーカーから何かしらの通信が飛び交っている。どうやらジライを呼び出しているようだ。発信元は艦隊旗艦のフォックス・ドール艦長、ローランドからだ。しきりに呼び出してくるので、ジライはしかたなしに受話スイッチを押した。

「艦長、何の用だ？」

「ミスター・ナイトー？」無事ですか？」

ローランドは先ず、ジライの身を案じた。

「まだ撃墜されていないが…」

ジライは少々返答に戸惑つた。目の前では、気を抜けば即撃墜されるような場面なのに、いざ呼び出しに答える間の抜けた質問だである。だが、ローランドは無事を確認すると、嬉しそうに喋り出した。

「よかつた！ 実は、先ほど船の周りで待機していた部隊をあなたの護衛に向かわせました！ 彼らにはあなたの身辺警護を厳重にするよう言つてあります。部隊名はナイト・オーダー！」

何でことを…！

ジライはこの艦長の親切さを心底憎んだ。彼は自らの義務を果たすためにグレイ・ファンタムに特攻するのだ。これは、銀河連合とは関係のない、自分自身の義務なのだ。それなのに関係のない人間を巻き込むわけにはいかない。そう思い、彼はエルニアを単身で飛び出したのだ。それがここに来てこんなことになるとは…。彼らこそ全く関係のない立場にいるのに巻き込んでしまった。ジライはローランドとの通信を即座に切り、回線を戦闘用に切り替えた。

「ナイト・オーダー！聞こえるか？」

しばらぐして返答があつた。

「聞こえます、ミスター・ナイト。」

「そうか、感度は良好そうだな。君がリーダーか？」

ジライの問いに、彼はイエスと答えた。

「よし、そしたら今すぐ引き返してくれ。私の任務は君たちには関係のないものだ。…おつと…」

目の前から破壊された戦闘機の破片が突っ込んできたのを、ジライは間一髪でかわした。全く…通信しながらの操縦はレイブレイダードで戦うことよりも数倍疲れる。ジライは進路に障害がないことを確認すると、もう一度回線を開いた。

「聞こえたな？リーダー、早々に引き上げてくれ。」

だが、聞こえていいのかいないのか。彼らは引き上げる様子を見せなかつた。

「リーダー！聞こえているのか！？」

すると、少々重い声で返事が返つてきた。

「私の名前はジョナサンです。」

ジライは苛立ちを感じていた。早く引き上げてもらいたいのに、こちらの気持ちを察知していないかのように彼らは編隊を組み始めた。

「ジョナサン、君は私を馬鹿にしてるのか？とにかく今すぐこの場を離れて本隊と合流するんだ！！」

田の前で、敵のビームが炸裂する。どうやらまた誰か撃墜されたようだ。まったく…自分の身を守るのに精一杯なのに、これ以上やつかいなことを増やさないでもらいたい…ジライは忙しく操縦桿を握るコックピットの中でつぶやいた。

「我々はミスター・ナイトをお守りするためにここにいるのです。」

突然通信が入ってきた。例のジョナサンからだ。

「結構だ、それより早く船に戻ってくれ！私より向こうの方方が重要だ！」

「そういうわけにはいかないんですよ……」

そう言い終わると、ウイニングを青に染めた連合軍の戦闘機が、ジライの前に飛び出した。どうやら敵がこちらに標的を変えたらしい。おびただしい数の敵機がジライの機のレーダーで確認された。それを見てジライは叫んだ。

「何をする気だ!? やめろ、戻るんだ!!」

その瞬間、前方でパツと火の粉が飛び散った。突入していった戦闘機達が撃墜されたのだろう。まるで花火のように一瞬の閃光をあげて闇の中に消えていった。それを無視するかのように敵はこちらを目指して進んでくる。

「隊長！ 僕に構うな！ 早く戻ってくれ！」

そう懇願するジライを無視するかのように戦闘機隊はジライの機を囲むようにしてフォーメーションをとつていく。

「ミスター・ナイトを囲んだまま、グレイファンタムに突入する。全機遅れをとるな！ 足並みそろえろ！」

フォーメーションを組んだまま、彼らは敵機の集団に飛び込んだ。そこはビームがくまなく交差し、操作を誤ると一瞬で落とされる場所だ。敵の攻撃には目もくれず、ただひたすらフルスピードでビームの中を駆け抜ける。しかし、それだからといって逃げ切れるわけでもない。一機、また一機と落とされ、確実にジライを囲むフォーメーションは崩れていった。

「隊長…ここまでくれば、あとは僕だけで十分だ！ 行っててくれ！」
「駄目です、まだ旗艦には近づいていません。」

確かに、ジライ達はまだビームの嵐の中におり、グレイファンタムははるか彼方にそびえるかのようにたたずんでいる。

「だがこれ以上僕なんかのために命を捨てないでくれ…!
右後ろで光が炸裂し、また一機撃墜された。

「我々の任務は…ミスター・ナイトを無事に敵旗艦までお連れすることです。」

「もういい！ これ以上死人が出るのはたくさんだ！ 引き返してくれ」とです。」

「！」

ジライがそう言つた瞬間、聞き覚えのある声が無線から流れ込んだ。

「できた。

「全く同感だ、すぐ引き返してくれ」「！？」

すると、目の前から一機のスター・ファイターが飛び出してきた。機体を赤に染めたステイヒック社製ヘイゼルだ。

「ヴィスタ将軍!? なぜここに! !」

「そんな話はあとだ。ナイトオーダー、すぐにフォックスドールまで引き返してもらおう。ここからは我々一人で行く。」

しかし…という通信を、ヴィスタは半分命令調にさえぎつた。

「はつきりいつて足手まといだ。余計な負担はいらないんでね。」

ここまで言わればもはやいる意味はなかつた。ジョナサンは了解…とだけ言い残し、すぐさまフォックスドール目指して反転した。同時に、ここにきてやつとジライの緊張も解けた。これから命がけの戦いをするだろうに、余計なことまでは背負い込みたくなかつたのだ。正直ほっとしている。だが、なぜここにヴィスタが…? ジライは通信回線を開き、ヴィスタに問いかけた

「将軍、一体何があつたんです？あの船に乗り込むのは僕だけのはずですよ？」

「私もグレイ・ファントムには野暮用があつてね。なあに、おまえの邪魔はしないさ、おつと！」

ヴィスタの目の前に敵機のスラスター・ビームが飛んできた。それを巧みな操縦で彼はよけきつてみせた。

「なるほど、なかなか通してはくれないか…」

突然増えたスター・ストライカーを撃墜しようと敵もやけになつてゐるようだ。先ほどとは打つて変わって、敵機の数が増えた。レーダーでお互いの位置を確認しないと、目視では探しきれないほど二人の距離が離れていく。しかし、グレイ・ファントムには確実に近づきつつあった。

「ジライ。あの船への突入ポイントは確認したのか？」

「いえ、まだですが…」

ジライが答えるが早いが、ヴィスターは確実に突入できるポイントを既に探し始めていた。

「ふむ、やはりここだな。ジライ、聞こえるか？」

「はい、聞こえます。」

「よし、私の位置は確認できるか？」

「はい… できますが…」

スピーカーからジライのくぐもった声が聞こえた。それはヴィスターのもろみをしながら感ずいているようなふんいきだ。ヴィスターはニヤツと口元を歪ませた。

「今からあの船に乗り込むぞ！ 突入ポイントは敵戦闘機の格納庫だ！」

「え… 格納庫… ! ?」

ヴィスターはジライの驚きなど気にもせず「着いて来い！」と言いながらエンジンをフルスロットルにした。ヘイゼルは猛加速し一気に最高速度に達した。

「ちょ、ちょっと！ 待ってください」

ジライも置いていかれないようにスタートライカーライのスロットルを最大にしてヘイゼルの後を追いかけ始める。それを待っていたかのように敵の数が増大した。スタートライカーの警告音は鳴き声のようにコクピットをかけめぐり、コンソールは真っ赤に染まっている。レーダーは敵の数を表示しきれず『索敵不能』が表示された。目の前からは敵のビームがまるで荒らしのように降り注いでくる。それを一機の戦闘機は神業とも言える操縦で避けていく。一瞬でも手元が狂えばあつという間に宇宙のちりになるだろう。やがてビームの嵐が過ぎ去ると、巨大な船体が姿を現した。

グレイ・ファントムだ。

遠めで見ても大きかつたが、近くまでくるとその巨体は見る者を圧倒するほどの大きさに変わった。目の前に聳え立つそれは宇

宙をただようアステロイドの一つみたいだ。一機の戦闘機はその船体を這うかのように飛行している。いつしか攻撃は止んでいた。

「将軍、あそこを見てください！」

ジライが指差した先から、敵の戦闘機が飛び出してきた。

「ほう…わざわざ入り口を教えてくれるとはな。」

ヴィースタは操縦桿のグリップを握り締めた。

「それとも、我々を撃墜する自信があるという事か？」

再び「クピットに警報が鳴り響いた。敵が攻撃してきたのだ。だが、二人の乗つた機は平然とかわしながらポイントに近づいていく。「将軍！ゲートを確認しました！」

「よし、ジライ。ゲートを破壊しろ。突入するぞ！」

ジライはミサイルの照準を合わせ、一気にトリガーを引いた。瞬間、ミサイルが発射され、ゲート目掛けて突き進んでいく。ゲートが爆発したのを確認して一人は一気に飛び込んだ。一人が通過したと同時に、破壊されたゲートは空気が漏れないように隔壁で閉鎖された。

二人は戦闘機を行儀良く並べて着陸させた。格納庫の中には敵の戦闘機はほとんどなく、小型の輸送機が数機置いてあるだけだった。二人は戦闘機から降りるとあたりを見回した。

「おかしいですね…。」

ヴィースタがうなづいた。

「ああ、静か過ぎる。」

いつもならここで敵がわッと出でてくるはずだ。だが、予想に反して船の中は静まり返っている。一人は警戒し、腰に下げているレイブレイダーを取り出した。すると、一人から見て正面のドアがすっと開いた。ランプは青く点滅している。

「こっちへ来いという事か。」

「将軍…罷でしょうか？」

「罷なら…」

ヴィースタはにやつと笑った。

「はまつてみるさ。」
二人はドアの奥へ消えていった。

8、闇の回廊

通路の中は暗かつた。わずかに灯りがともされているが、それでも先は見えない。まるでイシュタルの洞窟の中だ。あの時は初めての任務で、ジライはエースの後ろで震えていた事しか覚えていない。どうやって完了したかもだ。ただ、エースに終始へばりついていた。

「ジライ、なんだか妙な感じだな。」

「…何か感じましたか？」

言つなりジライは腰の武器に手を伸ばした。

「いや、おまえと任務を一緒にするなんてな。まるでエースといふみたいだよ、懐かしい感覺だ。」

ジライは腰から手を引いた。

「將軍、ここにあの黒騎士がいるんでしょうか？」

「分からん。だが、奴からの誘いだ。何があるのは確かだろう。確証はないがな…」

二人は再び闇の回廊の中を歩き続けた。

「將軍…何か聞こえませんか？」

ジライに言われ、ヴィスターは耳を澄ました。だが、何も聞こえない…ように感じる。

「いや、何か聞こえたか？」

ジライは再び耳を澄ました。

聞こえる…遠くから何かが迫つてくるような…

ジライは叫んだ！

「將軍！走つてください！！」

ジライに促され、ヴィスターは駆け出した。

「ジライ…どうした！？」

「隔壁です！」

「隔壁？」

ヴィスターは後ろを振り向いた。…が、何も聞こえないし、見えな

い。

「何もないぞ。」

「でも、あります！後ろから来てるんです！」

ヴィスターはもう一度振り向いた。今度は何か音がする。まるでござい勢いで迫つてくるようだ。そして、それはすぐ後ろまで追いついてきた！

「か、隔壁だと……？」

「だから言つたじゃないですか！隔壁が迫つてくるつて！」

ジライの言うとおりだつた。まだ、音や気配がしない段階でジライには分かつっていたのだ。恐るべき感覚を持つている。

…これが噂に聞くエン一族の能力か…

ヴィスターはそう感じた。

隔壁はとてつもない速さで一人の背後から迫つてきた。すぐ後ろまでやつてきている。このまま走り続けたら二人とも押しつぶされてしまう。ヴィスターは提案した。

「ジライ！このまま走り続けたらこっちが持たない…じきに追いつかれる！」

「そうですね、でもどうするんですか？」

「あそこを見る！」

ヴィスターは前の方を指差した。

「もう少し走れば、横に逃げ道がある。そこに逃げ込もう…」

「名案です！」

二人は横への通路を確認すると、力を振り絞るように速度を上げた。後ろからは、猛獣の牙のように隔壁が迫つてきている。二人の目にはお互いに横にそれる通路しか見えていない。そこまでの全力疾走だ。一人はラストスパートをかけた。そして後ろの隔壁が背中をえぐりそうなほど近くまで来た瞬間…

二人は横に飛んだ。隔壁の音はものすごい速さで通路の先へ消えていった。

「ふう、ジライ。大丈夫か？」

そう言つてヴィスターが後ろを振り返ると、そこにジライの姿はなかつた。

「ジライ！どこだ！？どこにいる！？」

ヴィスターは叫んだ。だが、彼からの返事はない。よく見ると、逃げ込んだ通路の入り口にはあの隔壁があつた。どうやら閉じ込められたのか、ジライとはぐれてしまった。

「最初からこれが目的だったのか…？我々を分断することが…」
ヴィスターはゆっくり立ち上がった。とたんに、寒気を感じた。とてつもない寒氣だ。

「これは…二十四年前と同じ…」

彼が感じた寒氣…それはかつて感じた感覚でもあった。ヴィスターはその感覚のするほうへゆっくり歩き出した。

ジライは、起き上がるとヴィスターがいない事に気がついた。

「将軍…？」

彼は辺りを見回したが、やはりいない。彼の後ろには先ほどの入り口があるが、それは隔壁で塞がれてしまっている。

「敵の目的はこれか…戦力の分断…それとも、ただの偶然か…？」

ジライは腰に下げるレイブレイダーを取り出した。

「敵は目前か…」

ジライの肌に、あの田ナイトパレスで感じた氣配が伝わる。このビリビリと来る感覚は…

ジライは確信した。

「リーディ卿はこの先か…」

ジライは歩き出した。進むたびにあの感覚が伝わってくる。悪に満ちた闇のオーラ…あの日殺された仲間の顔が浮かんでくる。エウリカ、シンディ、そして、マスター・エース。

なぜマスターの顔が浮かんでくるのか、ジライには分からなかつた。だが、その理由もこの先にあるような気がしてならない。

ジライの足が止まつた。

田の前には漆黒に塗り固められた扉がある。中からは、あの感覚がある。存在している。ジライを待っている。闇の甲冑にその身を収め、手には闇の象徴である紫の刃を収め彼を待っている。ジライは伝わってくるプレッシャーに押しつぶされないよう構えていると、扉がゆっくりと開いた。

ヴィスターは階段を登っている。一段、また一段と踏みしめる毎に過去の過ちが蘇つて来る。たった一人の弟子を救えなかつた事、彼の心を理解できなかつた事、そして…

親友と呼べる男の裏切り…

ヴィスターの手にはレイブレイダーナイフが握られている。その先からは、青色に光る刃が姿を見せていた。そして、最後の階段を登り終えると広いホールに出てきた。その中央には、彼をよく知る男が立っていた。

9、再会

その男は一メートルを越す長身に銀色の髪の毛、そして、紅い瞳が輝いている。ヴィースタは見覚えがあった。変わってしまった部分もあるが、間違いない。彼の事は自分が何よりも良く知っていた。赤ん坊の頃から自分が育ってきたのだから……そして、裏切られた……

「ヴィースタはゆっくりと口を開いた。

「やはり生きていたのか、ヴェネット。」

そう言わると、ヴェネットは一ビルに口元を歪めた。ヴィースタのレイブレイダーを握る手が震えている。それは歓喜に震えているのか……それとも、恐怖に震えているのか……

ヴィースタにもよく分からなかつた。ただ、目の前の男を凝視することでしか、今の自分の存在を見出せないような感覚だ。そのためには、今まで生きてきた。

「これで……過去を清算することができる……」

そう言つと、ヴィースタはヴェネットに斬りかかつた。ヴィースタの鋭い切つ先を、ヴェネットはいとも簡単に受け止めた。その紫に輝く剣で。

「クッククック……怒りが満ち溢れているな。その怒りは……」

ヴェネットは剣で受け止めたまま、ヴィースタを跳ね飛ばした。

「私に対するものか?」

ヴィースタは身を翻して着地した。

「いや、この怒りは……二十四年前、弟子が闇に墮ちていくと分かっていながら救う事ができなかつた、自分自身への怒りだ!」

それを聞いて、ヴェネットはまた笑い出した。

「くつくつく……相変わらず偽善だな。その偽善のおかげで、アリスは死んだ。」

ヴェネットはかつての師を狂気に満ちたような紅い眼差しで見つ

めた。

「貴様が殺したんだ！！」

ヴェネットの声がホール一面にこだました。その形相はこの世の全てを憎んでいるように歪んでいた。ヴェネットの心には、もはや闇の雲に支配されているようだ。

「全て貴様が……彼女を失わなければ、今も私は苦しんだりはしない！！」

「だから？」

ヴィスターは冷たく言い放った。彼の意外な返答に、ヴェネットはたじろいだ。

「だから何だ？ 彼女の死が、お前が闇に墮ちた理由だとでもいうのか？ だとしたら間違いだ。彼女の死は関係ない。お前自身に闇を呼び込む要素があつただけの事……」

ヴィスターは再び剣を構えた。

「お前自身の弱さが招いた事だ！」

そして、ヴェネットに斬りかかった。剣が再び交差する。その剣はいつもの穏やかなヴィスターを蝕んでいった。確実に相手の急所を狙い、確実に仕留めることしかしない剣。目の前にある闇……それをすべてなぎ倒す力のみの剣。ヴィスターの理性は、ヴェネットの姿を見たときから脳のどこかに隠れてしまつた。今あるのは、怒りに身を任せるだけの人形のようなものだ。ただ、昔から叩き込まれた騎士としての誇りが、闇に墮ちるぎりぎりの所でヴィスターを止めていた。

ジライは見つめていた。ただ見つめていた。目の前には、あの黒い甲冑が立っている。その手には、紫に光る剣が握られている。ジライの手にも剣が握られている。蒼く輝く、亡きマスターの剣が。「待っていたぞ、名も無き騎士どの。」

甲冑が静かにしゃべつた。その声はやはり、拡声器を通したような声だ。ジライは剣を胸の前に掲げた。アークナイトの儀式のひと

つだ。相手に勝負を挑む時……相手に失礼のなによつ、全力をつくす時……みなその儀式をするのだ。

相手に敬意を表する証として……

「あの時は失礼した。私の名前はエン・ジライ。アーヴナイトの騎士を担う者だ。貴殿ともう一度剣を交えたく、参上した。」

甲冑は全身から白い煙のようなものを吐き出した。

「丁重な挨拶感謝する。」うして再び合間見えよつとは……銀河の意思に感謝せねばなるまい。」

黒い甲冑、リーディ卿は剣を構えた。

「さあ、やろうか。エン・ジライ！」

その言葉とともに一人は飛び出した。一人の間は一氣につまり、紫と蒼の光刃が交差する。ジライが急所を狙えば、リーディ卿は受け流しジライの急所を狙う。そして、それを交わす。まるで、お互いの刃がどこに来るか分かつていてるかのように一人は剣を振つていた。その様子は、まるで師が弟子に仕込む修行のようだ。ジライは確信を得るかのようにリーディ卿の剣を受けていた。もし、自分の読みが正しければ、次の一手をかわした後に隙ができるはず……ジライはリーディ卿の一手をしのいだ。そして、チャンスが来た。隙ができたのだ。ジライはそこに剣ではなく、足蹴りを入れた。リーディ卿は勢いよく後方へ飛ばされた。ジライは驚きを隠せなかつた。自分の読み通りに相手が動いたのだ。ジライはただ倒れたりーディ卿を見つめていた。

「くつ……剣ではなく、蹴りだと……」

リーディ卿は起き上がってきた。

「一体何を考えている?」

「あなたに聞きたいことがある。」

ジライはようやく自分が息が上がっている事に気づいた。

「あなたは、いや……あなたは……エース・マシユロウじゃないのか

？」

10、激突、一つの宿命

「私が…エース・マシユロウだと…」

リーディ卿はふらつきながら応えた。

「解せんな、何を根拠にそんな事を…」

「目の前にあなたがいるからだ！」

ジライは声を荒げた。だが、その言葉は悲しげな響きに変わり、そのまま広大なホールに飲み込まれていった。ジライは続けた。

「あなたの剣のさばき方や…型のとり方…足の動きまで、全てマスターと同じなんだ！マスター・エースそのものなんだよ…」

ジライの言葉を聞いた途端、リーディ卿を頭痛が襲つた。

まだ…

リーディ卿は空いている手で頭を抑えた。この頭痛は、あの日…エルニアでヴィスター将軍と剣を交えた日から彼を襲つた。そして今日まで、頭痛が無くなる日はなかつた。それも、この目の前に立つている若い騎士を思い出す度に…である。常人なら立つてゐる事もできないほどの激痛だろう。だが、彼は耐えている。剣を握る手に力が入る。まるで手に汗を握つてゐるように熱い。手だけではない。体中が熱い。まるで煮えたぎつてゐるようだ。気が付けばリーディ卿の呼吸が乱れていた。拡声器からゼーゼーと荒れた息づかいが聞こえてくる。ジライは彼の異変に気が付いた。

「…リーディ卿…？」

ジライが声を掛けようとすると、リーディ卿は力なくそのまま地面に膝をつき、うなだれた。

「マスター…！」

言つなりジライは駆け出した。その手には思わず力がはいる。剣からは光刃が姿を見せたまま。ジライの脳裏に、あの日がよぎつた。目の前でマスターが斬られ、沈み行く船のなかでそのまま離れになってしまった…あんな事は一度ごめんだ！その想いが、

ジライを突き動かしている。リーディ卿の側まであと少しだ。たまりかねて、ジライは手を差しだした。だが…

ガキン！！！

差し伸べた手の返事は、剣だった。あと一歩踏み込んでいたら、ジライの腕は宙をまつていただろう。間一髪で彼は受け止めることができた。

「マスター…」

声をかけたその先からは、おぞましい程の憎悪の匂いがした。見ると、リーディ卿を、漆黒の闇が包み込んでいた。受け止めた剣からは、いつそうの殺気が込められている。彼はゆっくりと立ち上がり、言った。

「私はエースではない。私の名は…リーディだ…！」

「私自身の弱さだと…」

ヴェネットは突き刺さるような紅い瞳でヴィスタを睨んだ。その瞳からは、かつての師に対する尊敬でも敬愛でもない、憎悪だけが滲み出ている。それを、ヴィスタは何食わぬ顔で受け流していた。ヴェネットの声に力がこもる。

「私のどこが弱い？あの頃とは違う！血の滲むような訓練をただひたすら繰り返し、私の修行は完成した！貴様など…恐るに足らん！」

「ふつ…」

ヴィスタは苦笑した。そして、厳しい目つきでヴェネットをにらんだ。

「相変わらず自意識過剰だな。そんなに私を殺したいか。だったら…」

ヴィスタは、剣の先をかつての弟子に向けるようにして構えた。

「かかるてこい、試してやる。」

「いい気になるなよ…！」

そう言つと、ヴェネットは剣を構えたまま駆け出した。

「ぬあああ！」

叫びながら、ヴェネットはヴィスターとの間合いを一気に詰めた。

(…速い…)

間合いを詰めたヴェネットは、力の限りを込めて剣を振り下ろした。しかし、ヴィスターは簡単に受け止めた。そして、受け止めた剣を力技で押し返すと、その勢いのまま切つ先を突き上げた。ヴェネットを鮮やかに翻り、間合いを広げた。ヴィスターの顔が歪む。

「ふ…動きが鈍いな。その程度で私を殺すなどとは…片腹痛い！」

ヴェネットは再び詰めて、今度は先ほどの大振りとは違った、小手技で攻めてきた。その切つ先の速さは尋常ではなかつた。かなりのスピードで刃先が急所目掛けて飛んでくる。だが、これもヴィスターははじき返し続けた。

「たあああ！！」

ヴェネットの動きがさらに加速した。さつきは百ほどだったの切つ先が、今は幾千の槍に見える。受け止めきれなくなつたヴィスターはからうじて後ろへ飛び、間合いを広げた。

そして、構えをとつた。だが…

「？」

そこに、ヴェネットの姿はなかつた。あるいは、漆黒の闇が広がる床のみだ。ヴィスターは辺りを見回した。だが、どこにもヴェネットの姿はない。ふいに、後ろから気配がした。ヴィスターは振り返るが、何もない。あるのは先と同じ、闇だけだ。辺りは静まり返り、自らの吐息のみが存在した。そして、また気配がした。振り返るが、やはり何も無い。おかしい…何かがおかしい。そう思った途端、ヴィスターはわき腹に焼けるような、鋭い痛みを感じた。目をやると、わき腹から鮮やかな鮮血と、紫色の光が突き出している。

「がは…っ！！」

口から鮮血がほとばしる。彼はその場に倒れこんだ。ヴィスターは

分からなかつた。

やられた！だが、いつだ？奴はどこへ行つた？

闇の中から声がこだます。

「くつくつく…無様だな、元マスター。」

ヴィースタは声を張り上げた。

「どこだ!? ヴェネット！ 姿を見せろ…！」

闇は、その問いに答えた。

「ふつふつふ。いるじゃないか…目の前に。」

「何!?」

闇の中でヴェネットが言つと、少しずつ空間が歪み始めた。そして、そこには先ほどとなにも変わらない景色が姿を見せた。ただ違うのは、自分は床にひざまずき、それを高みの見物と言わんばかりに見下している元弟子の姿があることだ。ヴィースタは、何が起こったのか把握できなかつた。

「くつくつく、闇の恐怖はいかがだつたかな？」

「…闇の…恐怖…？」

「よく見る。貴様のどこにレイブレイダーの傷があるんだ?」

ヴェネットに言われ確認すると、わき腹には血の跡も、レイブレイダーによる穴も開いていなかつた。口元に手をやるが、吐血した様子もない。

「何だつたんだ…？さつきのは…」

ヴェネットはあきれ返つた様子で口を開いた。

「ちつ！ 平和ボケもそこまで来ると幸せだな。自分の身に何が起きたのかが分からんのだからな！ 説明してやろう。貴様は私の殺気に飲み込まれた。そして、その中で未来のヴィジョンを見た。それだけのことだ！」

「…ヴィジョン…」

「そうだ！ 自らの弟子に殺される最高の結末だ！」

… どうか、気づかぬ間に奴の殺気に呑まれてしまつていたのか…

私としたことが…

まだ意識のはつきりしないヴィースタに、ヴェネットは吐き捨てた。

「全く、少し本気を出せばこの程度か。衰えたな、ヴィースタ。」

ヴェネットのその一言が、ヴィスターの理性を吹き飛ばした。

「何だと…」

「聞こえなかつたのか？衰えたと…」

ヴィスターの雰囲気の変化に、ヴェネットは気付いた。相手を射抜くような目つき、今にも飛び掛つてくるような殺氣。そして、目の前に対するモノへの、とてつもない怒り。そこにあるのは、今までの優しいだけの元マスターではなかつた。そこにあるものは…

獸…

ヴェネットの背筋を悪寒が走つた。冷や汗がビリと吹き出す。ヴェネットは分からなかつた。目の前にいるのは、彼がよく知つていた人物ではなかつた。こんな、鋭い殺氣を放つような危険な奴ではなかつた。ヴィスターはゆっくりと立ち上がつた。

「本気じやなかつたのか？」

「何？」

ヴェネットがそう言つ前に、すでにヴィスターは目の前にいた。彼の喉元に剣の光を突きつけて。

「貴様…俺を殺したいんじやなかつたのか。」

ヴィスターの口調が冷たい。まるで、あの方のようだ…ヴェネットがそう思つ前に、彼の体は後方に突き飛ばされた。

「がはつ…！」

鮮血が口から迸る。彼は床に叩きつけられた。胸元に手を添えながら体を起こすと、そこには元マスターが立つていた。

「俺を殺したいのなら、全力でかかつてくることだ。そうしなければ…」

ヴィスターの目つきが狂気に歪む。

「…殺す…」

「ち…」

ヴェネットは鮮やかに身を翻し、ヴィスターとの間合いを取つた。そのまま寝転んでいれば、間違いなく殺されていた。ヴェネットはレイブレイダーを取り、紫の光を呼び出した。唸り声を上げながら、

光が姿を現す。

「私を殺すだと… できるものならやつてみろ!」

そう言い、ヴェネットは一気に間合いを詰めた。そして、先ほど
の速い小手技でヴィスターにかかった。しかし、彼が繰り出す幾千の
刃もヴィスターは軽々かわした。

「ふん。」

ヴィスターは、ヴェネットの幾千の刃をすり抜け、彼の前に立ちは
だかると、そのまま蹴りを入れた。力なくヴェネットは蹴り飛ばさ
れるが、難なく着地し再び間合いを詰めた。

「いやあ!!」

彼は渾身の力を込めて剣を振りぬいた。だが、それも簡単に受け
止められた。

「な…」

「所詮はこの程度か。」

ヴィスターはまた蹴り飛ばした。今度の蹴りは先ほどとは打つて変
わって重く、意識が飛ばされそうになった。かろうじて意識を取り
戻し体を起こすと、目の前には蒼い光が向けられていた。

「これがお前の本気か?」

ヴィスターの問いに、ヴェネットは答えられなかつた。ただ、力の
差に愕然とうなだれるだけだった。格が違う…ヴェネットは思つた。
「腑抜けが! 貴様、この二十四年間何をしてきた! ?」

ヴィスターの怒りが爆発した。

「この程度の腕で私を殺せるとはな、私も見ぐびられたものだ! 修
行を完成させただと? ふざけるな! 貴様の剣はただのままごとにす
ぎん! よくそれで今まで生きてこられたな!」

ヴィスターは元弟子を叱咤罵倒した。ヴェネットもまた、何も反論
できずにうなだれたままだ。まるで、先生から叱られている生徒の
ように。

「ちつ、この程度とは。時間の無駄だったな。」

ヴィスターは剣を閉まつた。

「ヴェネット。今日は見逃してやる。今度会つ時までには、せいぜい私を殺せるぐらい腕を磨くんだな。だが、この次は容赦はせんぞ。出直して来い。」

そう言い残すと、ヴィスターはもと来た道を引き返し始めた。
…ジライの元に急がねば！

残されたヴェネットは、ただ呆然とその場にひれ伏していた。

11、覺醒

リーディ卿の剣は強い。彼の猛攻に、ジライはすんでのところでかわしている。だが、その剣はじわじわと若い騎士を追い詰めていった。

「……くつ！」

ジライを四方から刃が襲つてくる。これをかわし、時には受け止め、なぎ払うが、そのどれもが重く速かつた。何とかしのいでいるジライだが、いつまでも逃げ切れるものではない。

「くつそお！」

叫ぶなり、ジライは反撃につつてでた。一瞬だが、敵が隙を見せたのだ！

「逃がすかよ！…」

敵の懷に転がり込むように入り、その腹に刃を突いた。手応えあり！だが…

「どこを見ている？」

そう言われ、ジライは力強く蹴り飛ばされた。

「うぐあ…！」

声にならぬ悲鳴をあげ、彼の体は壁に叩きつけられた。そのままずり落ち、うなだれている若い騎士に、この黒騎士は容赦なく剣を突き付けた。

「これで終わりだな、エン・ジライ。あんな手にひつかるとほ…遠くなり意識の中、ジライは彼の声を聞いていた。

「全く…」

「隙を見せれば簡単にそこに転がり込む…まだまだ経験の浅い証拠だ。熟練すれば、あの程度のトラップにはひつからんのだよ。」

「…どこまでもよく似てる…これじゃまるで…」

リーディ卿は剣を高らかとあげた。

「説教はこれで終わりだ。ならば、若き騎士よ。」

…マスターの稽古みたいだぜ…

慈悲無く、リーディ卿の剣が振り下ろされた。その先は、ジライの心臓だ。目標に向かつてまっすぐ振り下ろされた剣は、素直にジライの左肩に吸い込まれていくように落ちて行く。全てが終わったかに見えた。しかし…

リーディ卿の手が止まった。いや、見えない力に手を押さえられているかのように、彼の手は震えていた。

「な…くつ…馬鹿な！」

不思議と、腕は振り上げるのには何の造作もなかつた。だが、今一度振り下ろすと、ジライの肩ギリギリで剣が止まる。それ以上下がらないのだ。まるで、彼自身が斬るのを拒むように。

「くそ！何故だ！？何故斬れぬ！？」

そう叫びながら繰り返すが、どれも同じだつた。剣は彼の肩以下に下がらない…つまり、殺せない。リーディ卿は絶叫した。

「何故だ――――――！」

「あんたが、マスター・エースだからだ…」

「…何…？」

リーディ卿が視線を戻すと、若い騎士が立ち上がつていた。肩で息をしてはいるが、その瞳は生きている。まるで信念の炎が燃え滾つているかのようだ。リーディ卿は彼を睨んだ。

「まだそんな戯言を…」

「戯言なんかじゃない…」

「何だと？」

ジライは一步、歩みでた。

「さつきの立会いで確信した。あんたは…いや、あなたはやはりマスター・エースだ。相手をわざと誘い込むように隙を作つたり、小技に大振りを混ぜてきたり…俺が修行時代にさんざんやられてきた戦法だよ。間違いない。今のあんたは違つても、あなたの体は間違ひなくマスター・エースのものだ！！」

「くつ…

リーディ卿は、彼自身が気付かないくらい後ずさりをしていた。いつの間にか、若い騎士との間に距離ができた。彼がそれに気付いたのは、しばらくしてからだつた。ジライの言葉が脳裏に響く。その言葉に、彼は激しく抵抗した。頭を抱え込み、膝をつく。再び激しい頭痛が襲つてきた。痛みと痛みの間に、ジライの言葉が響く。そして、その痛みの先に何かが見えた。

夕焼け…

草原…

少年の顔…

そして光が目の前を包み込もうとした時、ある声が彼を現実へ引き戻した。

「何をしている？ リーディ卿。」

リーディ卿はその声で正気を取り戻した。目の前に立る光学センターのディスプレイには、全て正常と映し出されている。そして、センサーが若い騎士を捕らえた。その表情は硬く曇っていた。

ジライは震えた。手には自然と汗が滲み、膝は心なしか、かたかたと震えている。気を抜けば腰が抜けそうな恐怖感に、彼は耐えていた。精神的にリーディ卿を追い詰めたように見えた彼だったが、ある男の登場により、その苦労は打ち崩された。今日の前で、リーディ卿は何も無かつたかのように立ち上がっている。そして、彼はジライに背中を向け、膝間づいた。

「閣下…」

閣下と呼ばれた男はホールの中段階段を登つたところにある上段、展望ホールに立つていた。その格好は、背丈こそジライと同じくらいだが、髪は短髪で黒く、瞳は紅く燃え、その周りからは修行初めのナイトでも分かるくらいの黒いオーラが漂つっていた。彼は静かに進んだ。

「どうした？ お前らしくない、そんな子ねずみ一匹殺せないのか？」
男が静かに口を開いただけで、辺りが歪む。ジライは震えを抑え

るのに精一杯だった。しゃべりながら男は、階段を下り始めた。

「申し訳御座いません。今すぐ片付けますので…」

それを聞いた男は、口元をニヤリと歪めた。

「そう言つたな。久々に表舞台に立つたんだ。少し遊ばせろ。」

しかし、リー・ディーはその申し出を断つた。

「お言葉ですが、閣下。あの男は私の獲物です。閣下に直接御手を下されでは、私の誇りが…」

「その誇りのせいで、目の前のねずみも殺せんのだろうが。」

男は吐き捨てた。そして、ゆっくりと階段を下りきると、ジライに向かつて言った。

「さあ、かかつてこい。」

待つてましたと言わんばかりにジライは飛び出した。もう震えは何処かに言つてしまつた。さつきまでの二人の会話に、ジライはとてつもなく腹を立てていた。

…俺がねずみ？おれが獲物？ふざけるな…

その怒りはいつのまにか言葉となつて口から飛び出していた。

「俺は、誇り高きアークナイトだつ！…」

男の顔が目の前まで迫る。そして、ジライはレイブレイダーを振りかざした。…だが…

「ゴン」と言つ激しい音とともに、ジライは後ろの壁に叩きつけられた。衝撃が体中に走る。まるで、ナイトパレスでリー・ディー卿のコスマをくらつた時のようだが、ダメージが違う。意識が一気に飛んでしまいそうだった。

「ぐ…は…」

口から鮮血を吐き出し、ジライは倒れた。それを見て、男は声高らかに笑つた。

「くはははは！見たか？リー・ディー卿。ねずみはこうして始末するのだ。お前は可愛い奴だが、いかんせん誇りやら礼儀やらにこだわりすぎだ。ま、そこがいいんだがな…もう用はない。行くぞ。」

男が背中を向けると、リー・ディー卿が止めた。

「閣下。まだ終わつてはおりませぬ。」

「何だと？」

そう言つて男は振り返つた。そこには、先ほど吹き飛ばした若い騎士が身もボロボロに立ち上がつていた。口からは血を吐き、体のいたるところから血は流れ、肩で息をしながら彼は立ち上がつた。男はギッと歯をかんだ。

「閣下。ここはお任せを。」

剣を構え、前に進みだすリー・ディ卿を、男は止めた。

「あれは俺が始末する。」

「な……閣下！先ほどの私めの言葉をお忘れですか？彼は私の……」

男はリー・ディ卿を睨みつけた。

「うるさい！全力でないとはいへ、俺のコスモを受けて立ち上がつたんだぞ。こんな屈辱があるか！奴は……」

その瞳は狂気に歪んでいた。

「俺が殺す。」

そう言つて男はジライに向き直つた。

「お止めください！閣下！」

だが、その言葉も男には届いていない。彼は翻るマントの隙間から手を出した。

ジライは遠くなりそうな意識を掴んだまま立つていた。もう体のどこにも力は残っていない。立つているのも精一杯だ。だが、彼は立つている。男にとって、ジライのその姿こそが屈辱そのものなのだろう。彼に対する憎しみは瞬く間に膨れ上がりついた。

「さあ、これを受け立つていられるかな？」

男の手から、パリリと電気のような音が弾けた。

「これが闇の……抱擁だ。」

そう言つと、指先から黒い稻妻が飛び出した。それはジライ目掛けてまっすぐ走る。ジライにはもう避ける力は無かつた。ただ素直に、彼は稻妻の抱擁に抱かれた。

「うあああああ……！」

ジライの断末魔とも思える叫びがホール中に響いた。ジライの体は稻妻に焼かれ、辺りには彼の焦げる匂いがたちこめた。

「こんなものでは俺の怒りは收まらん。灰になるまで焦がしてやる

！」

「閣下！お止めください！」

男はリーディ卿の言葉を無視して、更に稻妻を走らせた。

「ぎゃああああ……！」

再びジライの叫び声が響いた。

「くはははは……！」

遠ざかる意識の中で、ジライは男の笑い声を聞いた。再びジライの体が衝撃に震えた。もう痛みは無かつた。あるのは、近づきつつある死の足音だけだ。

…この足音は誰だろう。マスター…きっと、マスターだ。

ジライは、足音に向かってさけんだ。

…マスター！マスター！マスター！！！

「…マスター…助け…て…」

最後のほうは聞き取れなかつた。その言葉を最後にジライの意識は消えた。ジライはそのまま倒れこんだ。

「死んだか？ふははは、例え死んでも、その身は残さん！全て灰にしてやる！」

「閣下！これ以上は…くつ…」

またリーディ卿を頭痛が襲つた。だが、今度はさつきとは感じが違う。何か、手を差し伸べられている感じだ。リーディ卿が再び見た。

…夕焼け

…草原

…少年の顔

…そして、差し伸べられた手を…

彼はその手を掴んだ。すると、清らかな光が彼を包んだ。そして

言った。

…さあ…目覚めなさい…

彼が意識を取り戻すと、側にいる男は指先から電撃を発し続けていた。その先では若い騎士が苦しみ、もがいている。いや、そう見えるだけで、すでに死んでいるのではないか？途端、彼は怒りがこみ上げて来た。手に掴んだレイブレイダーから刃を呼び出すと、その切つ先を男の指先に振り下ろし、電撃を弾き飛ばした。

「なに！？」

男は彼の方を向いた。

「何をする？リー・ディ卿！」

男の言葉に、彼はさらに怒りを募らせた。

「戯言を！私は…リー・ディと詮づ名前ではない…！」

「…何だと…」

彼は、剣の切つ先を男に向け、言った。

「私は、アークナイト！エース・マシユロウだ…！」

12、さみうなり、わが友よ…

リーディ卿……、いや、エースは、静かにレイブレイダーを下ろすと、警戒しながらジライの近くまで下がつた。エースはこの男を良く知つていた。恐らく、警戒を解けば簡単に襲つてくるだろ。彼は危険な男なのだ。

エースがジリジリと下がつていく様子を、男はギラついた目つきで眺めていた。

「エース。意識が戻ったのか」

ふいに男はエースに声をかけた。エースはその場で止まつた。
「やはりそうか……完璧に消したと思っていたんだがな……もう一度死ぬか？」

「貴様こそ、まだ生きていたとはな」

男の目つきが変わつた。

「あの日、カイゼル将軍がその命と引き換えに倒したと思っていたが……闇の中で生きながらえたか、シオン」

シオンと呼ばれた男は、懐かしそうな目つきでエースを見た。だが、それも一瞬の事で、すぐに憎しみに満ちた目に戻つてしまつた。「ふん、ジジイの剣などに俺が負けるか。俺はあの時すでに将軍を越えていた。実力が分かつていたにも関わらず俺に挑んできたのだ」シオンは、再びニヒルに口元を歪ませた。

「だが、所詮老体だ。いくら将軍でも年には勝てなかつた。哀れなものだ。あのまま生き恥をさらすよりかは、死んだほうがましと言つもの。今頃、あの世で俺に感謝しているさ。」

それを聞いたエースは怒りがこみ上げて來た。剣を握る手に力がこもる。

「恥だと！？ かつてのマスターに何たる無礼！ 貴様それでも、誇り高き騎士の一人か！？」

「はつはつはつはー！ お前は馬鹿か？ 第一、俺はアークナイト

じゃない。デュエル・ナイツ……ヘルの暗黒騎士だぞ。貴様らとは根底からして違う。一緒にするな。それに、将軍には命を預く代わりに俺の左腕をくれてやった

そう言つて、シオンは自分の左腕を見せた。肘から下は黒い手袋が付けられている。シオンはそれを剥ぎ取つた。すると、中から機械で作られた彼の腕が現れた。それを見たエースは絶句した。

「…………義手だと…………」

エースはじつと自分の手を見た。これと同じ物がシオンの左腕にある。自分の腕には痛みがない。彼にはあるのだろうか……エースは再びシオンを見た。

「闇の支配者である俺の左腕をくれてやつたんだ。将軍もあの世で満足しているさ。プレゼントにしては最高だと思わないか。自分は命を奪われた。だが、少なくとも敵の左腕を切り落とすことができた！これによつて、敵は瀕死の重傷。これを見た可愛い元弟子たちが自分の意思を継いでこの敵を討ち取つてくれるだろう。これで安心して逝くことができる。さらば、我が人生。さらば、可愛い弟子たちよ……銀河の意思よ、彼らに慈悲を与えたまえ……くつくづく…………」

そこまで言つて、シオンは笑うのを止めた。そして、彼の次の言葉がエースの怒りを最高潮まであげる。

「まさしく……愚の骨頂だな…………」

シオンが言い終わらないうちにエースは駆け出していた。その手には、紫に輝く光の刃が収められている。もはやエースの心には、誇りや正義は存在していなかつた。

怒りが、エースを突き動かしていた。

「シオン！ 貴様…………！」

エースは渾身を込めた一振りでシオンをたたつ切ろうとする。かなりの速度だ。並の相手なら一瞬で真つ二つだ。しかし、シオンはそれを受け止めた。彼もまた、光刃をその手に握っている。

「さすがだな。パニッシャーの称号は、まだお前のものか？」

言いながら、シオンはなき放つた。エースはクルリと身を翻すと、ジライの側に着地した。

「それとも、後継者ができたのか？」

「彼が後継者だ」

エースの言葉にシオンは笑いを堪えることができなかつた。

「くはつはつはつはっは！… そこで倒れているのが後継者だと！？」

ナイツ・オブ・ラウンドも質が落ちたな！ もうすぐ死ぬ奴が後継者などと…… ヴィスタならまだ分かるが…… 大老の目も衰えたか！」

エースはチラツヒジライを見た。彼のマスクに装備されている光学センサーが、ジライのわずかな生命反応を捕らえていた。恐らくシオンは気付いていないだろ。エースはシオンに目を戻した。

…… 少しなら時間稼ぎができるだろ。ヴィスタが来るまで何とかせねばな……

エースはシオンを指差した。

「彼を甘くみるなよ、シオン。彼は、最後の希望だ」

エースはレイブレイダーを突き出した。

「お前の勝手にはさせん！…」

シオンも習づかのように構えをとつた。

「ふつ… それではそこの屍よろしく、お前も黄泉の国へ誘つてやろう」

一人を静寂が包んでいく。聞こえるのはお互いのレイブレイダーが発する唸り声だけだ。

互いが隙を狙っている。だが、お互に付け入る隙が無いほど、緊迫した空気だけが辺りを漂つていた。どちらかが動きを見せなければならぬが、二人ともまるで時間が止まつたように静止している。そんな二人を動かしたのは、船の外で展開されている激しい戦闘だった。

一機の戦闘機が被弾した。それはエンジンをやられ、コントロールを失っていた。パイロットは必死に操縦桿を操作し、脱出を試みるが無駄だった。彼の行為も空しく、そのままグレイファンтомの

腹部に墜落していったのだ。そして、そのまま小さな火柱となつた。その衝撃が、二人が対峙している中央ホールにまで届いたのだ。それは、そのまま一人の決着の合図となつた。

始まつた。二つの揺らめく紫色の刃が交差する。一つは黒い甲冑の無表情な顔を照らし、一つは闇に染まりきつた悪魔の顔を照らす。両者は決して譲らなかつた。むしろ、エースのほうが一步リードしているといった感じだ。一人は互いの剣を交差させると、そのまま動かなくなつてしまつた。

「シオン、後悔するなよ！」

「……何の後悔だ？」

「私に機械の体を与えたことだ！？」

「そう言つて、エースはシオンを力で押し飛ばした。

「……くつ！」

シオンはクルッと空中で一回転すると、体勢を整えて着地した。二人の間に若干だが距離が生まれた。だが、二人の緊張に変化はない。エースは言つた。

「お前の最大のミスは……私に機械の体を与えたことだ！」

シオンはエースを睨んだ。

「何だと……」

「私は既に年を取りすぎていた。病にも冒されていた。そのせいで、ヴェネットにやられたが……お前が私を改造したことだ、若さが戻つたのだ」

エースは拳を作つて自分の顔の前に出すと、力強く握り締めた。

「感謝するぞ……一時とはいえ、全盛期が戻つた。これで、過去を清算する」

途端にシオンが笑い出した。

「はつはつはつは……」

「何が可笑しい？！」

「はつはつは、これが笑わずにいられるか…お前は本当に哀れなやつだな。」

「何だと……」

エースのこみ上げる怒りをよそに、シオンは鼻で笑いながら続けた。

「確かに全盛期のお前は強い。俺でも適わないだろ? だが、年老いたお前なら話は別だ。分かるか?」

「……どうじうことだ?」

「口でも言つても分からんだら? 身をもつて体験すればいいだけさ。そろそろ……」

シオンはニヤリと笑つた。

「時間だ。」

シオンがそつまつと、エースの体が急に重くなつた。光学センサーには体のあちこちから出力低下のサインが飛び出す。最後は『危険』というサインまで出てくる始末だ。

「くつ……な、何をした! ?」

「安全装置さ。」

「安全装置……?」

シオンはゆきくじと歩き出した。

「そう、お前の体を機械化するに当たつて、万が一が起つたときのために付けておいたのさ。」

「むう……」

エースは上手く動かせない体に戸惑つていた。力を振り絞つても立つているのがやつとなのだ。これでは、剣も構えられない。

「お前ほどの男だ。味方にいれば心強いけれど、敵になれば手ごわい。だが、安全装置が働けば、お前の体はあつという間にジジイに早変わり……いや、早戻りかな。うまくできているだろ? 」

「貴様……」

シオンはエースの前に立ちはだかった。そして、剣をエースの前に突き出した。

「お遊びは終わりだ。涅槃へ帰れ。」

「ぬああああ……!」

最後の力を振り絞つて、エースは剣を振り上げた。だが、それも空しく弾き飛ばされ、シオンはヴェネット同様、エースの両手首をそのまま斬り落とした。斬られた先から血なのか、オイルなのか。真っ赤な色の液体が吹き出した。エースの目の前が真っ赤に染まる。

「もはや、エースになすすべは何も無かつた。

「お前の言つ最後の希望ももう虫の息だ。あと数分ももたんだろう。先にあの世で待つてやるんだな。」

そう言つと、シオンはエースの左胸を突いた。心臓の位置だ。シオンが剣を引き抜くと、そこからも真っ赤な液体が飛び出した。シオンの顔に液体が飛び散るが、彼は何事もなかつたかのようにエースに背を向けた。

「さようなら、わが友よ…」

シオンのその言葉が、静かに闇の静寂へ消えていった。

最終話　まだ見ぬ運命

ジライはまばゆい光の中を歩いていた。見渡す限り、どこまでも真っ白だった。

光のみが存在する無の聖地。

弟子だった頃に教わった世界だ。まだこの銀河が生まれ出る以前の世界。その一角に歪が生じ、この銀河が生まれた。エルニアに伝わる世界創造の神話だ。その中にジライはいた。だが、何か足取りは重い。

ジライの心にはぽつかりと穴が開いていた。それはビリシヨウもなく暗く、深い穴だった。

…俺は負けた…

ふと立ち止まり目を閉じた。あの光景が蘇る。シオンの手から放された黒い稻妻がジライの体を突きぬいた。あの瞬間、ジライはここへ吹き飛ばされた。その瞬間を思い出すと足が震える。立つていられないほどの震えは、そのまま地面に膝をつかせた。

ジライの心には恐怖が巢食っていた。それもとてつもなく巨大な恐怖だ。目を開くと、全身が汗だくだ。ジライはゆっくりと立ち上がりた。足はまた勝手に歩き出す。ジライはなんとなく自分はもう死んだと思っている。そうでなければ、こんな無の聖地には来ないだろう。足が前に進むたびにジライの心から少しづつだが恐怖が薄らいでいった。

…これでいいんだ…

ジライは自分に言い聞かせた。

…これで、苦しまなくてすむ。俺は精一杯やった…

歩き続けるジライを、彼は呼び止めた。

「ジライ。何をしている？」

ジライは声のした方へ振り返った。ジライは驚いた。そこに立っていたのは、ジライのマスター…エースだった。

「…マスター…？」

「ジライ、どこへ行く？まだ終わっていないぞ？」

ジライは顔を下に向けた。その顔は今にも泣き出しそうなほど歪んでいる。そして、搾り出すかのよう、ぼそぼそと喋り出した。

「もう…終わりました…僕は…勝てませんでした…いや、勝てるはずがない。あれは…化け物だ…」

完全に憔悴しきっているジライに、エースは声を荒げた。

「それで逃げ出すのか。無責任だな。私はそんな風に育てた覚えはないぞ。」

エースの言葉にジライは怒りがこみ上げるのを感じた。その勢いで、エースに向かつて牙を剥いた。

「逃げ出す？馬鹿なこと言わないで下さい。僕は…僕は精一杯戦つたんです！力の差は分かつていて僕は立ち向かつていったんだ。もっと褒めるべきじゃないんですか？よくやつたつて…よく頑張つたつて…親の代わりなら、それぐらいしてくれたつていいじゃないか！！！」

「甘つたれるな…！」

エースの一喝に、ジライは縮こまつた。

「何が精一杯戦つただ！何が力の差だ！そんなものは言い訳に過ぎん！いいか。大事なのは、己の心だ。真の敵は目の前にいる相手じゃない。その相手に対して恐怖や驕りを生み出す自分自身だ！敵に負けるときは、自分の心に負けた時だ。お前は…」

エースはそこまで言つと、声をやさしく、だが悲しそうにして続けた。

「自分自身に負けたのだ。そのお前に、何ができる？何をしてやれる？たしかに私はお前を育てただけだ。その私がお前に優しくなどできるか…慰めなど、私のすることではない。」

それを聞いたジライは先ほどよりも絶望に打ちひしがれていた。

頼りにしていたマスターにここまで言われてしまった。

「マスターなら、分かつてくれると思ったのに…」

ジライの心を絶望の殻が包み込もうとしていた。

ジライが再び歩き出そうとしたその時、聞いた事のない声が呼び止めた。

「待ちなさい。」

どこか威厳のある声だ。ジライは再び振り返った。エースの隣に、もう一人立っている。だが、会った事はない。背丈はジライほどあるだろうか。黒く短くまとめられた髪に、瞳は青い。エースは驚いた様子で声をかけた。

「…ゴウライ…」

男はそう呼ばれると、やせしく微笑んだ。

「久しぶりだな、エース。ここにいるところをみると、お前も魂のみの存在となつたようだな。」

ゴウライは再びジライに視線を戻した。

「ジライ。久しぶりだな。と言つても、わしはお前が生まれた後、すぐにこの世を去つたから初めてまして、と言つべきかな。」

ジライは意味が分からなかつた。

「あ、あの…一度お会いしたことが…？」

「もちろん。だが、お前は覚えておらん。まだ赤子だつたからな。わしの名は、エン・ゴウライ。お前の爺さんだ。」

「はい？」

ますます意味が分からなくなつた。

「全く、頭の悪さは父親譲りだな…ガイライが泣くわ。まあ、いい。ジライ。本来ならば、お前はここに来るはずではなかつた。すんでのところでエースに救われるはすだつたんだが…運が悪く相手の攻撃が強すぎた。これは想定外でな。本當ならば、わしはエースだけを迎える予定だつた。ところが、いざ迎えに来て見たらエースは怒鳴り散らすわ、若い騎士は泣きそうになつとるわ…ちょっと見ておれんかつた。」

ゴウライはため息をつきながら、ジライを見た。

「なあ、ジライ。このままでいいのか？おそらく、あの者を野放し

にしていれば、いずれこの銀河は滅ぶぞ。罪のない者ばかり巻き込まれる。それでお前は満足できるのか？ナイツ・オブ・ラウンドは…アークナイトは、銀河の平和を守るんだろう？それが、わが一族に成り代わっての業のはず。特にお前は一族最後の末裔だ。そのお前がアークナイトになつたのだ。おまえ無くしてこの銀河の平和は守れんのだよ。」

そう言つと、ゴウライはジライの肩を抱いた。

「よく耳をすませ。お前を呼ぶ声が聞こえるだら…お前はまだ必要な存在なのだよ。」

そう言われ、田を開じ耳をすますと…確かに聞こえる。いろんな声がジライを呼んでいた。

ヴィスター將軍…

マーキュリー…

マスター・アン・ジョウナー…

…イリア…！

ジライは田を開いた。その田には先ほどの悲しみは無く、何か水のような清らかな落ち着きが見える。

「みんなが…呼んでる…」

「聞こえたか？お前はこんなにもみんなに必要とされている。お前が思つてはいる以上にだ。それが、お前の存在価値、理由なのだよ。この銀河に秩序と平和を取り戻す存在。それがお前だ。おまえは、一族にとつても、この銀河にとつても最後の希望なのだ。それを忘れるな。なあに、お前はこれからどんどん強くなる。ここから出たら、惑星エレストに向かいなさい。そこでお前はお前の運命を知るはず。」

ジライの体が少しづつ薄くなり始めた。

「お別れの時だ。」

ゴウライは優しくジライの手を握った。

「一度、成長したお前を見たかった。大きくなつた。あの時はもつと小さかつたのに。」

「マスターのおかげです。」

ジライが見ると、エースは背を向けていた。

「エースにはわしからも礼を言つておくよ。みんな、ジライに別れをせい。」

「ゴウライが言つと、ジライを取り囮むように一人、また一人と増えていった。みな次々と手を握ってきた。どれも優しいが一際暖かい手があった。ジライは顔を上げた。そこには女性の顔があつた。

「…母さん…？」

女性は静かに頷いた。ジライの目から涙があふれ出た。

初めて見た自分の母…母の手がこんなにも優しく暖かいなんて…

「泣く奴があるか…！」

声は女性の後ろからだつた。そこには遅しく、そして堂々とした振る舞いの男性が立つていた。

「…父さん…」

「ジライ！お前はエン一族最後の一人だ。何があつても強く生きろ！そして、一族みんなの無念を晴らしてくれ！」

「ジライ…体には氣をつけるんですよ。短い間だつたけれど、あなたの母親になれて良かつた…」

ジライの体が消えようとする時、母は強く抱きしめた。その目からは涙がこぼれている。

「ああ…あの時の坊やがこんなにも逞しく、立派に成長するなんて…銀河の意思よ、どうかこの子の行く末をお見守り下さ…」「

ジライも母を力強く抱きしめた。

「行つて来ます…！母さん…父さん……！」

そして、ジライは完全に消えた。

「エース、礼を言つ。よくあそこまで育ててくれた。」

「ゴウライの言葉にエースは静かに答えた。

「あの子の才能が豊かだつただけのこと。私は何もしてはいない。」

「ゴウライは微笑んだ。

「そうか、だが良かつたのか？最後の別れだつたんだぞ。」

「ふん、どうせ死ねばまた顔を合わすさ。」

「それより、お前泣き顔を見られたくなかったんだろ?」

「な、何を馬鹿な……！」

「『ウライの問いかけに、エースは応え切れなかつた…

ジライはゆっくりと目を開いた。ほんやりだが、人の顔がある。ヴィスター将軍のようだ。その傍らには長髪で長身の男。マー・キュリーだ。ジライはゆっくりと息を吸つた。肋骨の辺りに激痛が走る。生きてる…

痛みがそれを教えてくれた。ジライの覚醒に気がついたのか、ヴィスターが顔を覗き込んだ。

「ジライ！大丈夫か！？」

「…将軍…」

「今救護班が来る！それまでの辛抱だからな。」

そう言つて離れようとしたヴィスターを、ジライは手で掴んで止めた。自分で驚くほど力だった。

「…将軍…彼は…リー・ディ卿は…」

ジライの問いに、ヴィスターはゆっくりと首を横に振った。

「そうですか…」

また激痛が走つた。痛みで意識が飛びそうになつたが堪えた。しばらくすると、救護班が担架を持つてやってきた。ジライはそれに乗せられると、手際よくメディカル・ランチャーに運ばれていった。その様子を見ていたマー・キュリーはヴィスターに言った。

「あいつ、死ななかつたな。」

「半分死んでたさ。」

ヴィスターはそっけなく応えた。

「将軍がコスモで蘇生してくれたからだろ？…礼を言つぜ。」

ヴィスターはフツと微笑んだ。そして、そこにいる全員に声を掛けた。

「さあ、みんな。このフロアの搜索は大体終わつた。我々もそろそ

ろ退散しよう。この船は攻撃を受けすぎて、いつ沈むか分からぬ。

エルニアに帰るぞ！」

ヴィスターがそう言つと、フロア中から歓声があがつた。そして、一人、また一人フロアから出て行つた。最後にのこつたのはヴィスターとマー・キュリーだつた。

「さて、俺も行くわ。將軍もすぐ来るんだろ？」

「ああ。」

この男…何か感づいているのか？

ヴィスターはふつと思つた。

マー・キュリーは駆け出し、フロアから出て行つた。残つたのはヴィスター一人。ヴィスターは出口とは反対の方へ進んだ。そこには奥へ続くドアがある。ナイトの調査では一切開く事ができなかつたドアだ。ヴィスターはコスモでこのドアの鍵を開けた。ドアが開き、奥へ進む。

奥まで行くと、そこにはもうひとつ部屋があつた。そこの中間に何かがある。

それは傷だらけになつた黒い甲冑だつた。

その周りはおびただしい赤黒い血の海。

リーディ卿だ。ヴィスターはそばまで行くと、彼を抱き起こした。そして、そのマスクをゆっくりと外した。

ヴィスターは息を飲んだ。予想はしていたが、あたつて欲しくなかつた。

マスクの中からは変わり果てた彼の友人、エース・マシュロウがいたのだ。顔は青白く、鼻からは酸素を取り込むようだらうか、チューブが繋がれている。頭部のそこかしこにコードやチューブが繋がれていた。これではまるで、生命維持というより無理やり生かしていただようだ。

ヴィスターは声をかけた。

「エース…」

エースはゆっくりと目を開けた。

「……やあ、ヴィスター……」

その声はもうかすれて折り、彼の死期の近さを物語つていた。

「……ジ……ジライは……」

「大丈夫だ、助かったよ……」

「そ、そう……か……」

エースの体から段々と力がなくなってきた。いよいよ近いな……ヴィスターはそう感じた。

「……ヴィスター……」

「何だ?」

「……や……奴は……生き……てい……る……」

エースの言葉に、ヴィスターは耳を疑つた。

「何だと……」

「氣を……つけろ……奴は……」

そこまで言つと、エースの体から急激に力が抜けた。

「エース!」

ヴィスターが激しく体を揺らしても、それ以上エースは応えなかつた。

ヴィスターは、エースの体をゆっくりと下ろした。そして、立ち上がるときの方へ走り出した。

船が爆発を始めた。ヴィスターは猛ダッシュで格納庫へ向かつた。

格納庫にはまだ乗つてきたストライカーがあつた。それもジライのと仲良く並べられたままである。ヴィスターは自分が乗つてきた機に乗り込むと急いでエンジンを掛けた。調子よく一発でかかると、そのまま浮かび上がり、入ってきた扉に向かつてビーム砲で打ち破ると、そこから一気に加速して脱出した。同時に、グレイファンтомは爆音を響かせながら派手に爆発すると、そのまま闇の中へとその巨体を落としていく。ヴィスターは爆発し沈むグレイファンтомに向かつて敬礼していた。

「……さらば、友よ……」

そして、ハイパーードライブでエルニアへの帰路についた。

その後、ジライは全身複雑骨折の為半年入院。

ヴィスターは変わりなく毎日の仕事をこなしている。

マーキュリーは休暇になればバカンスであちこちへ旅行している。

イリアはこれぞとばかりにジライの病室へ通いこんだ。

ヴィスター暗殺に失敗したヴェネットは、追っ手に嗅ぎ付けられぬよう、逃亡の日々を続けていた。いつしか、彼の心からは憎しみが消え去っていた。だが、彼に変える場所は無い。敬愛する師を裏切り、彼を支配していたシオンからも見捨てられたのだ。彼は、追つての目を盗みながら生き続けるしかない。それが彼に与えられた罰であり、運命なのだ。

ジライはまだ気付いていない。その肩に背負っている運命を。あの場所で、ゴウライが言つた事を。彼には確かめる義務があった。しかし、それは彼を再び残酷な運命の歯車へ導いていく始まりに過ぎない…

最終話　まだ見ぬ運命（後書き）

やつと書き終わりました。時間がなく、なかなかサキへ進む事ができずにいましたが、ようやく終わる事ができました。読んでくださった皆様、ありがとうございます。感想等あれば、ぜひお願ひいたします。ちなみに、この話まだ続きが…次回はもう少し読みやすく書きますので、よろしくお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3045d/>

スターゲイザー

2010年10月8日15時50分発行